Osaka University Knowledge Archive

Title	高齢者のネットワークづくりと親子関係
Author(s)	水嶋, 陽子
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3155085
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

高齢者のネットワークづくりと親子関係

水嶋　陽子

目次

序章　ネットワークづくりへのアプローチ ――― 2
高齢化社会論再考
男性の老いと女性の老い
本研究のテーマ
本研究の構成

一章　日本人高齢者の現代的特徴 ――― 8
一節　「老年期」の変容 9
二節　親子関係における新局面 １４
三節　性別ネットワークの展開 １９

二章　老年期の人間関係をめぐる諸研究 ――― ２３
一節　社会老年学の理論 ２４
二節　家族社会学的なネットワーク研究 ２６
三節　都市社会学的なネットワーク研究 ２９
四節　家族コミュニティ問題というテーマ ３１
(1)家族と外部システムの相互関係
(2)家族コミュニティ問題と老年期のネットワーク
(3)本研究の検討課題

三章　地域におけるネットワークづくり ――― ３８
一節　高齢女性のネットワークづくり ３９
(1)高齢女性と主婦役割
(2)主婦役割がもたらす人間関係
(3)高齢女性における人間関係のひろがり
(4)考察　高齢女性と中間領域

二節　高齢男性のネットワークづくり　５０
(1)いまなぜ「老人会」か
(2)高齢男性の「潜在的能動性」
(3)地域におけるネットワークの展開
(4)考察　課題達成志向の人間関係

四章　外部ネットワークと親子関係　――― ６４
一節　子供との関係を選択する高齢者　６５
二節　高齢女性のネットワークと子供に対する選択基準　６７
(1)調査概要
(2)ネットワークにおける子供の位置
(3)子供への選好とネットワークの関連
(4)考察　柔軟性のある親子関係の生成
三節　母と娘を結ぶもの　７３
(1)母娘関係論のなかの母親
(2)調査概要
(3)異質性を含んだ母娘関係の形成プロセス
(4)「娘性」をひろげる高齢女性たち
(5)考察　自己表現の受手としての娘性

終章　――― ８５
・　今日の親子関係とネットワーク
・　高齢男女とネットワークづくり
・　過渡期としての現代

参考文献　――― ９４

序章　ネットワークづくりへのアプローチ

・高齢化社会論再考

高齢化は、国際化、情報化とともに、二一世紀を特徴づけるメガトレンドといわれている。二十年後には国民の四人に一人が高齢者となると予想されており、そのような超高齢化社会をひかえ、老いは今日、家族社会学のみならず、人口学や経済学、福祉や老年学など、さまざまな分野で取り上げられることの多いトピックスである。日本では、一九七〇年に全人口に占める高齢者(六五才以上)の割合が七%をこえる「高齢化社会」の仲間入りをはたし、二五年後の一九九五年にはその比率が一四%をこえ、「高齢社会」へと移行した。

すでに高齢社会となった日本を先頭に、香港や韓国など東アジアの諸地域は、ハイペースで高齢社会にむかいつつある。[高岡,1992;8-10]周知のようにそのスピードはきわめて早く、既に高齢社会になった欧米諸国と比べて、「高速高齢化」地域といわれる。そのため高齢者を支える医療や福祉などの社会的バックアップが間に合わないとか、意識変革が追いつかないとして、一層の危機感がもたれている。高齢化は、一人の高齢者を何人の若中年層が支えるのか、という観点からクローズアップされているのである。

しかし「老年期」は、普遍的ないし絶対的な意味を内在したものではない。文化人類学の片多が指摘するように、どの文化でも「おとな」と「死」の間のカテゴリーが「老人」である。[片多,1990;35]こども期、青年期、老年期など人の一生の各時期は、それぞれの文化により他のライフステージとの関連で分節化され、意味を与えられている。アリエスがこどもの在り方の歴史的変容を明らかにしたのと同じように、老いもその在り方を文化的歴史的な状況により変化させており、その意味で老いは、きわめて柔軟な社会現象である。

洋の東西を問わず、人間のライフサイクルを四季にたとえてみたり、エリクソンや孔子のように人生にいくつかの発展段階を設定したりと、各ライフステージは様々な特徴づけがされてきた。そこにおいて老人は、一方で知恵と指導性を備え人々に尊敬される長老として、他方では物忘れや身体の衰えによりお荷物として、描かれてきた。つまり老年期は

強さと弱さの両側面を含む、膨らみをもつライフステージだというのが妥当な理解のようだ。すると今日、老年期の負の側面が強調されすぎてはいないだろうか。高齢化の進展に伴い老いへの関心は高まったが、我々が老いに対して持つイメージは、全般的にみて、ネガティブで暗いものだ。そのため議論の多くは、実践的な老いの抱える問題への対策、すなわち福祉行政論の角度からなされている。

だが少し我々の周囲を見渡せば、我々が問題視し忌避感をつのらせる老いとは異なる、元気な年寄りが出歩いているのである。歴史を振り返っても、今日の元気なお年寄りのイメージに重なる人々は決して例外的存在ではない。むしろ江戸時代までは隠居という文化的制度により、現代とは別種の老いの生き方が保障されていたようだ。近世の隠居慣行を研究した太田や宗門改帳から隠居の時期を統計的に検討したコーネルは、近世には、少しでも早めに隠居をして、家長という立場を解放された、ある種の自由な身分を楽しもうとする、人々の願望があったこと、そして隠居に代表される老年期は、人々が憧れるいわば特権的なライフステージであったことを明らかにしている。[太田,1992;154-200][Cornell,1983;59]民族学者の高取も、天皇が洛中や洛外で遊び回るとか、長者がお寺参りに精を出すのは、いずれも公の仕事を次世代に譲った隠居の特権であったと指摘している。[ジュリスト,1978,315]

そこで本研究は、社会問題として扱われるのとはやや別の角度から、老年期というライフステージはどのような可能性（と制約）をもった時期であるのかを、考えてみたい。こうした試みは、もっとも支配的な高齢者イメージに隠されやすい、もうひとつの老いの姿を具体的に描く試み、といえる。厚みのある高齢化社会論を目指すならば、問題解決に向けた実践的な議論だけではなく、ともすると見落とされがちな側面を老いの一部として正当に評価することも、必要であろう。

・男性の老いと女性の老い

これまでにも、通常の高齢化社会論とは別の角度から、老いの一側面を指摘する研究が

ある。例えば井上の「老いのラディカリズム」[1986]は、高齢者には若者とは違い先がないため、諸々の社会的拘束から解き放たれた身軽さがあると指摘しており、大村は退くことをメジャーな文化への抵抗のスタイルとして評価し、それを「撤退の思想」[1993]とよんでいる。また栗原は「離脱の戦略」[1997]として、高齢者が産業社会のつくりだす「老い」からはみ出し、若さと老いの境界を流動化させる様子を描いている。いずれも、制度的な老いから多少距離をとり、老いゆく個人を主体的行為者として着目するものだ。

しかしここで気づくのは、三研究が描く高齢者の姿は、どうも男性高齢者を想定しているように受け取れることだ。理論的には女性にもあてはめられなくはない。しかし個を追求して生きる高齢者として、我々の原イメージにあるのは、たいてい仙人や隠者といった男性である。どういうわけか、女性のイメージが乏しいのである。

かつてボーヴォアールが『老い』[1970=1972]において、「人間がその最後の十五年ないし二十年の間、もはや一個の廃品でしかないという事実は我々の文明の挫折をはっきりと示している」と述べて現代社会を告発したことは有名であるが、本書は同時に、歴史をふりかえり高齢者、とりわけ女性がいかに冷遇されていたかを論証している。ギリシャローマの作家からルネサンスの時代まで、高齢者には罵声が浴びせられていた。ただし、男性は富と権力を手放さないことが不当であるとして、女性は老いた身の醜さ故に疎まれきた。

また社会記号論の立場から老いを男女比較したソンダクも、現代社会は女性の老いに対して、よりシビアであると指摘している。[Sontag,1979;72-80]男性は老いると地位ないし権威を獲得するが、女性は老いても高い地位は与えられず、美の喪失に伴い社会的地位の失墜を招く。もちろん現代は大衆長寿の時代であり、高齢男性も希少な存在ではなく、だれもが長老のような地位につけるわけではない。だが社会は生物学的必然によって女性を転落させており、現代においても、老いることに対して社会はダブル・スタンダードをもつと、結論づける。

さらに江原は『今昔物語』を題材に、高齢女性に対する我々のイメージが、山姥か老母

であることに着目した。そして高齢女性が共同体に組み入れられるには、家族や村の知恵袋など家庭的存在である必要がある点を強調する。男性であれば、共同体にいれば長老、共同体を離れると山野をめぐる老賢者である。それに対して女性の場合、共同体を離れては山姥となるしかなく、それが嫌ならば共同体にとどまり祖母役割の押しつけに甘んじるほかないのである。女性には、共同体を離れて一人で老いを生きることが許されていないと指摘する。[江原,1987;258-81]

以上の歴史的、通文化的指摘を、そのまま現代に当てはめるのには無理もあるだろう。しかし老年期に男女でライフスタイルが異なることは、論を待たず確かなことだ。すると今求められるのは、男女の差異に着目して、高齢化問題とはやや別の角度から高齢者像を描くことである。

・本研究のテーマ

さて、ここで対象とする高齢化の、具体的な輪郭を確認しておこう。人口学の知見をふまえて、家族と高齢化の基本構造を整理した落合によると、親子の人口比という点で、現在老年期を生きる人々は過渡期に位置している。人口学的にみると日本の場合、現在七三才以上の人々（人口学的第一世代）には、子供世代として約二倍の人口規模を持つ第二世代が控えている。そしてこれから老年期にさしかかる第二世代は、（自分たち親世代と）子供世代との人口比が、一対二から二対二へと変化する。[落合,1993;81-3]

そのため福祉行政論の視点からは、家族が高齢者を丸抱え出来なくなりつつあること（親子関係の流動化）は、高齢化問題の焦点の一つであるという。だが本研究が問題にしたいのは、そうした事態は高齢者にとって、本当に危機的な問題なのだろうか、ということである。なぜなら、先行研究の視点を引き継ぎ、高齢者を主体的行為者として捉えるならば、彼（女）等は流動化する今日の親子関係に対して、ただ手をこまねいているとは考えにくい。実際のところ、本研究の事例対象となった高齢者たちは、同居という家族形態をとらない人も多く、定年や子供の巣立ちなど老年期特有の出来事により、人間関係の縮小

にも直面している。だが子供との関係を含め周囲の人々とそこそこ満足のいく関係を築いている。つまり老年期の危機といわれる事態に、自分たち流儀の行為によりどうやら対応しているのである。

そこで本研究では、高齢男女を「ネットワークづくり」をしている存在として着目してみる。そしてネットワークづくりへのアプローチを通して、現代日本の高齢男女はどのような制約を抱え、また対応能力をもっているのかを、具体的に把握したい。最終的には、トータルな人間関係を視野に入れたうえで、親子関係が高齢者にとって持つ意味に考察を加える。

・本研究の構成

以上の問題関心より一章では、検討対象である日本の高齢男女の現状はどうなっているのか、家族や地域での人間関係と意識を、国際比較、男女比較にも目配りしつつ統計調査資料から把握する。続く二章では、一章で確認した現状にアプローチするためにどのような分析枠組みが有効であるか、先行研究の理論的検討を行なう。そこからは、親子関係（血縁）とネットワーク（選択縁）の相互関連を、アメリカとの比較で描くというテーマが浮上する。三章、四章は事例調査を元に、日本の高齢者の家族と家族外ネットワークの実態にアプローチする。より具体的には二つの検討課題、すなわち高齢男女のネットワークの質の違いと、高齢女性のネットワークと親子関係についての、分析と考察である。以上をふまえて、最終的には、現代日本において老年期の人間関係は、どのような特質があるのか、に迫りたい。

本研究の一部は、ここ数年の間に学会誌や学内誌に発表した論文に由来している。とりわけ、三章一節は、『ソシオロジ』(1997、№42-2)に「高齢女性分析における主婦役割の視点」として、四章一節は、『家族社会学研究』(1998、№10-2)に「高齢女性と選択的親子関係」として発表したものに、基づいている。また研究の第一段階で、調査費用として、青山なを記念基金(東京女子大学)と家計経済研究所から、資金の援助を受けた。

そして本稿は、様々な学会や研究会で行なった発表や討論に、その重要な部分を負っている。そこで授かったコメントの数々は、私が自分なりの見解を形づくるうえで、たいへん参考になった。なかでも、野々山久也、安達正嗣、春日井典子、山岸健、山岸美穂、河原和枝、清水学、以上の先生方には、とくにお礼を申し上げたい。もちろん、本稿にみられる（であろう）誤謬は、私個人に由来するものである。

また本研究の問題意識やスタイルは、大阪大学人間科学研究科でこそ、形成されるものであったといえる。何年もの間、忍耐強く指導を続けてくださった、大村英昭教授、橋本満教授、山中浩司助教授には、格別の謝意を表したいと思う。研究に関するアイディアを系統立て、より幅広い枠組みで取り組むことができたのは、先生方のご教示のおかげである。そして最後に、大学院での快適な環境と励ましを与えてくれた、動態社会学講座の人々、コミュニケーション論講座(を中心とした)先輩諸兄と友人たちにも、「ありがとう」と伝えたい。

一章　日本人高齢者の現代的特徴

一節　「老年期」の変容

高齢化は、全人口に占める六五才以上の人の割合が高くなることと理解されているが、人口の高齢化の指標となる変数は、老年人口割合の増加だけではない。もう一つ、しばしば見落とされているが、個人の長寿化(longevity)がある。長寿化とは老いの希少性が失われ、老年期を生きるという経験が大衆化することであり、欧米では約二百年かかったこの変動を、老いの世俗化(secular　sift in aging)とも呼んでいる。そして近年歴史人口学では、この長寿化の方が、一人一人の体験する老いを変容させた根本的な要素であると認識されている。

そこでまず、現代との比較に、長寿化以前の老年期の諸相を確認する。平均寿命が五十才に満たなかった時代にも、特定の人たちは長寿だった。例えば一八世紀末のヨーロッパで高齢者は全人口の五％程度を占めており、最も長寿だった集団は、エジンバラの弁護士である。[Laslett,1995,38-41]また日本でも江戸時代の農村における女性の死亡状況を宗門改帳から検討すると、老年期まで生き残る可能性が高かったのは、傍系家族ではなく直系家族の内部に位置する女性であり、なかでも後継ぎや孫に恵まれた人々だった。すなわち老年期を生きることは、経済状況、家族構成、社会階層などの点で、いわゆる恵まれた層に限定されていた。[Cornell,1991]

またラスレットは、長寿化を「老いの世俗化」というものの、老いに付着した宗教性が剥がれ落ちるという側面については、言及していない。しかし日本でも近世から戦前の家制度まで、高齢者は最も先祖に近い存在として崇められるなど、老いの価値には文化的にみていくばくかの宗教性のあったことが、指摘されている。日本人の平均寿命が五十代に到達したのはようやく戦後である。それ以前には、名もない庶民は五十まで生きるのがやっとであったため、七十、八十まで生きられたいのちを畏れ、いとおしむ心は、今日以上に深かったといわれている。[立川,1996;26-7] またこうした時代に長生きすることは、周囲の人を度々死なせる経験に直面することを意味していた。例えば『翁草』を書いた文人朴口は、七十才まで生きたが、四四才で妻に先立たれている。子供は五人いたが四人を

無くし残った娘は孫を三人産んだが、二人は早くに亡くなっている。多くの死別の悲しみに出会っているため、彼は晩年に人間関係の執着を払いのける工夫を身につけたと語っている。このように希少な時代の老年期は、畏れと共に、もの悲しさをともなっているのである。

そうした時代の人々と現代人では、体験する老いの質、そのものが変容しているのである。今日では、だれしも老年期を生きるチャンスが開かれ、老年期まで自分の人生が続くものと考えている。そのような時代の老年期はどのような特徴をもつのか、歴史人口学や家族史の知見をもとに確認しておく。

長寿化をもたらした単独の要因をあげることは困難で、複合的な要因が絡み合い、産業化を含め大きな意味での「近代化」と同時に進行する人口学的変化であるというのが通説だ。[Mitterauer,Sieder,1977=1993;152-6]乳幼児死亡率が高い時代には、病気と死は各ライフステージに拡散していた。それが医療の発達、公衆衛生の改革により、若・中年層の死亡率が急速に低下する。だが死亡率の低下は疾病率の上昇と相関関係にある。病をもちながらも生き長らえるため、死は八十歳代半ば以降の時期に集中することになる。日本においても、例えば五十年前(戦前)と現在では、死亡者の年齢構成は大きく違っている。かつては全死亡者の約四十％を占めるのは十才以下の子供だったが、今では死亡者の六五％までが七十才以上の人によって占められている。近代化過程で乳幼児、若年層の死亡率は徐々に低下し、生存曲線は正方形化する。それは日本の近代においても確認できる。(図一参照)

ケンブリッジ・グループの研究はイングランドを中心に、フランス、スウェーデンのモデルでこうした経緯を検証し、この正方形化の帰結が、人生における第三の時期(The Third Age)の登場だという。[Laslett,1995;50-55][嵯峨座,1993;172-3]第三の時期とは、学童期、就業期に対して、引退後の自己充足的な生活をするチャンスが大きく開かれる時期である。

若年層の死亡率の低下がもたらす長寿化という歴史的方向は、家族構造に変化をもたら

す。そのインパクトについて研究をすすめた家族史家のウーレンベルクは、老年期の歴史的な新しさを、およそ二点にまとめる。[Uhlenberg,1980;313-20]一点目は親としての責任が縮小した状態である、夫婦連れ合い期（子育て後の脱親期）が出現し、その時期が長期化することである。この時期に対する評価は定まっていない。歴史人口学では先に見たように、それを積極的に位置付け、第三の人生とよぶ。なぜなら、年金など公的支援の完成により、高齢者の生活保障のシステムが整い、退職をして独立した生活を営むことが可能になったためだ。だが家族研究者の中には、この時期にまだ彼らの親が生きており、ケアの提供者としての負担が残るため、成人した子供と要介護状態の親に挟まれた「絞り取られる」時期として問題視する人もいる。また体力や経済力の衰えを自覚する、中年の危機と捉える人もいる。

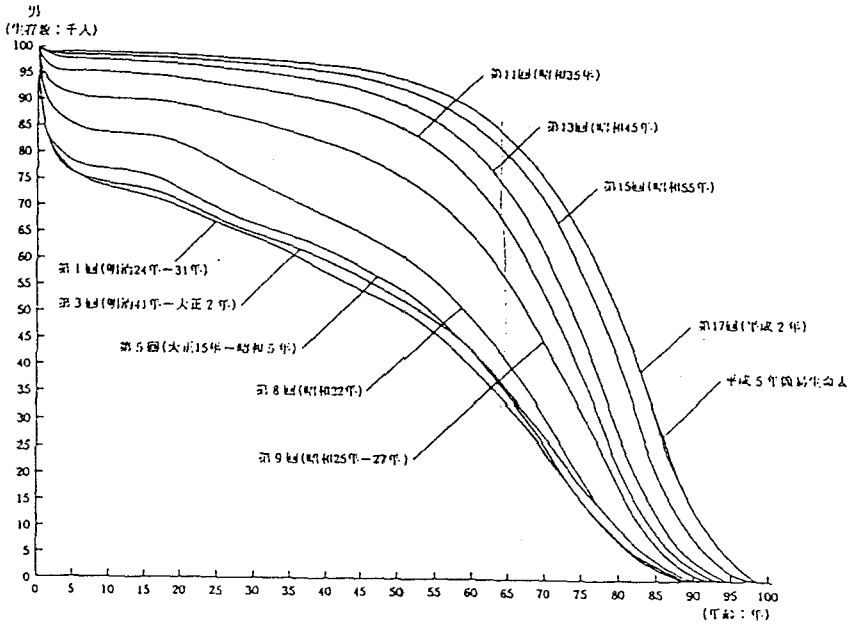
二点目に、女性が寡婦となる時期が人生の最終局面に集中し、寡婦として過ごす期間が長期化したことである。高齢者層にしめる女性の比率は、年令が上昇するにつれて高くなり、八五才以上高齢者の七割弱は女性である。そして洋の東西を問わず、彼女たちの大半は夫を失っている。

こうした傾向は日本人のライフコースでも確認できる。図二をみるとわかるように、老夫婦が定年後、子育てから解放されて生きる期間は、六年から十二年にのびている。これには平均余命がのびたことに加えて、女性の平均産児数が五人から二人へと少なくなり、子育ての終了が早くなったことも一因である。そして女性の場合には、夫の死後、寡婦として過ごす期間ものびている。現在六十代後半の女性は約七年間を寡婦として過ごすが、その期間は、彼女たちの母親世代よりも約二倍の長さである。そしてこれから高齢にさしかかる次の世代では、夫婦連れ合いの期間、寡婦の期間、いずれもさらに長期化すると考えられる。

そして女性が人生の最後を寡婦として過ごすことは、男女で老年期の内実に違いをもたらしている。ここではひとまず有配偶率の男女差を確認しておく。女性の方が長寿であることに加えて夫が年長であることが多いため、高齢女性の三人に二人は現在夫を失った状態にある。図三をみるとあきらかなように、男性は七割が八十才をすぎても妻が生きてい

ると想定できるが、女性は七十代前半ですでに過半数が夫を失っている。このことが高齢者の人間関係にも差異をもたらすのであるが、まずは長期化し、だれもが過ごす時期となった老年期に、高齢者を取り巻く家族状況はどのようなものか、次節で検討する。

図１　生存数曲線の推移



出典：厚生省平成五年度簡易生命表、38頁。

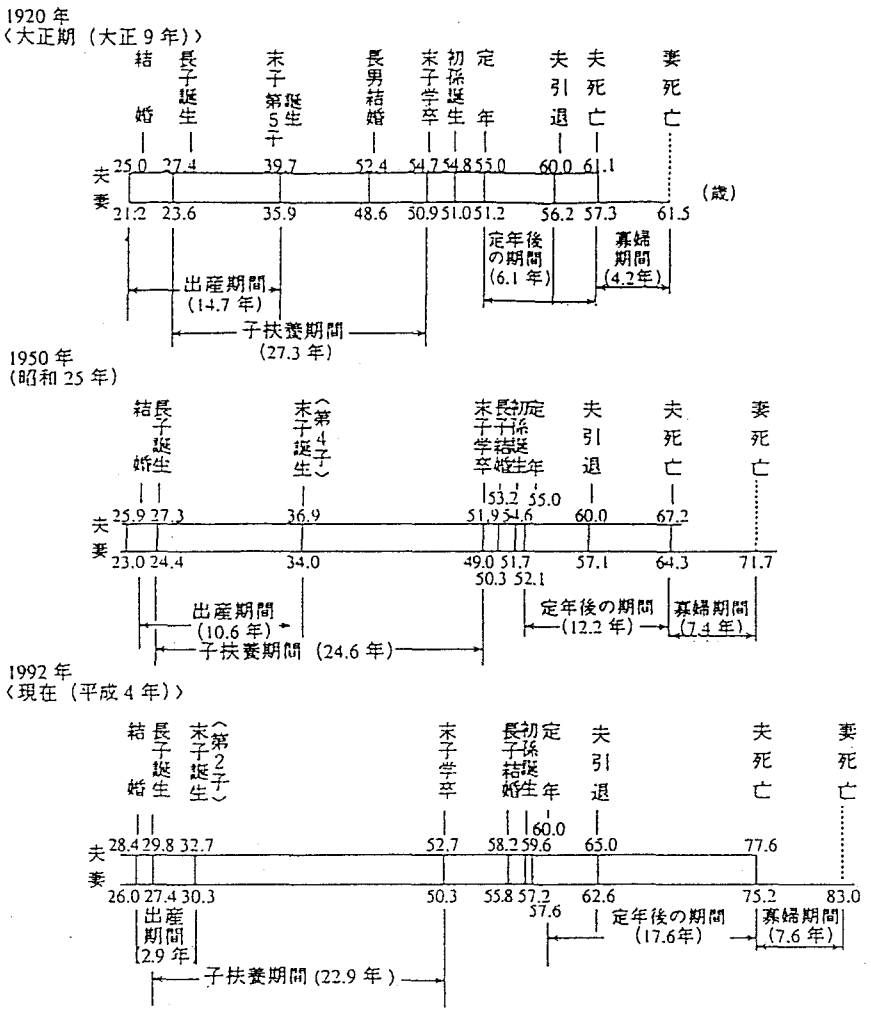
図３　年齢階級別・性別配偶関係の有無による高齢者数と構成割合（万人）

年齢階級	総　数	男　性	有配偶率	女　性	有配偶率
65－69歳	510.4	219.5	90.2%	290.9	61.0%
70－74歳	381.8	156.0	87.4%	225.8	45.1%
75－79歳	301.8	119.7	81.4%	182.1	30.0%
80－84歳	183.3	67.8	71.2%	115.4	16.4%
85歳以上	112.2	35.7	52.3%	76.5	6.1%

1990年国勢調査による

宮本良活編著「高齢化と家族の社会学」文化書房博文社、97頁より転載。

図2　ライフサイクルの変化



（注）1. 大正期は大正9年前後のデータから作成。
2. 出生間隔はコーホート・データ。他はすべてクロス・セクション・データ。
3. 夫妻の死亡年齢は、各々の平均初婚年齢に結婚時の平均余命を加えて算出してある。そのため、例えば本モデルの寡婦期間は、実際に夫と死別した妻のそれとは異なることに注意する必要がある。
4. 現在（平成4年）の夫と妻のライフサイクルの点線部分は、平成37(2025)年における夫妻の推計死亡年齢を示す。

資料：総務庁「国勢調査」、厚生省大臣官房統計情報部「人口動態統計」、「生命表」、厚生省人口問題研究所「出産力調査」

出典：厚生省「厚生白書（平成4年版）」393頁および「社会保障入門（平成8年版）」6頁より作成。

岡村［1997］、27頁より転載。

二節　親子関係における新局面

近年日本の高齢者の同居率は、一九六〇年代の八十％から見れば、五十％代まで低下している。高齢者には同居が機能的だと捉えてきた家族社会学において、子供家族が高齢者を丸抱えしなくなったこと（親子関係の流動化）は、家族の危機の一つである。もちろん要介護状態となった高齢者や、孤独死にいたる独居老人の存在を無視しているわけではない。だが同居率の低下は、高齢者にとってどれほど憂慮すべき問題なのだろうか。例えば『高齢者の生活イメージに関する世論調査』［総理府,1993;28］によると、日本の高齢者は子供に、同居という生活の共同による結びつきではなく、情緒的絆を求める傾向が強まっている。そこでここでは、扶養意識（サポートへの期待感と義務感）と家族形態の動向から、日本の老年期親子の状況を、先に高齢化が進んでいる欧米諸国や、日本と同じ儒教文化圏に属する韓国との比較を中心におさえておく。

日本人の具体的な家族状況は、儒教文化圏に特徴的な三世代同居から、分化している。（図四参照）アメリカやドイツでは、高齢者の四人に三人は夫婦のみ、もしくは単独世帯を形成しているが、日本や韓国では、夫婦や単独世帯と、子と同居（未婚子の場合と三世代の場合を含む）世帯は、割合としては拮抗している。だが世界の国々のなかで、老年期の親子の暮らし方の志向を見ると、日本は同居率の高いアジア諸国寄りである。（図五参照）両親はどのようなことがあっても子供夫婦と住まないほうが良いという意見が、欧米五ヵ国とオーストラリアで概ね六十％を占めるのに対して、日本を含めたアジアの国々で過半数以上の人に指示される考えは、両親はいずれかの子供夫婦と住んだ方が良いという意見であり、一緒に住まないほうが良いという人は一握りである。つまり同居率は低下しても、社会全体の意識のうえでは、高齢者が子供と同居することを一つのライフスタイルと捉えているのである。

また援助期待に関して、アジア諸国では家族と家族外の境界線がはっきりとしており、欧米のように配偶者や子供と、それ以外の親族や友人は、サポート源としては連続してとらえていない。そして日本人の場合、親子同居という経済面、身体面、情緒面で高齢者を

扶養するシステムが健在であった時代の意識を、残している。例えば経済面で見ると、日本人高齢者は公的年金が整備され、子供からの援助を実際の収入源としてあげるものは、欧米並みにきわめて少ない。（図六参照）そうであるのに、老後の生活費を子供に依存することが「ありうべき選択肢」として存在している点では、日本人の意識は、実際に子供からの援助を受けるアジア諸国寄りである。（図七参照）また身体的援助の期待も、同様である。つまり一般に女性の方がサポートネットワークは広いのであるが、アメリカの男性よりも日本の女性の方が、配偶者や子供と家族以外を代替が可能であるとみなさず、家族に期待をよせている。（図八参照）

このように日本の高齢者は、実際に自分たちが子供に依存していなくても、子供を重要な援助源と位置付けている。つまり扶養期待が高いまま、同居率の低下という現象が起きているのである。そこでこの背景にはどのような親子がいるのか、家族形態がより流動化している女性に着目して、考えてみたい。（図九参照）世帯構成を年代別に見ると、子供の扶養能力が低下して高齢者が放り出されているのではないようだ。

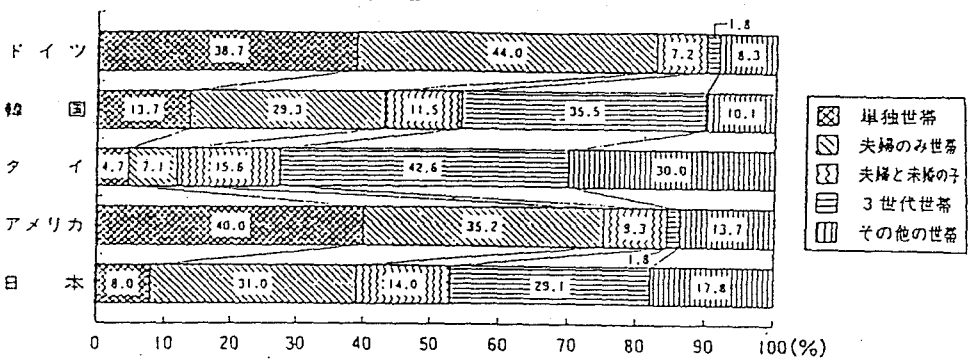
横断的データでないため、正確な時系列変化はわからないものの、一番左の独居率の推移に注意したい。日本と韓国では、年令がすすむにつれて「単独世帯」と「子との同居」が増えるものの、単独世帯の割合は、七十代をピークに頭打ちとなっている。つまり八十才以上になると、一人暮らしをしていた女性も、子供との同居を始めるのである。アメリカのように、八十代をすぎても子供と同居をしない、終身独居ではない。

こうした動向を「元気なうちは別居」という親子双方の志向と重ねて考えると、身体面で不安を覚えターミナル同居が必要になる迄は、夫婦単位、個人単位で世帯を形成する傾向が強まっていると指摘できる。そのため子供と同居しなくても日本の高齢者は、生涯独居を続ける欧米とは、やや違うニュアンスの親子関係を作り出している可能性がある。そして親子関係の片側を担う子供世代の扶養観は、『家庭基盤の充実に関する世論調査』（二十～五十才対象、総理府）や『戦後ベビーブーム世代の生活意識調査』（四十代対象）によると、積極型（子供はどんなことがあっても親を扶養すべき）から生活相応型（自分

の生活力に応じて親を養うべき）へと変容が明らかになっている。（図十参照）だがたえず八割の子供が、親を扶養するという意識を持ち続けている。［松浦,1992;200-1］

以上をまとめると、日本では新局面の家族形態（老夫婦のみや単独世帯の増加）は、欧米と共通する傾向である。だが日本ではターミナル同居に収斂し、また家族への意識はアジア諸国寄りである。つまり従来の家族意識を温存したままに、日本人の老年期に、子供との生活を分離して過ごす時期が出現しているのである。すると同居率低下は、家族が高齢者を扶養する能力を喪失したからではなく、とりあえず元気な間は、夫婦のみまたは独りで過ごす高齢者が出現しているのかもしれない。

図4　家族類型



総務庁［1997］、66頁より転載。

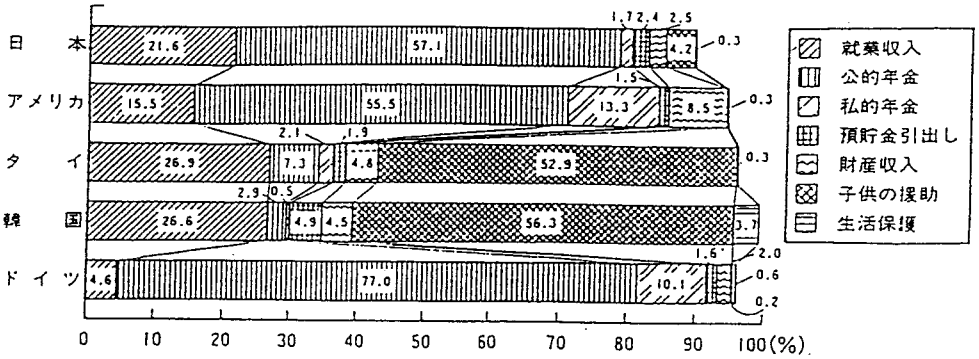
図5　子供との「同居」・「別居」志向性

国名	総数	①	②	③	不詳
日本	100.0	9.5	33.4	55.4	1.7
アメリカ	100.0	59.4	19.4	5.9	15.4
カナダ	100.0	72.2	17.8	5.2	4.8
イギリス	100.0	61.0	22.4	9.3	7.3
フランス	100.0	57.6	19.5	20.5	2.3
西ドイツ	100.0	60.3	23.7	12.7	3.2
イタリア	100.0	47.3	29.1	12.8	10.8
オーストラリア	100.0	59.1	17.8	5.7	17.4
シンガポール	100.0	19.8	11.8	64.6	3.8
インド	100.0	14.5	5.4	79.9	0.2
ブラジル	100.0	43.1	38.9	10.6	7.4
フィリピン	100.0	35.7	27.2	36.4	0.6
韓国	100.0	13.0	22.6	63.0	1.4

① 両親はどんなことがあっても子供夫婦とは住まないほうがよい。
② 両親は配偶者をなくしたらいずれかの子供夫婦と住んだほうがよい。
③ 両親はいずれかの子供夫婦と住んだほうがよい。
資料　1980年国際価値会議事務局編「13ヵ国価値観調査データ・ブック」日本アイ・ビー・エム，1980年8月。

嵯峨座［1992］、VI頁より転載。

図6　主な収入源



総務庁［1997］、210頁より転載。

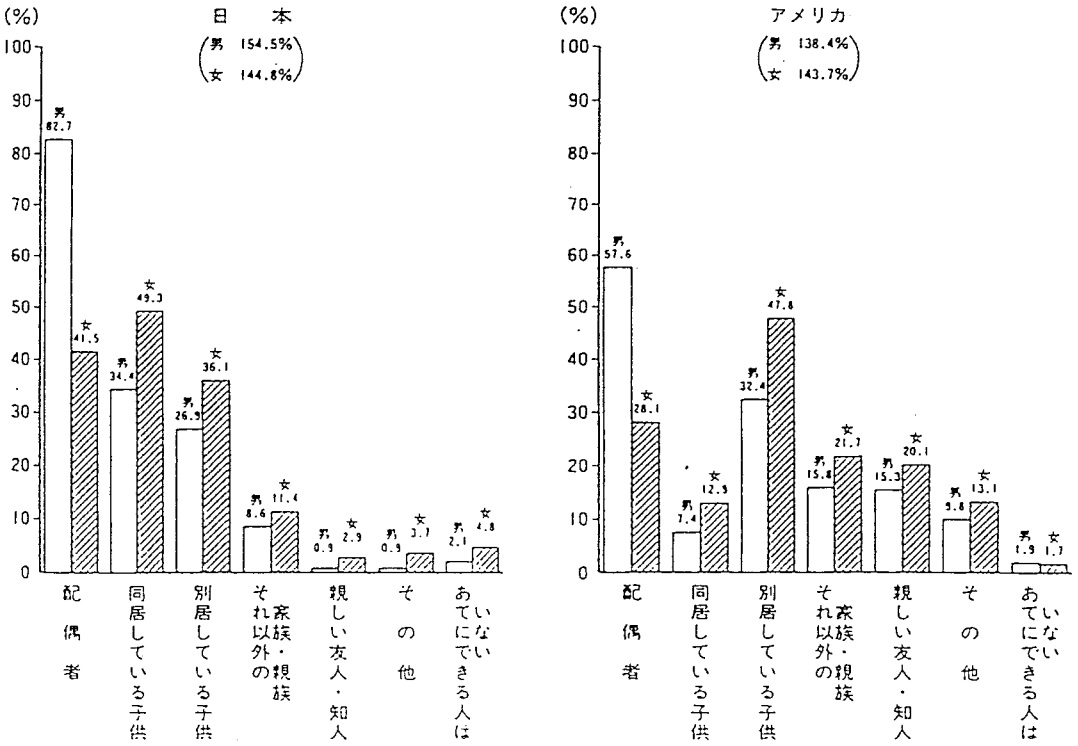
図7　国別「老後の生活における生活費」

(%)

	日　本	アメリカ	タ　イ	韓　国	ドイツ
働けるうちに準備し，他には頼らない	46.6	62.1	41.2	41.9	32.2
家族が面倒をみるべき	12.8	0.8	41.9	28.2	3.8
社会保障でまかなわれるべき	37.7	25.7	16.1	29.2	59.3

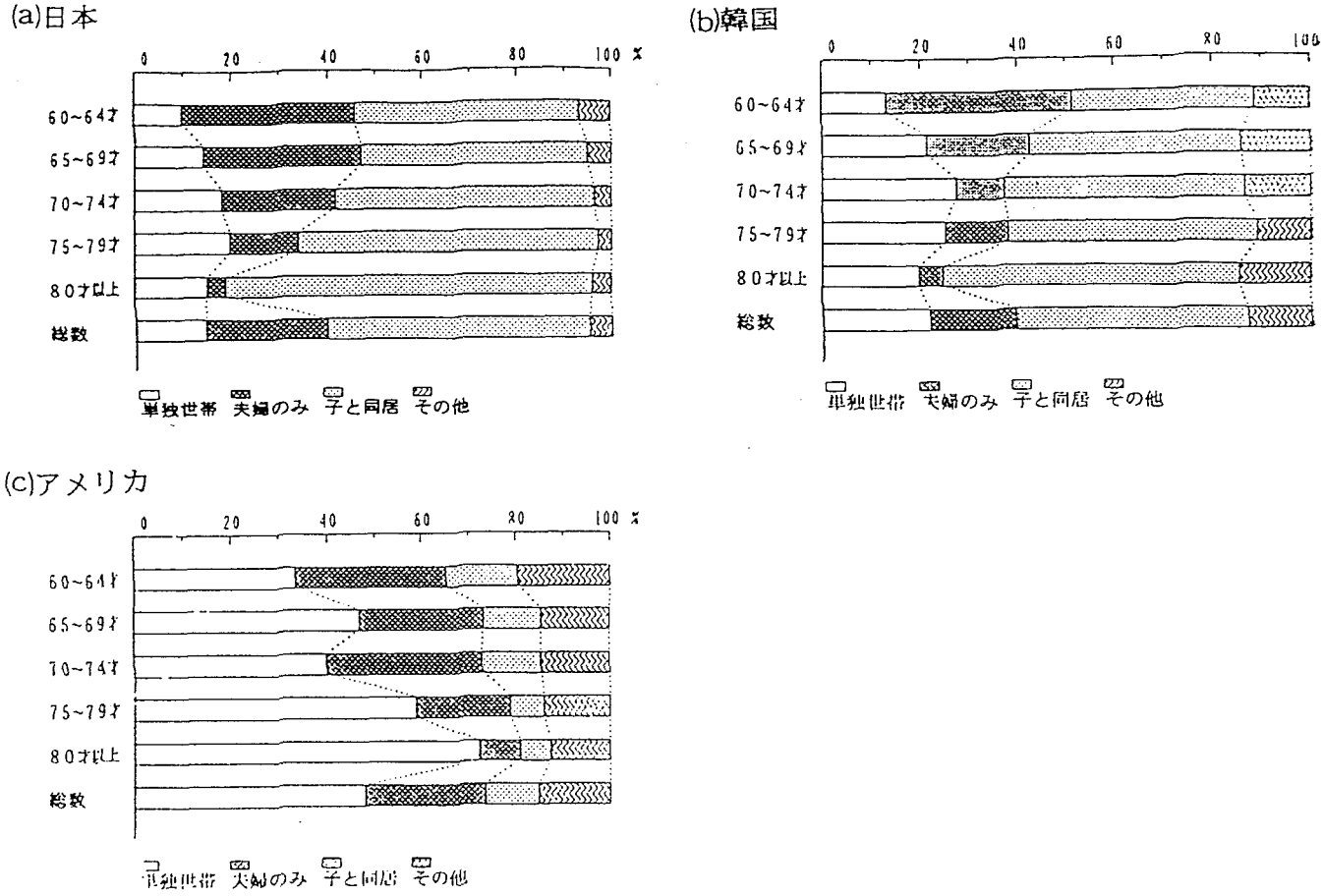
総務庁［1997］、175頁より転載。

図8　①性別・病気で1カ月くらい寝込んだときの世話をしてくれる人(MA)　②性別・病気で1カ月くらい寝込んだときの世話をしてくれる人(MA)



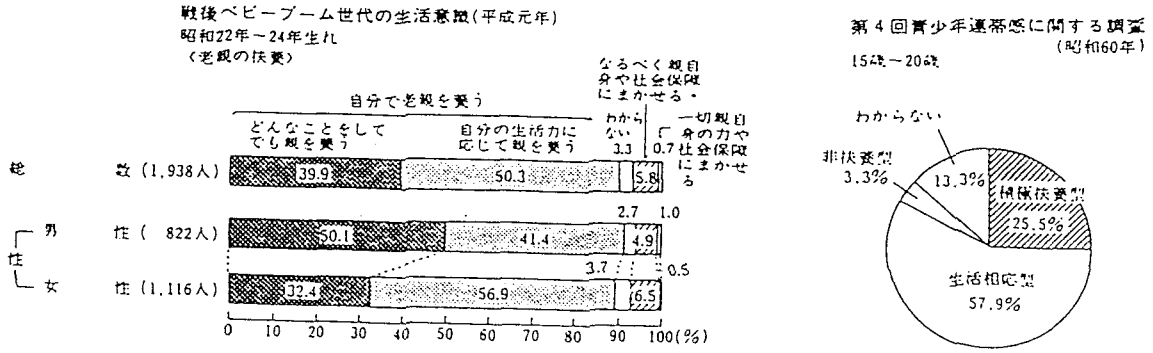
総務庁［1997］、108頁より転載。

図９　高齢女性の年代別居住形態



総務庁［1997］、352、480頁、国民生活基礎調査［1994］、表92より作成。

図１０　子供世代の老親扶養意識



松沛［1992］、200頁より転載。

三節　性別ネットワークの展開

今日の親子関係から見ると、高齢者の生活形態は、夫婦または個人が単位として析出される。しかし親子関係以外の人間関係、すなわち夫婦関係、親族関係、地域の人間関係において、日本では高齢男女の意識の差は大きく、夫婦という枠組みから共通に把握できる部分は限られている。とりわけ老夫婦間には、高齢男性は妻に期待するが妻は夫の方を向いていないという、食違いがある。

老後に重要なことと尋ねられると、男女、年代を問わず「健康」が最も多くあがるが、六十代の男性の場合には、次に良好な夫婦関係（二五％）がくる。（図十一参照）良好な夫婦関係を保つことが老後に重要と答えた人を性、年齢別に見ると、その割合がもっとも高いのは六十代の男性であり、逆にその割合がもっとも低いのはのは六十代の女性(十％)である。すなわち中年期よりも老年期の方が、男女で夫婦関係への期待のギャップがひらくという結果になっている。（図十二参照）また東京都の生きがい調査（1985年）でも、老後の話相手として、男性の四六％は妻をあげるのに対して女性は五二％が友人をあげている。

また老年期夫婦の生活パターンは、夫婦単位で行動する規範が弱く、分業型夫婦カルチャーの産物というべき傾向を示している。例えば余暇の使い方の優先順序として、アメリカやドイツでは皆無に近い、「(優先するのは、夫婦共通の時間よりも）自分だけの時間」という選択肢が、日本を含めアジア諸国では男女ともに一定の指示を受けている。（図十三参照）また『長寿社会と男女の役割・意識』［総務庁、1990;25-26］によると、六十代で夫婦共通の趣味を実際に持つものの割合は低く、もちたいという意向も五十％以下である（女性の方がその意向は一層低い）。こうした状態は、老年期に厚みを増す地域での人間関係にも反映している。

まず余暇を過ごす相手が、三十代と六十代でどのように違うのかを男女別に見ると、男女とも、六十代には、他の人間関係が縮小する中で、地域のみが男女とも唯一つきあいが上昇している事が確認できる。（図十四、十五参照）つまり高齢者は、近所交際や地域活

動など居住地域の周辺で人間関係を充実させているのである。そうした人間関係は、男性と女性が共同で作りだしているのではないようだ。（図十六参照）日本では、男女とも友人といえばほぼ同性をさす。一方アメリカでは、とりわけ男性に顕著であるが男女とも、友人といえば同性と異性両方いる人が大勢を占める傾向にある。つまり地域に広がるネットワークも、男性同士、女性同士という具合に別々につくるようだ。

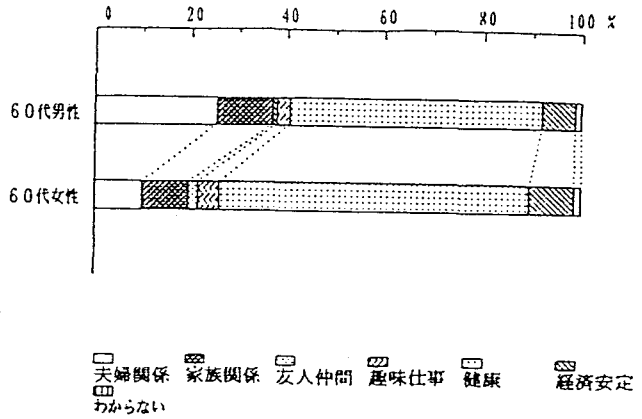
ところで、もともと都市家族のネットワークパターンの研究によると、夫婦のうち女性が親族のつなぎ役を担っている。その結果、親族ネットワークは妻方に比重をおいて、非対称に広がっていると、指摘されている。[三谷,1991]老年期も同様で、高齢男女の親族関係は、女性がイニシアティブを握って妻の親族寄りに発展している。[総務庁、1990;98-99] このことは、高齢男性が、親族ネットワークを作ることを阻まれているとは受け取りにくい。なぜなら広く知られたように、独居高齢者のなかで孤立しやすいのは、女性ではなく、男性である。[須田,1986;38]

以上より浮かんでくる高齢男女の姿を整理すると、男性の場合、老年期を夫婦という枠組みで把握できる。彼らは、親子関係や親族関係では女性にひっぱられており、それは老妻のつくる親族ネットワークに、安住していると考えられる。そのため自分たちでネットワークづくりが必要となるのは、地域においてである。男性の老いの在り方は、地域でのネットワークづくりに反映されると考えられる。一方女性は寡婦として残りやすく、男性よりも同居家族や夫婦など家族の網目から抜け落ちやすい。（独居高齢者の八割は女性である。）しかし老夫婦でいる時点から夫の方を向いておらず、地域にネットワークをつくっているのである。そして親子関係をいかに維持するかは、夫が存命中から常にイニシアティブを取っている。

本研究が対象とする現代の日本は、欧米と比べてハイスピードに高齢化が進む時代である。老年期はますます長期化しており、老いの世俗化が進行中だと予測される。そうした時代に、老年期の新局面として、ターミナル同居までの期間があらわれている。この時期には、扶養期待は温存されたまま、子供と生活を共同にしない傾向がある。ここで検討す

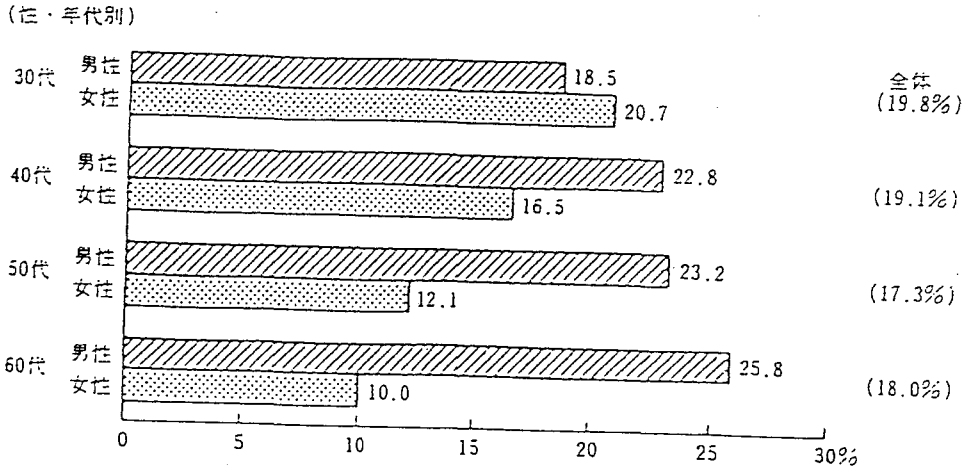
るのは、このような時代背景で、扶養の点では子供を必要としない高齢者は、どのような親子関係（血縁）とネットワーク（選択縁）をつくりだしているかである。

図１１ 老後重要な事柄



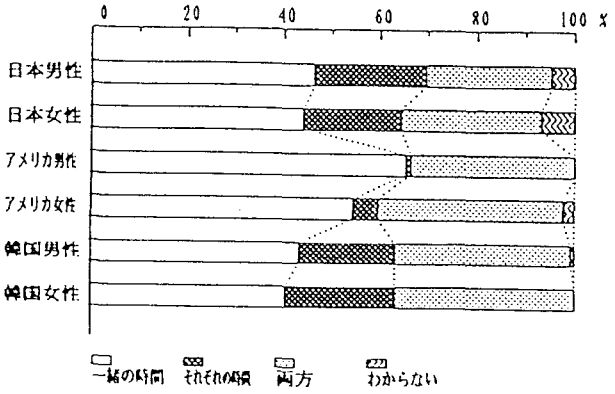
総務庁［1990］、167頁より転載。

図１２　良好な夫婦関係を保つことと　答えた人の性・年齢別



総務庁［1990］、33頁より転載。

図１３ 夫婦で過ごす時間



総務庁［1997］、157頁より転載。

図１４　余暇をすごす相手（男）

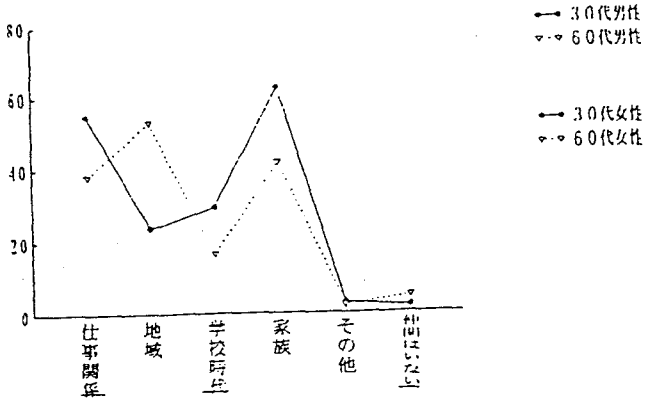
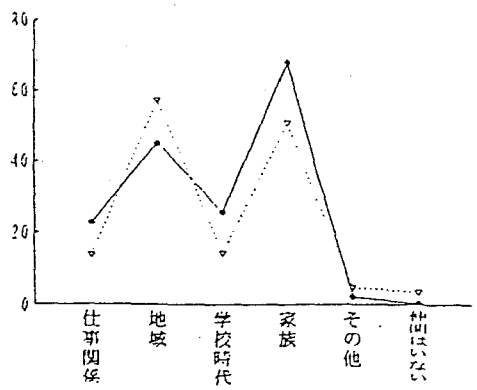
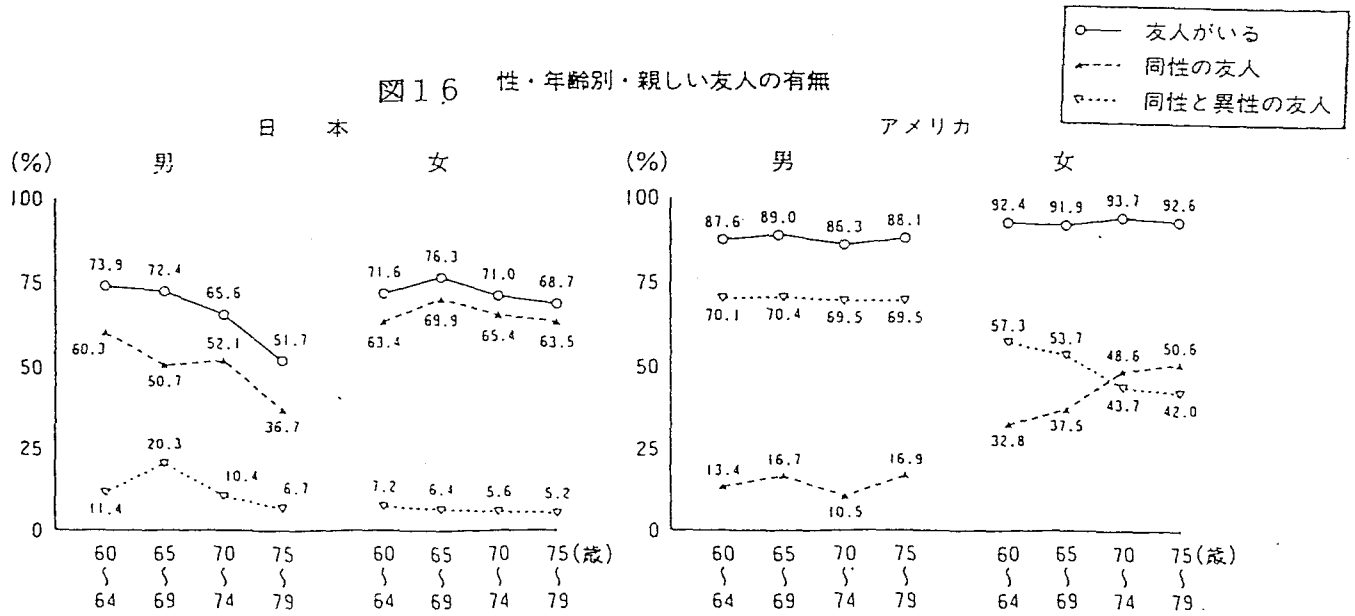


図１５　余暇をすごす相手（女）



総務庁［1990］、155頁より転載。

図１６　性・年齢別・親しい友人の有無



総務庁［1997］、150頁より転載。

二章　老年期の人間関係をめぐる諸研究

一節　社会老年学の理論

副田義也は、日本の社会学において早い時期から老年研究に着手して、『講座老年社会学』などを編集した人物である。その彼は一九九七年の時点で社会学からの老年研究を振り返り、老いへの関心はいまなお低く、その現状の展望を述べられるほどの量的まとまりをもっていないという。［副田,1997;198］日本の高齢者研究としての本研究の分析枠組みを確定していく場合に、たしかに全体としては、研究が蓄積されている欧米の先行研究をレビューするのが王道である。だが注意深く見るならば、日本でも様々な角度から研究が始まっているので、それらにも随時着目していく。

老いに関する学際的な研究は、一九五十年代からアメリカにおいて社会老年学(Social Gerontlogy)という名前ですすめられてきた。その研究は、高齢化が今日のように世間の注目をあびる以前から、東京都立老年総合研究所（都老研）の社会学部において直井道子や前田大作などを中心に、日本でも紹介されてきた。また同研究所では、アメリカの研究手法を取り入れて、日本の高齢者をフィールドに実証的な研究もすすめてきた。

主導者の一人である直井によると、エイジングを研究する目的は「幸福に老いる」(Successful Aging)ための条件を探ることである。そしてエイジングの社会学的研究は、役割移行の諸状況を規定する要因や、役割移行への適応、不適応の条件を探る研究だという。［直井,1993;36］そのため職業生活からの引退や、家族での役割移行である、配偶者との死別にともなう寡婦や寡夫への移行が、研究のトピックスにあがっている。とりわけ同一コーホートを二回、三回と継続して追跡する長期的研究は都老研独自の研究成果であり、そこでは役割や生活の変化に対する加齢の影響が追求されている。［都老研,1986,1991］

だが時代とともに、老年期はさまざまな分野で研究テーマとして注目されている。蓄積は少ないものの、社会学においても、家族社会学や都市社会学などから、独自の問題関心に基づいたアプローチが始まっている。そして『社会老年学』『老年社会科学』などのなかには、もちろん都老研独自の研究も健在だが、テーマが以前よりも多様化している。そこで家族社会学や都市社会学からの研究と重なるものの検討は、後述のテーマ別先行研究

の検討に譲ることにする。ここではそうした全ての研究にバックボーンを提供した、社会老年学の理論の輪郭を、教科書的なテキストを参考に、確認しておきたい。〔Hooyman and Kiyaku,1993;64-83〕〔古谷野,1993;41-50〕

離脱理論(disengagement theory)は、社会老年学の理論としては最も著名であり、多くの論争の引き金となった。カミングたちが提示したこの理論は、「老化とは、人々と社会体系とその他の成員との間の相互作用が減少していく、段階的で不可避な撤退(withdrawal)と離脱の過程である」との命題をもつ。加齢とともにパーソナリティの変化が進行し、その結果、個人にとって社会的離脱が機能的、すなわち幸福な老いのパターンである、というのがこの理論の骨子である。

身体の衰退という生物学的必然により第一線を退くことは、ある程度しかたのないことであると思われる。だがこの理論が後に様々な方面から批判を受けたのは、リタイアメント・コミュニティへの囲い込みなど、高齢者を社会一般や若者から切り離すことを正当化する議論に利用されたためである。

さて、離脱理論に対抗する最も有力な理論が、ハヴィガーストの活動理論(activity theory)だった。この理論の中心命題は、「活動度が大きければ大きいほど生活満足度は高い」ということだ。そのため職業から退職しなければならないときには、それにかわる活動をみつけることが重要だと指摘する。

正反対の主張をもつこの二つの理論の論争は、実証研究のレヴェルでも展開されたが、今日ではいずれの理論も、老いの過程の説明としては不十分だとされている。なぜなら、活動的な老後を楽しむ人もおり、活動や交際を縮小することに満足を覚える人もいる。

そうしたなか、老いの受容に関する第三の理論が、継続性理論(continuity theory)である。この理論の一つの基盤であるアチェリーの退職研究は、職業生活からの引退にともなって生じる生活の変化に、その人が中年期までに形成してきた行動パターンや生活、パーソナリティの継続性を保ちつつ対処していくことを明らかにした。高齢者は引退により失った役割と似た役割を補充し、中年期までの典型的な行動パターンや生活を維持しつつ

対処しようとする。老若に関わりなく、パーソナリティやライフスタイルは千差万別であり、その個別のパーソナリティが老いの受容において大きな役割をはたすという。先の二つの理論が幸福な老いのあり方を共通の規範への適応として捉えるのに対して、この理論では、老年期に起こる出来事に対して、統合されたパーソナリティを保持すること、それが幸福な老いの条件だという。

この継続性の理論に関して、批判もある。(1) しかし継続性理論が展開されてから、個人のライフヒストリーやケースヒストリーの用いる手法の重要性が理解され、研究者それぞれのテーマにあわせて、交換理論、年齢構造理論、象徴的相互作用論などの立場から、多くの仮説の検証や調査研究が行なわれるようになった。[岡村,1997;40]そして社会老年学に限定しなくても、高齢者にとって人生の物語、すなわち自分の歩んできた過去と現在との継続性が、いかに重要であるかは、度々指摘されている。

例えば井上はアレクサンダーを引用しつつ、このように指摘する。人工的につくりだした老人の街サンシティにおいて、世代を異にする人々との交流の中で、自分の過去を確認したり、過去の経験や出来事を語り聞かせたりする機会が失われてしまうため、･･･人生の物語、ひいては自分がこれまで生きてきたことの意味も実感できなくなる。[井上,1993;180-1] そして人類学者のカウフマンは、高齢者は中核的自己イメージにそって統合された過去の記憶をよりどころに、老いにまつわる出来事や自分自身に新たな解釈を与え、現在を生きる意味を獲得すると指摘している。[Kaufman,1986=1988;208] こうして高齢化に伴う身体的、社会的変化に関わらず、当事者は連続性のある物語を保持しているのである。

二節　家族社会学的な研究

老年期の家族社会学的研究では、ネットワークという手法をもちいて、親子のサポート関係の実態把握が試みられている。日本では、従来研究者の関心は親子関係に集中してき

た。その主流は、高齢者の家族類型を同居型、別居型または新しく途中同居型などに分類し、その動向を検討することである。[森岡,1993:136-147] (2) それは扶養の観点から高齢者を同居家族と結びつけて議論するものであり、成果もすでに蓄積されている。だが近年、多くの論者が、高齢者を同居家族と一体化して捉える議論では、変化しつつある現状を十分に分析できないという。[安達,1996:123-4] 子供と高齢者の結びつきにも、新たな視点が求められており、主としてアメリカの研究を参考に、ネットワーク論の視点が導入されている。そこで欧米の家族社会学における親子関係研究を検討したい。

アメリカにおいて、老年期の親子関係は圧倒的に世代間のサポートを媒介にした結びつきとして論じられているので (3)、まずそれらを概観する。老年期の親子関係は、子供が誕生し親子の組合せができたときから親が死ぬまでの、(時間的な) 親と子供の相互依存の変遷として理解されている。親子どちらが受手、与え手になるかは、家族周期とともに変化するが、大きくは四つの局面に分類されている。[Lewis,1991:73]中高年期の親と子の関係には、二つのタイプがある。一つは成人した子供と中高年期の親 (第三期)、もう一つは中年期の子供と虚弱になった親 (第四期) という組合せだ。第三期から第四期の移行は、介護や金銭面で高齢者のニーズが大きくなり、親子の役割が逆転した時であるが、近年はこの役割逆転があいまいなまま親子関係を継続する傾向にある。[Rossi&Rossi,1990] [長津,1997] そのためこれまでは、老年期親子として、要介護期にあたる第四期に議論が集中してきたが、近年はアメリカでも日本でも、高齢者がもっぱら援助の受け手であるこの時期とは区別して、第三期の親子が着目されている。

親と子の援助交換 (家族内の相互依存) は、互酬(reciprocity)の原則として把握されている。[Jerrome,1993:88]つまり老いた親がうける子供からの援助は、長期的視野でみると、これまで与えてきたものを高齢になってから受け取っているのである。そのため第四期に限定すると、親子で交換する援助の量がアンバランスになるが、それでも問題は起こらない。

こうした枠組みの下で、統計的手法により、親と子供の具体的な援助活動が研究されて

いる。援助の内容は、金銭や物品の提供、世話・育児、家事手伝いなど、日常生活を支える手段となる援助と、交際(companionship)と相談など情緒的な援助に分類される。そしてテーマは、具体的に親の受け取る子供からの援助の内容が、親子それぞれの性別、年齢、地理的な距離、世帯構成、経済状態、エスニシティなどにより、いかに変化するかである。[Rossi&Rossi,1990, Hogan&Eggbeen,1990]

そして援助を提供する子どもを題材にした議論も目立つ。息子と娘では援助の内容や親に援助をする動機づけが違うこと、介護をする娘の負担をいかに捉えるかなどである。[Gerstel&Gallagher,1993, Walker&Pratt,1991]日本でのネットワーク研究でも、親にとって、子供やその配偶者、友人、近隣の人たちが、サポートの源泉としていかに機能しているかを論点にしている。[藤崎,1984,玉野ほか,1989]そのためサポートネットワークが、より広範な人間関係をさすソーシャルネットワークと混同されがちである。[野口,1991:89]

老年期親子の援助活動の実態研究から明らかになったのは、第四期とは別個に扱われるべき第三期の特徴である。第四期と比べた第三期の特色は援助の双方向性であり、この時期の標準的な親子の姿として、親はできる範囲内で子どもへの援助提供を続け、子供は親に必要が生じると援助を融通する。[Hogan&Eggbeen1993:1445]つまりこの時期には、高齢者は援助を受けるだけではなく、援助の提供者としての側面ももつ。[古谷野,1995、Gallagher,1994] そして子供への援助の提供により深く関わっているのは、男性ではなく女性だと指摘されている。[Greenberg&Becker,1988]

また二つの時期では、援助の質にも違いがある。第四期は、親の身体状態に応じた必然性のある援助が中心だが、第三期は、親の力不足を補うための援助ではない。[Walker&Pratt,1991] 第三期になされる援助活動の内容は、大きな買物につきあったり、料理作りや庭の手入れを一緒にやるなど、日常生活に関わる相互交流だ。こうした活動は、母と娘の間でさかんに行なわれており、対等な成人同士が日常生活のうえで協力するというニュアンスの援助である。したがってその頻度も規模も、親と子の親密さの程度に応じて変化

する。[Spitze&Logan,1992:307-9]

先に述べたように、本稿の大きなテーマは要介護期状態とは異なる高齢者像を描くことであるため、アメリカの親子関係研究の区分に従うと、第三期が対象となる。すると親と子の結びつきは、固定的というよりも、可変的な要素を多く含むこと、そして高齢者サイドでは、高齢女性がイニシアティブをとることが確認される。

三節　都市社会学的なネットワーク研究

都市社会学的な研究において、ネットワークという手法ないし概念は、高齢者の家族以外の人間関係を捉えるために用いられている。高齢者がもつ家族以外の人間関係として、欧米では友人関係について研究がすすんでおり、それらをレビューした研究をもとにまとめると、[アラン,1989=1993;129-57][Adams,1989;17-43][Jerrom,1993;85-105]友人研究は小規模で質的な研究が中心である。そして対象となる交友関係とは、少数の情緒的に親密な友人ではなく、活動を共にする仲間や近隣の人々など、対面接触のあるという人々というニュアンスが強い。[アラン,1989=1993;141]研究対象は、高齢者に圧倒的に女性が多いことを反映し女性、それももっぱら中産階級である。なぜなら労働者階級や下層階級の場合、教会が唯一の例外である程度で、家族以外の「アウトサイダー」には閉鎖的だと捉えられている。そのため高齢男性や、労働者階級の女性がどのような友人関係のパターンであるのかは、わかっていない。[Lopata,1995;156]そして高齢者の友人は、近隣地域に住む同質性（年齢、性別、婚姻形態、ライフスタイル、経済状態）が高い人も低い人もいるのであるが、同質性の高い友人関係に議論が傾きやすい。[Litwak,1989;76]

そうした制限つきだが、いずれの研究も、老年期には死別などにより友人を失うだけでなく、友人を作り出していることを示している。たとえばバンコフやアダムスなどが寡婦の友人関係の変遷から実証したように、女性の場合、夫の死に伴い夫婦付き合いをしていた友人から、寡婦同士へと人間関係の中心を移動させている。このように友人のパターン

は個人的な選択の問題ではなく、構造的要因による影響が強い。老年期の友人の機能として、老年期に起こる様々な変化への適応（老いへの社会化）を推進していること、そして実生活面、情緒面でのサポート源である事が強調される。交友パターンの類型化や関係維持のためのルールなどは様々示されているが、いずれの研究も、高齢者はおかれた状況の限定の中で、ニーズに応じて友人ネットワーク（の比重の置き方）を再調整していると指摘する。

また八十年代後半より、アメリカでは子供と友人では相互作用が老人の主観的幸福感に与える影響が異なるという知見をきっかけに、両者の相互作用の質的な違いへの関心が高まった。友人は、子供との結びつきよりも、モラール（人生への肯定的態度）に大きな影響をもつ人間関係だといわれる。なぜなら親子にはジェネレーションギャップがあり、子供との役割逆転も受け入れがたい。[Mogan,Bebbett&Markids,1992]そのため高齢者は結果的に不快感を与えられる子供からの援助を避けて、互酬的な関係をつくりやすい友人ネットワークを発達させることもある。[Stoller,1985][Lee et.al.,1995]また援助資源を子供など家族より広範な人々に提供する、ボランティア志向が強いのは、若い人ではなく高齢者だと実証した研究もある。[Gallagher,1994]

日本では、老年期における友人関係の意義が研究者に認知されることが少なかった。ようやく近年、実証的な研究が散見するようになったが、まとまった成果があがっているとはいいがたい。[西下,1987,前田,1988,森岡,1993,藤崎,1997]なにかしら友人関係に関する男女の差異に言及したものとしては、高齢女性のネットワークの広がりを規定するのは別居子との接触頻度であること、[西下,1987;53]男性は友人、女性は家族親族関係が、モラールに優位に関連すること[直井,1994;155]が、指摘されている程度である。

ここで都市社会学に目を向けると、九十年代にはいってから、「元気老人」に着目している。そしてわずかではあるが、ネットワークの男女差など、特定のテーマにそった研究もなされている。ここには要介護者中心の福祉と家族のみからのアプローチでは、高齢化社会の全体像を浮き彫りに出来ない、という問題意識がある。そして理論的には、職業役

割、家族役割が縮小する老年期は、公的地位が無い状態で地域でのインフォーマルな活動を通しての役割（tenuous role=流動役割）[Rosow,1974=1983;15]をひろげていく可能性が高いと考えている。そのため町内会や趣味のサークルなど、地域集団への参加、近所交際の程度を指標に、個人が取り結ぶネットワーク（量、密度、タイプや内容）を、統計手法により検討するのが主流である。

金子勇の『都市高齢社会と地域福祉』(1993)は、近隣関係と地域への関わりについての都市比較研究である。結論の一部として、男性は「奉仕」と「地域役員活動」に代表される「コミュニティ型」の参加が顕著であり、他方女性は「趣味、クラブ活動」に代表される「アソシエーション型」への参加を特色とすると整理している。[金子,1993;206]この二類型はわかりやすく、本稿三章でも利用できる。しかし金子は、老人会や町会など高齢者が参加する集団の特徴により、類型化している。そのため、後に詳述するが、同一の集団に対する高齢者の関わり方や意味付けの多様性を捉えきれない、という問題が残るのである。

また都市研究センター『総合都市研究』（東京都立大学）は、大都市高齢者のライフスタイルに関する様々な実態調査を実施している。どのような条件があると高齢者の社会参加は活発になるのかを検討し、社会参加の類型と、それぞれのタイプの属性分析をすすめる。その一部として、定年をテーマとした研究もある。これまでも社会老年学において、退職後のネットワークの変化は検討されており、目新しいテーマではない。だがここでは定年まで勤めることが少ない女性にも目配りがされている。高齢男性は退職後、居住地域よりもやや広い領域で新らしい関係を作り出しているのに対して、女性は退職後、旧知の人との関係を深める。[森岡,1994;167]

四節　家族コミュニティ問題というテーマ

(1)家族と外部システムの相互関係

ここまで家族社会学と都市社会学からの老年研究を概観したが、今日、家族社会学と都市社会学は、研究対象である家族や地域の流動化という状況に直面している。そのため集団を媒介とした社会関係を分断的、個別的に捉えるという視点からは、現代社会の多様で複雑な人間関係の実態を把握できなくなっていることが大きな課題となっている。[大谷, 1993;250,609]家族像は、集団論パラダイムの転換と呼ばれるように、外部環境との明確な境界線をもつ閉鎖的な集団から、外部環境との相互浸透のあるものへと変化している。またコミュニティ像も、地域限定型モデルから、居住民がそれぞれのニーズにあわせてつくりだす、開放的地域モデルへと変わりつつある。

ここにあるのは、個人の広げるネットワークのある部分に家族があり、家族はそれ以外のネットワークと関連しながら機能している、というイメージである。そのため個人を起点にした、トータルなネットワークに着目する意義が再度高まっている。そして家族と外部システム（企業、市場、社会保障制度や福祉制度など国家）との相互関連にテーマをおいた研究が、すすんでいる。そうした研究群は、「家族コミュニティ問題」と呼ばれている。

例えば、個人の相互扶助と感情的依存の点で、家族の内と外を隔てる境界は不明確になっているとして、ファミリズム論を展開する井上[1995]、企業社会の在り方と家族の性質が、相互に浸透し生成される様子を描いた木元[1995]、社会保障制度、福祉制度の充実とともにあらわれる家族の在り方を説明する概念として、家族ライフスタイル論を展開する野々山[1999]などがある。また都市社会学や都市人類学でも、ボットが『家族と社会的ネットワーク』[1971]で提示した問題意識を受け継ぎ、コミュニティの在り方を、夫婦や親子など家族関係との関連で捉えた研究が増加している。例えば野沢[1995]は、夫婦関係と夫婦それぞれのパーソナルネットワークの相互関連を、近郊都市と地方都市とで比較している。またウォルマン[1984=1998]は同じ地域にすむ、階層、人種などの点で同一のカテゴリーに属する人々であっても、家族の内部システムにより、地域との関わり方は千差万別であることを示している。そうした研究のつみ重ねにより、家族関係と外部ネットワー

クの相互関連の在り方には、地域や家族のライフステージなどにより、バリエーションがあることが明らかになっている。

このテーマの浮上は、方法論として、老年期のネットワークに関わる考察にも示唆を与える。すなわち家族を考察するにも、友人関係を考察するにも、従来のように家族のみ、友人関係のみを見ていては、それが当事者にとって持つ意味は正確にはわからないのである。分析枠組みの問題としては、どこに分析の焦点をおくにしても、家族、近隣や友人などトータルな社会関係という一段上のレヴェルで扱われる必要があるのである。

(2)家族コミュニティ問題と老年期のネットワーク

これまでのところ、家族と外部システムの相互関連というテーマは、老年期のネットワーク研究においては限られている。一つが、友人関係と親族関係の比較検討を試みた諸研究である。代表的なのは、リトワク等の修正拡大家族論からの研究である。修正拡大家族(modified extended family) は、パーソンズの核家族孤立説に対して、親族関係の現代的特徴を説明する、リトワクの造語である。現代の家族は、ひとつながりの近親の核家族が対等に結びついて、地理的距離や職業的地位の差にもかかわらず、重要な互助を継続する拡大家族であるという。そのため近隣に居住して事業経営で協力し、ヒエラルキー構造で結束する、古典的拡大家族(classical extended family)とは区別される。

修正拡大家族論によると、現代のプライマリー集団（親族、近隣、友人）は、固有の構造的特質を持つため、それぞれに適したサポートがある。近隣は地理的条件により緊急事態など対応の速さが必要なときのサポート、親族は生物学的、法的結びつきであるため持続性のある長期にわたるサポート、友人は情緒性の高いサポートに特徴がある。[前田,1988;61]リトワクはこの視点から、高齢者にとってどのようなサポートは家族と友人で代替が可能であり、また不可能なのかをテーマにしている。[Litwak,1989;71-73]そして高齢者が、相談など情緒的援助は遠方に住む子供、物理的援助は子供や友人など近所にいる人など、それぞれの集団特性にみあう援助を組み合わせている事を指摘している。[Silvers

tein & Litwak,1993,261-3]

修正拡大家族は、それぞれの要素間での、対等な協力と自主性が前提となっている。そのため家族や友人と高齢者は、横並びの結びつきである。こうした高齢者、家族、友人の連関は、先に見た友人ネットワークの知見とも符合する。すなわちアメリカでは、高齢者はサポート資源をより多く持つ子供に優位にたたれるのを避け、対等性を維持しやすい友人ネットワークを広げることに熱心である。

もうひとつが、日米文化比較の視点である。老年期研究をする人々の間では、アメリカの高齢者は友人ネットワークを充実させるのに対し、日本の高齢者は生活世界の中心に、家族という固定した血縁関係があるという。そして高齢者は家族内に安住しているため、選択縁である家族外ネットワークが未発達であると、繰り返し報告される。文化比較の観点からは、日本とアメリカでのフィールド・ワークを元に、日米間でこのような違いを生む要因は何なのか、それを中心テーマにおいた研究がすすめられている。

ハシモトは、老年期親子は日米どちらでも、公平で対等な関係を望んでいるという。そのため子供への依存や双方の義務についての価値が等価となるように、親子のあいだで契約がされている。日米で老年期親子の在り方に差異をうみだすのは、その契約と老いのイメージが二国間で違うからである。[Hashimoto,1996;17,72]日本では老いは弱いものとイメージされており、子供を育てた親に対する子供の義務が強調されるため、高齢になった親は、今度は子供が自分たちを世話する番と捉えている。一方アメリカでは老いると助けを必要とすることもあるとイメージされており、高齢者はかつて自分たちが親から自立したように、今度は子供の自立を妨げないことが親の役割と捉えている。その結果、親子関係の組立は、日本では高齢者の子供への依存を正当化し、子供の力を削ぐ方向に、アメリカでは子供からの自立を継続する目的で、高齢者を力付ける方向に進んでいる。[Hashimoto,1996;153-62,171-81]

またアキヤマ達は、なぜ日本の高齢者は、子供からの援助を気兼ねなく受け続けられるのかを、日米の親子関係における交換のルールの違いから検討している。アメリカでは家

族でも友人でも交換ルールは連続しており、相手がだれであれ、短期間に受けた恩恵と同質の返礼をする必要がある。そのため交換資源が乏しくなると、親子関係から退くのが主流だという。一方日本では、家族の外での交換はアメリカと同じルールだが、親子では別のルールが働いている。家族では交換の内容の幅は広く、金銭と愛情が交換できる曖昧さ故に、いつまでたっても完全に返礼は終わらないのである。[Akiyama,Antonucci&Campbell,1997;165-175]

いずれの議論も、高齢者を取り囲む日本の家族として、三世代同居の家族を原型においている。もちろん今日高齢者の家族形態が流動的なことに、目配りをしていないわけではない。[Hashimoto,1996;101-2][Akiyama,Antonucci&Campbell,1997;175-8] だが新しい親子の規範はつくられておらず、今後も家族外部に対して、親子が「砦」になるだろうと観測をのべるにとどまっている。

(3)本研究の検討課題

こうした三つの研究潮流を眺めたが、先に確認したように、ここで対象とする高齢者とは、ターミナル同居まで子供と生活を分離する傾向にある人々である。そうした人々がどのようなネットワークを作りだしているか、親子関係をいかに維持しているのかを考えるには、当然ながら三番目の家族と外部ネットワークの相互関連に着目するという分析枠組みを用いるべきだ。しかしこの分析枠組みからの先行研究には、いくつかの問題がある。

まず第一に、文化比較の常かもしれないが、そこで描かれる日本の家族や高齢者がステレオタイプ化されすぎており、時代の変化を取り込めていない点である。安定した三世代同居家族を日本の家族の基本においた議論だが、高齢者を丸抱えするほど強固ではない親子状態に直面していることこそ、今日の高齢者の特徴なのである。

そして親子と友人を連続したサポート資源と捉える立場からは、今後日本でも親子関係の弱体化にともない友人ネットワークが発達すると指摘するが、果たしてそうなのだろうか。先に統計から確認したように、日本の高齢者は子供と家族外部を連続したサポート源

とみていない。するとは文化比較から浮かび上がってくる、一定量の援助を充足するために子供と外部ネットワーク（近隣と友人）の二つのベクトルのどちらかにいる高齢者という認識が疑わしいのである。文化比較は、本来もっと多様な結びつきがある高齢者の人間関係を、援助に収束させすぎてはいないだろうか。親子も外部ネットワークも、援助を媒介に捉えられる部分のみ扱えば競合する関係のように把握されるが、それは我々が高齢者の結びつきに対するイメージの乏しさ故にそう見えるだけかもしれない。

もう一つ別の問題点として、男女の差異に着目した議論が少ないことだ。ネットワークと親子の連関を考える場合、性差を無視した議論は問題含みである。統計をみると日本では高齢男女で夫婦意識には食違いもあり、ネットワークや親子関係が持つ意味も男女で開きがありそうである。実際のところ、余暇行動は夫婦単位ではなく、男女で別々のネットワークを展開している。そのため現代日本の高齢者を対象とする場合は、夫婦を最小単位とする欧米以上に、性差に着目する必要があるといえる。

そこで本研究は、男女の差異という視点を導入し、親子とネットワークが競合するという捉え方を、二つの方向から考え直したい。まず第一に、高齢男女それぞれの家族外部でのネットワークづくりの特質を明らかにする。性差に基づくネットワークの多様性を示すことを通して、親子関係と競合しにくい、異質なネットワークの存在を指摘したい。

第二に、流動化する親子関係へのアプローチとして、高齢者が親子関係を選択しているとする視点に立ち、高齢女性のネットワークにおいて、親子関係がどのような位置付けであり、また意味を与えられているのかを検討する。選択という視点を老年期親子の関係に導入することの意義は、のちに述べる。

注

（1）代表的な批判として、中年期までの過ご し方を老後の説明要因とするのは決定論だとか、または老年期にしばしば体験される趣向の変化を説明できていないなどである。[Hooyman and Kiyaku,1993:71-2]

（2）従来の研究動向については、安達正嗣「老年期世帯と家族・親族ネットワーク」（『いま家族に何が起こっているのか』一九九六年ミネルヴァ書房）などを参照。

（3）以下のまとめは、一九八十年代、一九九十年代の高齢期家族の研究動向をレビューした次の文献を参考にしているBrubaker,T., "Families in Later Life :A Burgeoning Research Area", *Journal of Marriage and the Family*,52(1990), pp.962-3. Askhan, J., "The Married lives of Older People" in Arber,S and Ginn,J(eds.) *Connecting Gender and Ageing*, Open University Press,(1995), pp.87-97.

三章　地域におけるネットワークづくり

一節　高齢女性の地域におけるネットワークの展開

(1)高齢女性と主婦役割

従来、老年期ネットワークの研究が進んでいるのは、知見は必ずしも一致しないものの圧倒的に女性に関するものである。そこで高齢男性のネットワークづくりの特徴をつかむための準備作業という意味もこめて、まず第一に、高齢女性の作り出すネットワークの特質を整理しておく。大和やスミザースの研究は、中年期までの生き方と老年期につくりだす人間関係との継続性を指摘している。つまり老年期の人間関係は、それまで与えられてきた社会構造上の役割により、ある程度方向付けられる。[大和,1996;351-5][Smithers,1985=1988;114-9]女性の場合、ライフコースで付与される社会構造上の役割は主婦役割である。これまで高齢女性と主婦役割の関連を論じる研究には二つの流れがあり、まずは主流である、老夫婦研究を検討することからはじめたい。

(a)老年期夫婦のテーマ

老年期の夫婦関係は、欧米の家族社会学において、職場を媒介にした社会関係がなくなった後のとりわけ重要な結びつきとして重視されている。研究の焦点は結婚満足度と家事分担の在り方におかれ、成果も蓄積されつつある。それらをうけて日本でも、老年期夫婦の研究がなされているが、(1)ここでは、源流にあたる欧米の研究をみていく。[Brubaker,1990:962-3][Askhan,1995:87-97]

夫婦間での家事分担に関する研究は、老いても主婦役割から解放されない女性像を描いている。退職後に双方は家事分担の再編を試みるが、男性が分担する家事は、せいぜい芝刈りや日曜大工など男性的なものである。老年期以前に確立した分業体制をそのまま維持していることが多く、女性の幸福感に否定的な効果をもたらしている。[Keith and Wacker,1996:115-41]

結婚満足度に関しては、何が満足度を高めるかは明らかになっていないものの、大半の研究において、老年期には男性よりも女性の方が、満足度の低いことが指摘されている。

[Quirouette and Gold,1992:257-69][Bernard,Itzin and Skucha,1995:56-68]このテーマから派生して、男性と女性では、退職がもつ意味に違いのあることも明らかになっている。男女両方が雇用労働についていても、女性の場合に限り家庭の責任が退職の理由になり、[Hatch and Thompson,1992:99-113] また経済的必要性がなければ、夫の退職と同時に妻を退職させる圧力が夫婦間で働く。[Arber and Ginn,1995:68-86]つまり女性の場合、退職は主婦役割への移行にすぎないのである。こうした点から多くの論者が、現在の高齢者は、老年期にも夫婦間でジェンダー構造を固定化させていると指摘する。そして夫への主婦役割から解放されないことが、女性の老いの問題だという。

しかしこうした議論をもって、主婦役割ゆえに老年期にも女性は家族から離れられないといいきれるかは疑わしい。例えば社会学者のウィルソンは、高齢女性の主婦としての態度が、家族の縮小にともなって変化することに着目している。それによると、女性は老年期にも家内労働の責任者であり続けるが、家事に費やす時間は少なくなる。そのかわりに近親者とのつきあいや社会的活動への参加をはじめ、生活圏を広げることが多い。[Wilson,1995:107-8]たしかに高齢女性は寡婦として生きる期間、つまり主婦役割を期待する夫が不在の状態がますます長期化する傾向である。すると高齢女性のリアリティにより近づいた、主婦役割のインパクトを考えるには、家事負担とは別の視点が必要である。そこで次に、主婦役割を担う経験をめぐる議論に着目する。

(b)主婦役割を担った経験というテーマ

女性が老年期になにがしかの自立性を確保しており、それは主婦役割を担った経験に起因すると指摘した研究がいくつかある。まず日本の主婦サークルに関する研究[天野,1972;81-90]では、主婦役割の縮小を転機にして、自分の老年を新しい人生を約束するものと捉える中高年女性像が描かれている。姑の座が弱体した今日「本当の自分のため」に生きようとすると、彼女たちは嫁のいる家から目を外に転じはじめるのである。幕末の女性を事例にしたものだが、鶴見和子も同じように、女性がもつ「自己改造能力」を指摘してい

る。それによると、家族への役目を果たして隠居した尼が、同志愛に目覚めて明治維新に参加している。この尼の「死ぬまで育つ秘訣」は、主婦役割を積極的に担ってきたことにあったという。[鶴見,1967;19]

フリーダンも、『老いの泉』において、鶴見と同じく女性が充実した老年期を過ごすのは、主婦役割を担ってきたことに原因があるという。彼女は数多くの実証研究をもとに、なぜ中高年女性は主婦役割を喪失しても、ダメージを受けていないのかを考えた。そして老年学者のことばを引用して、以下のように結論づける。

男性は、企業などで数十年働き続けたのちに退職という変化に直面する。一方女性のライフサイクルは、ひとつの仕事が終わるとまた次の仕事が始まるように、絶え間ない仕事の連続と考えられる。子供を生み育てることは、女性を伝統的な役割に閉じこめるのではなく、･･･常に変化している家族 とかかわり続けていることこそが刺激になり、女性の視野を広くする。[Friedan,1993=1995;168]つまり主婦役割を担う者は、役割の非連続性と変化を被るため、豊かな柔軟性を身につけることが可能である。そしてそれが、老いという新しいライフステージを生きるときに力を発揮する、という。

ロパータの研究によると、寡婦になった女性は、夫婦でいたときとは違った人間関係を近隣や親族との間でつくりだすという。そして夫の死で「自由になった」と感じているため、他人のテンポにあわせて暮らすことを嫌がり、子供との同居に消極的である。また再婚は、主婦役割を期待される関係へ戻ることとみなされており、それを拒否する寡婦も多い。[Lopata,1996;141-5,162-72]

こうしてみると、高齢女性を主婦役割ゆえに家族関係に結びつけてきた従来の研究とは別の側面が、なにか彼女たちをより広い人間関係へと押し出すものが、主婦役割にはあるようだ。けれども、男性の老いの問題が定年退職により社会から切り離される点にあり、女性は社会からの孤立が問題とされる主婦役割を担っている。その女性が家族構造が縮小する場面で、豊かな人間関係を作りだせるのはなぜなのか、それはまだ十分に説明されているとは思えない。実際にフリーダンも、高齢女性の強さに関しては、ますますわからな

いことが多いと述べている。[Friedan,1993=1995;169]そこで次に、主婦役割を担った経験が高齢女性にもたらすインパクトを家族内部、家族外部それぞれにおいて検討する。その後に事例から、高齢女性がつくりだす人間関係の具体的なイメージを探る。

(2)主婦役割がもたらす人間関係

(a)家族内部での余剰能力

近代化の過程で家族は、主婦としての女性が牽引役となり、外部環境から区別される集団になった。そのため周知のように、近代の家族とは女性の周囲に作られた人間関係である。近代的な主婦の生成は同時に、家庭内で介護対象となる高齢者を生み出す過程だったことがわかる。(2)

日本の近代化過程では、若い女性を近代社会にふさわしい良妻賢母へと育成する教育が、公教育と啓蒙機関を通して施されていた。そこでの教育内容は、結婚後、家庭生活に役立つ「家事」を習得させることに重点がおかれていた。裁縫などと共に、家族の健康を守る家庭衛生もその科目の一つだった。女子教育においてバックボーンとなった良妻賢母思想は、「男は仕事、女は家庭」と男女の役割を性により分離するが、両性を人間としては平等と捉える思想である。[小山,1991;237] そのため家庭が主婦役割の遂行の場となるとき、(家内衛生も含めて) そこでの活動は、男性の外での仕事と同等の社会的意義が付与される必要があった。

家族の健康を守る女性の活動に社会的意義を与えるために必要だったこと、それが女性の活動の成果である健康に高い評価を与えること (健康の価値化) である。当時の家政書や医療啓蒙雑誌は、健康を社会的に重要なものとして崇めている。例えば「健康にして貧しきは富て病めるよりも幸いである。健康は黄金よりも勝り、財産よりも尊い。」[婦人衛生会雑誌,303;12]という具合である。女性の活動の成果である健康が社会的に価値あるものとなることは、健康を守るという女性の家庭での役割と、男性の社会的職業の間に、連続性をつくりだす。そしてこの連続性により、男性の職業と同様に、家庭内での健康管

理は女性の「職業」となる。当時の言説はそれを、「女性の天職」と表現している。「一家の家長たるものが終日外でことをとる」ことと「その天職としては優劣はない」ため、家族の健康管理は男性の職業と同等だった。［山本,1988;42］こうして、主婦の働きにより達成される健康が、個人の幸福のシンボルとなるのに平行して、家庭は、男性の職業領域と比肩しうる女性の職業領域になっていったのである。(3)

家族の健康を守る主婦が家庭に誕生すると、老いは主婦が管理する対象となる。近世に貝原益軒が書いた『養生訓』によると、養生の基本は「我が身を害なうものを去らせる」とあるように、養生は老いた本人がすることだった。[新村,1991;189]それが近代になると、老人は「自身にてはとても満足なる衛生法を守り行なうあたわず」[北渓,1908;251]として、無能力さが強調される。そうした老人の代わりに、「老人を絶えず保護すべき、その責任と義務を有するもの」[北渓,1908;251]と位置付けられたのが、主婦である。その主婦に対して、養生が必要な老いの衰えは語られている。例えば当時の啓蒙雑誌は、「骨のもろさ、食物の消化吸収能力の低下など、･･･老人の身体の方の特徴を考えて保護するように努めましたならば、･･･誤りなく養老の道を尽くすことができよう」[婦人衛生会雑誌,333;215]という具合である。

欧米の論者は、近代化過程で老いの身体的、社会的弱さが子供のメタファーで語られる現象を、老いの幼児化(infantalization of aging)と呼ぶ。[Hockey&James,1993]しかし日本の主婦の生成過程を見ると、老いが家族の中でサポートされるものへと、いわば幼児化というよりも家庭内への老いの飼い慣らしが、進行したことがわかる。その結果、日本では家族による高齢者扶養が正当化され、先に見たように今日でも高齢者も子供世代も、うっすらと老親意識を温存させている。しかしこのことは、別の側面も持つ。主婦がいる家庭という場では、高齢者は介護対象としてしか居場所がなくなるのである。(4)そのため元気な高齢者は、逆にもてあまされる存在となってしまう。そしてこのような余剰能力としての老いの側面は、大衆長寿の現代にこそ、リアリティが増すのである。

(b)家族外部への経路

女性が主婦として働く場合、その活動領域は家庭内に限定されていない。上野がいう「女縁」など、近年女性の家庭外でのネットワーク活動は盛んであり、それは個人が参加するかを自由に選べる関係である。だがここで重視したいのは、そうした選択縁とは違い、主婦役割を遂行するとき必然的にもたらされる人間関係だ。家族と外部環境とのつながりに着目すると、主婦役割を担う者が取得する、ある種の人間関係形成能力がみえてくる。

近代の家族は外部環境から区別されており、家事を行なう女性を中心にして一つにまとまっている。しかし女性が行なう家事は、市場化しない労働といわれるように、外部環境にも存在する生命再生産労働(5)の一形態である。見落とされやすいが、家族(主婦)は、生命再生産労働を行なう唯一のエージェントではない。たとえば子育ては、母として主婦である女性を中心になされていても、同時に、様々な制度に支えられている。女性が外で働く場合には、保育所など国家の福祉政策による公務労働が不足部分を補い、また幼稚園など幼児関連産業も子育てに関わるだろう。生命再生産労働を遂行する典型領域には、家族、地域、行政、企業の四つがあり相互に互換や補完の関係にあるのである。[後藤,1990;22-25][井上,1996;12-5]

そのため生命再生産労働を担う点では、家族は外部環境と連続性があり、社会から孤立していない。天木志保美によるとリトワークは、（生命再生産労働にかかわる）よりフォーマルな組織や制度がその目的を遂行するのを助ける点で、家族は、生命再生産労働にかかわる活動の中心に位置すると主張している。それを承けて天木は、主婦が生命再生産労働に関わる活動の担い手であることに着目した。この見地からすると、主婦はフォーマルな組織を利用して生活の必要を充たしており、社会への経路をもつ存在である。こうした女性は「ケアラー」としての主婦とよばれる。[天木,1993;75-85]

オークレーが主婦に対する聞き取り調査を通して明らかにしたことも、家事とは、通常いわれる掃除や洗濯などモノとの関係が中心になる活動だけではないことだった。生命再生産労働は、多様な他者と協同で行なうものであるため、家事には「より公的な活動」、

つまり家族外部との対人関係をともなう活動がある。[Oakley,1974=1980;64-9]主婦は、家族と専門的制度体、ないし他の親族や近隣の人との関係を円滑に保ち、フォーマルな諸組織が提供するサービスを利用する。そうすることで自分と自分の家族の生命再生産を、スムーズに行なうのである。[天木,1993;80]主婦役割を担う経験を通して、女性は、家族外部の(生命再生産労働を担う)諸組織と協力的な関係を維持すること、そしてその結果、生活に密着した人間関係を発展させることに熟達する。(6) 生活の必要に応じた人間関係は、主婦として養った能力の産物なのである。

ここまでの検討をまとめるならば、老年期に女性は、主婦役割を遂行する対象としての家族、という人間関係が縮小する。そのため家庭においては、余剰能力となってしまう。しかし彼女たちは、まだケアラーとして、家族外部で人間関係をつくりだす能力をもっている。ならば老年期にも、その能力を発揮して、今度は家族ではなく自分のために、生活に密着した人間関係を作りだせる存在だと考えられる。そこで次節では事例をもとに、家族外部における高齢女性の人間関係のひろがりの具体的イメージをみていく。

事例は、今までいくつかのテーマをもとに様々な高齢男女から収拾した、ライフストーリーのうちの二つである。対象となった約五十人近い高齢女性は、それぞれが家族外でネットワークを広げており、その規模や方向性は十人十色である。しかし後述する男性たちと比べると、生命再生産労働の周囲にある日常生活と関連の強い活動に関わっている点で共通していた。その中から選び出したＹさんに他と違う特徴があるとすれば、社会参加の経路として主婦役割を担ってきた経験の影響が大きいこと、すなわちケアラーとしての特質を明快に示している点である。もう一人のＦさんは、女性のネットワークの広げ方を考察する一助にと、社会参加の多い女性としてつけくわえた。

(3)高齢女性における人間関係のひろがり

(a)Ｙさんの場合（もと専業主婦）

現在六五才のＹさんは、退職した夫と未婚の娘の三人で暮らしている。結婚後に働いた経験はなく、二人の娘を育てる専業主婦として過ごした。そして現在は、婦人団体のＴ会の他に、ポルトガル語の通訳ボランティア、高齢者への食事の宅配サービスに関わっている。中年のころからＹさんは、社会とつながりをもちたいと思い、Ｔ会に入っていた。この会の仲間たちと地域で料理の講習会やバザーを開いたりしたが六十才をすぎてから、さらに二つのボランティアをはじめたのである。

Ｙさんは三十才の時に日本人の夫の都合で日本にくるまで日系二世としてブラジルで育っており、ポルトガル語を話せる。そのため市の教育委員会から依頼をうけ、日本の学校に通うブラジル人児童のための通訳をはじめた。その後、ブラジル人児童の家族とは、家族ぐるみの交流に発展し、いまでは彼らが日常生活で言葉の壁にぶつかると、かけつけている。いちばん多いのは、病気になったときに適切な病院を探して予約をとること、そして治療につきそって医者に病状を説明することである。

Ｙさんにとりブラジル人家族との交流は、夫の人間関係を広げるのにも役立っている。夫は定年退職後、家にいることが多く、バード・ウォッチングをする探鳥会にも、ひとりでは行きたがらない。そうした夫も、ブラジル人家庭の開放的な雰囲気は馴染みやすいようだし、また度々もらうＪリーグのチケットのおかげで、サッカー好きの夫と出歩く先がふえた。Ｙさんにとってブラジル人家庭は、夫と共有できる人間関係であり、退職した夫がいる現在の、新しい生活をつくる一要素である。

もうひとつの食事作りは、自分と夫の老後を考えるために始めた。もともと自分の好きなことが家事であるため、他の活動よりも始めやすかった。食事作りのボランティアは五十から六十代の女性が中心で、Ｙさんは月曜の夕食のリーダーである。この活動に力をいれている人もいるが、Ｙさんの生活はこの活動を中心にまわってはいない。二つのボランティアは、「（自分が）できるときに、その場でやる」ものであって、すでにある他の活

動や夫とのつきあいを犠牲にしてまでするつもりはない。仲間との週に一度の食事づくりの活動は、あくまでも生活の一部である。

Ｙさんの人間関係はいずれも義務ではない。非常に選択性が高く、自分の生活ペースのなかに無理のない程度に組み込んでいる。Ｙさんは自分の好みや都合に応じて一つ一つの結びつきのバランスをとることで、全体として自分にとって快適な生活を作り出しているのである。

(b)Ｆさんの場合

現在七五才のＦさんは、夫を早くに亡くしたが、舅姑のいる家で息子を育てた。そのため子育てを経て舅たちが亡くなるまで専業主婦としてすごし、現在は一人暮らしである。生活の中心は三十代半ばから通う教会であり、毎週日曜の礼拝だけではなく、平日にも聖歌隊の練習や会堂の清掃へ行く。そして日常的なつきあいは、この他に二つある。

Ｆさんは、生命再生産労働を担う諸組織へと関わりを拡げていないため、その人間関係は、厳密には、主婦としての経験をもとにしたものではないだろう。しかし後にも述べるが彼女の家族外での人間関係の作り方は、主婦としての経験を反映させたものと類似する点が見られる。すなわちフォーマルな組織との間に良好な関係をつくることで、自分の生活を快適に展開している。そのためこの事例を、主婦的な能力による人間関係のバリエーション、として扱いたい。

ひとつは、電話相談をするセンターでのボランティアである。きっかけは五十才の頃、子供の巣立ちと舅の死が重なり、Ｆさんはひとりとり残された孤独な気分に襲われたためだ。教会がらみの人のすすめで電話相談の勉強を始めると、ボランティア仲間もでき、Ｆさんは徐々に立直っていった。電話をかけてきた人の話を聞く活動が中心だが、自分の「すぐにだれとでも仲良くなれる」ことが役立っている。今の仲間たちは、二五年前のセンター設立時からいる古株の彼女を、「おばあちゃん」として慕ってくれている。

もうひとつは、かつて在籍した老人大学の同期生とつくったコーラスのクラブである。

老人大学に入学したきっかけは、二、三年前に、友人の死が重なり悲しみで入院した時に、教会の友人に誘われたのだ。半年の受講期間が終ってからも、クラブの仲間で月に一度、練習をしている。他のメンバーに会うことも楽しみであるため、たとえ先生がお休みでも集まりは中止にならない。そしてこの会の人の紹介で、山野草の好きな人などとのつながりもできた。

Ｆさんは老年期になってから、親しい人との別れに幾度か直面した。そうした時、ボランティアや老人大学に参加し、そこで単に電話相談員や受講生であるにとどまっていなかった。おばあちゃんとして、仲間として、自分を受け入れてくれる人間関係を、彼女は築いてきた。つまり家族の外にでてフォーマルな組織と協力的な関係をつくり、それを自分のためにうまく活用しているのである。そうしてつくってきた結びつきの上に、日々の生活は成り立っている。

(c)まとめ

二つの事例から明らかなのは、家族外部で作られた人間関係は、当初の活動のみを目的にしたつきあいに収まっていないことだ。Ｙさんは最初、ブラジル人児童への通訳をしていたが、それがいつのまにかＹさんの夫まで巻き込んだ家族ぐるみのつきあいに発展していく。またＦさんにとってのコーラスクラブも、歌を歌うだけではなく、仲間つきあいの要素も大きいし、さらに他の趣味を始める糸口にもなっている。二人の人間関係は、当初の活動を基点に、当事者が望む方向へと発展している点で、共通性が高い。

こうした関係は、とりわけＹさんの場合、生命再生産労働関連の活動への参加がきっかけになっており、主婦役割を果たすあいだに培った、自らの生活の必要に応じて人間関係を形成する能力によるもの、といえる。またつくりだす人間関係の共通性から察して、ＦさんもＹさんと似た類の能力を持つようだ。いずれにせよ、主婦としての経験を持つ二人は、家族をこえて広がる人間関係を自分でつくり、老いを生きている

(4)考察　高齢女性と中間領域

高齢女性研究の中で、これまで主婦役割の概念は、老年期の夫婦関係を分析するために用いられ、どちらかといえば、主婦役割ゆえに家族から解放されない高齢女性像が描かれてきた。それに対して本稿では、高齢女性の日常生活は統計的にみて、家族の網目から抜け落ちる部分が大きくなっていく趨勢だとの認識にたっている。そしてまず主婦役割を、ネットワークづくりの能力を養うもの、という視角からとらえた。続いてその視角から、高齢女性の人間関係の把握を試みたのである。

高齢女性の人間関係をみると、そこにはこの能力の活用される様子が伺える。事例からは、主婦役割ゆえに高齢女性を家族と結びつけて論じる場合とは、別の側面（の可能性）が、垣間見られる。女性は老年期に家族への義務的関係が少なくなるが、主婦役割を担ってきたために、生活に密着した結びつきをつくれるのである。これまで我々は、主婦役割を担う女性がもつ、人間関係をつくりだす能力を過小評価してきたといえる。

さて、高齢女性は、公的領域においては、一人の高齢者を何人の若・中年層の人々が支え扶養するのかという観点から、社会に依存するものとして位置づけられており、また私的領域においても、もてあまされる存在である。故にこの能力は、年令を問わず主婦役割を担うものが身につける特性であっても、それを活用することの重要度がもっとも高いのは老年期だろう。そしてここに描いた高齢女性の生活領域は、公的領域、私的領域どちらにも収まりきらない場合に、つくりだされるのである。そのためこの領域は、公私の区分からするとあいまいな、中間に位置せざる負えない。木本によると主婦役割（家事）は、最低限の生理的欲求の充足という身辺的行為の側面と結びついて、「文化的営み」としての側面が存在する。[木本,1995;141-2]すると事例から伺えるこの領域には、高齢女性の自立した生活文化が存在している可能性が高いだろう。

二節　高齢男性のネットワークづくり

(1)いまなぜ「老人会」か

女性が主婦役割を社会への経路とするように、男性は中年期までの経験を地域社会で発揮するのは無理なのだろうか。ここでは高齢男性の地域との関わり方の実態を検討し、その可能性を考えてみたい。高齢男性に関する数少ない研究によると、高齢男性のライフスタイルは、世話役（現代版長老）型と課題追求型に分けられる。[前市岡,1993;57-62]世話役型とは、中年期までの職業との連続性のある活動に関わり、その人を必要としてくれる（上にたてる）人がいて成立する。そのためこのタイプは、上下の区分を重んじ、他者よりも高い地位につくことをめざす、序列志向による結びつきをつくりだしている。（以下では世話役型の特徴である序列志向を重視し、長老型に統一する）一方課題追求型は、自分の設定したテーマに取り組む人々である。退職した高齢男性がタテ型社会を引きずったまま地域へ参入し、問題を引き起こしているとは度々聞く話である。そのような、地域社会の構成員として不適格な存在として連想されやすいのは、課題追求型ではなく長老型であろう。しかしタテ社会に馴染んできたことは、高齢男性の地域社会での関わり方に、悪影響をもたらすだけだろうか。彼らの地域でのネットワークづくりを素材に、考えてみたい。

ここで注目するのが、地域の高齢者に開かれた集団であり、とりわけ高齢男性にとって町内会とともに重要な社会参加のルートである、老人会である。老人会は、意外なことだが、地域社会を対象としてきた都市社会学において、研究対象として取り上げられることはほとんど無く、(7)老年研究においてもさほど注目されてこなかった。そこでまず、調査対象となる老人会の輪郭を見ておく事は有効だろう。

老人会の具体的な活動は近所で五十人以上集まると成立する単位クラブであるが、組織としては、単位クラブのうえに、小学校区、市町村、都道府県のレヴェルで連合会が出来ており、それらが全国老人会連合（全老連）につながっている。全老連が実施した「老人クラブ活動実態調査」（1985）によると、活動内容はバス旅行や新年会などレクレーショ

ン活動が主流であり、そのほかにはゲートボールなどスポーツや清掃美化運動などに活動は固定化している。近年の動向として、行政は老人会を地域活性化の担い手として注目しており、また高齢者の数も増えているのにもかかわらず、老人会の数はさほど増加していない。そのため全体的にみて、停滞ムードは否めない。

ではなぜ老人会会員を調査対象にするかといえば、理由は二つある。一点目として、地域の高齢者の三人に一人が関わりを持つという、組織率の高さである。例えば大阪市近郊の人口三四万人を擁するＳ市の場合、加入率は二七％であり、約一万五千人の高齢者が居住地周囲の単位クラブに所属している。農村と比べると加入率は低く、また会費を納めるだけの名簿会員も少なくない。しかし老人会をのぞいて、地域に住む高齢者を取り込める集団を他に探すことは、なかなか難しい。また二点目として、老人会へ加入する層は、地域との結びつきが密接であり、地域に根ざした活動をしていると考えられる。そして彼らからは、高齢男性が切り開く、地域社会の新しい傾向がうかがえるのではないか、と期待が出来る。なぜなら高齢男性が関わるもうひとつの地域集団である町内会は、その担い手が土着性のつよい地域名望家層から退職したサラリーマンへと多様化し、新しい動きがあると報告されている。[金子,1993:213]

さて、具体的な検討の前にもう一つ確認したいのは、地域社会は退職した高齢男性の、行き場のない勤労意欲の受け皿ということである。

(2)高齢男性の「潜在的能動性」

日本では六十代男性の半分はまだ働いており、この傾向は、国際的にみても職業生活からの引退をしたがらない部類に入る。（次頁の図一参照）しかし一章で確認したように、日本は老後の生活費を収入に頼っている層が欧米並みにきわめて少ないのであるから、職場にしがみつく「濡れ落葉」との揶揄も一理ある。

さて、職場を離れようとしない日本人の中で、高齢になっても働く人は、二つのタイプがある。都老研の実施した『定年退職に関する長期的研究』（1991）によると、就業を続

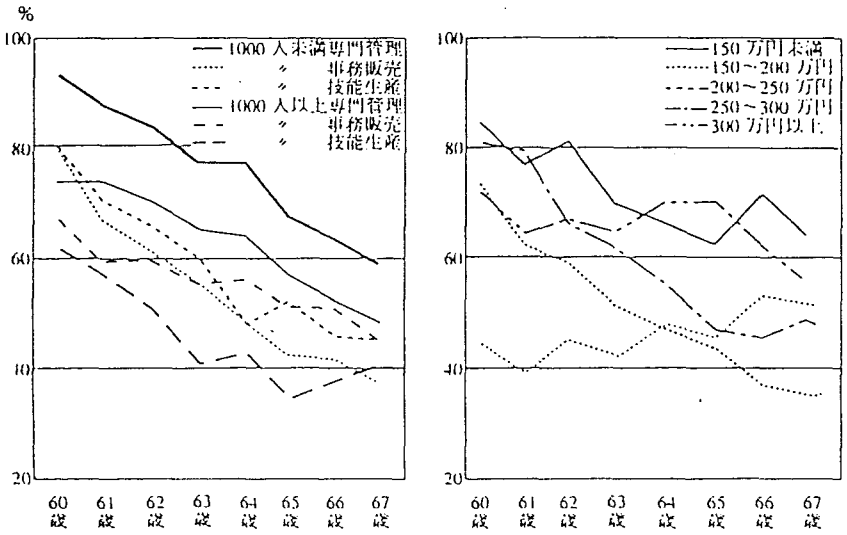
けるのは、職種としては職場規模を問わず専門管理職であり、また年金受給額から見ると最も低額の層が第一位、最も高額の層が第二位である。（図二、三参照）すなわち高齢になっても仕事を継続する層は、定年前は高い地位につき高額の年金をもらう「生きがい」目的の人々と、低所得であるために「経済的必要」に迫られた人々とに、二極分化している。[直井,1993:40-41]そして当然の事ながら自営業主は引退しないため、結果的に職場を離れやすいのは、中間管理職どまりのサラリーマンで、経済的に困らずやっていける人々だといえる。

図１　年齢別就業率－1996年　(%)

	日本		アメリカ		タイ		韓国		ドイツ	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
60～64歳	74.6	53.1	48.5	41.0	61.1	48.6	62.4	50.6	22.0	11.2
65～69歳	60.9	28.1	32.4	26.8	39.1	39.7	59.8	27.1	8.6	6.7
70～74歳	46.8	28.4	21.5	16.7	24.2	22.6	36.0	17.9	1.5	0.9
75～79歳	23.7	18.1	10.3	5.6	25.9	11.1	26.6	9.7	0.0	1.3
80歳以上	16.0	11.9	1.7	2.6	11.1	12.0	10.0	10.2	3.8	0.0

総務庁[1992]121頁より転載。

図２，図３　年齢別有職率の変化



a) 50―54歳時企業規模×職種別　　b) 65―69歳時厚生年金受給額別

出典：東京都老人総合研究所社会学部門「定年退職に関する長期的研究（３）」（1991年）27頁

そして日本人高齢者の勤労意欲が高いのは、一つに老後の生活に対するイメージの貧しさが関連しているようだ。非就業者が職業につきたくない理由として、欧米のように「したいことがある」という自発的な要因を理由にすることは稀である。そして他の国では五％未満である「適した仕事がない」という答えが、日本（と韓国）では一定の割合を占めているのが特徴的だ。（図四参照）つまり日本では、引退者のなかに、余力をもてあましていると想定される人々が、層として存在しているのである。また別の調査によると、老年期に働いている人もその六割近くが、働く理由として「健康」をあげる。［高齢者雇用開発協会，1988;160］「健康」という理由には、仕事を通して規則正しい生活、ハリのある生活を送る事を求めている［河内，1993:114］という。すると日本の高齢者が働いているのは、仕事に替わる生活のリズムを与える何らかの活動をみつけていないから、と考えざるをおえない。おそらく、引退後に何かをするものとして老後を捉える発想が、乏しいのである。

図４　非就業者の非就業理由－1981～1996年　(%)

	日本				アメリカ				タイ			韓国			ドイツ	
	1981年	1986年	1990年	1996年	1981年	1986年	1990年	1996年	1981年	1986年	1996年	1981年	1990年	1996年	1990年	1996年
したい事がある	37.3	37.5	20.3	12.9	57.3	60.0	58.3	63.4	22.5	23.8	4.6	11.0	2.6	5.2	31.6	39.1
健康が許さない	39.6	42.8	48.0	55.8	35.0	30.3	28.6	23.5	74.0	71.2	82.3	54.1	72.8	77.6	34.1	33.9
適した仕事がない	11.2	10.5	19.2	16.5	1.2	1.6	0.5	1.6	1.8	3.4	4.1	17.2	8.7	13.3	4.5	5.0
その他	10.5	9.2	12.0	14.7	6.5	8.0	12.1	9.1	1.2	1.4	9.1	15.4	14.2	3.7	28.8	21.0
NA	1.4	0.0	0.5	0.2	0.0	0.0	0.4	2.4	0.6	0.2	0.0	2.3	1.7	0.2	1.0	1.1

総務庁［1992］121頁より転載。

図５　年齢と定年後の人生観　(%)

	60-64	65-69	70-74	75-79	80-	不明	計
自分のしたいことを存分にする	32.8	16.4	16.6	10.5	15.9	18.2	23.0
日々をのんびり楽しく過ごす	18.2	21.7	20.0	28.9	26.1	—	20.7
働ける間は働く	28.1	34.6	38.9	35.1	26.1	18.2	31.8
経験や知識を生かして社会のために活動する	18.2	22.0	20.6	18.4	18.8	18.2	19.6
子どもや孫の世話をする	1.1	2.5	1.1	2.6	1.4	—	1.6
その他	0.4	1.3	—	0.9	—	—	0.6
不明	1.1	1.6	2.9	3.5	11.6	45.5	2.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

椎山、上野［1993］65頁より転載。

またある企業の退職者調査は、定年後の生活観を年齢別に調べており興味深い結論をだしているので、それを紹介しよう。退職直後の六十代前半では、定年後に「自分のしたいことをする」と考える人が多いのに対して、七十才以降は「働けるうちは働く」という人の割合が上回るのである。（図五参照）日本では経済面では老年期の生活が一応は保障されていることを重ねて考えると、六十代に求めた「（老後に）自分のしたいこと」が、おそらく見つからないのである。同調査は、同じ母集団で九割が打ち込めるものがほしいという調査結果と突き合わせて、サラリーマン退職者の「潜在的能動性」を指摘する。[前市岡,1993:64-66] すると地域にやってくるのは、勤労意欲はあるものの、中堅サラリーマンであったため職場を離れ、老後に打ち込むものを求めている人たちである。次ではそうした潜在的能動性を持つ人々が老人会をいかに活用するのか、それぞれのタイプ別に検討する。

(3)地域におけるネットワークの展開

(a)調査概要

調査対象は、大阪府Ｓ市の老人会会員、男性十八名、女性二十名であり、データとなるライフストーリーは、基本的に個別面接法で収拾した。調査対象者には、老人会との関わりを中心に、現在の人間関係について話してもらうという形をとった。(8) 調査対象者は旧市街地と新興住宅地という地域特性の異なる二つの老人会の役員(9)と、老人会主催の「生きがい教室」に参加する市内全域の会員である。まずスクリーン調査をして、対象者を①既婚者（死別を含む）、②現在お稽古事から自治会まで広い意味での社会参加を二つ以上している人、という条件を満たす人に絞った。その上で、スクリーン調査時にインタビューへの協力を申し出てくれた人から、家族形態（子供家族と同居か別居か）と配偶者の有無の点で、男女ともなるべく均等になるように選んだ。

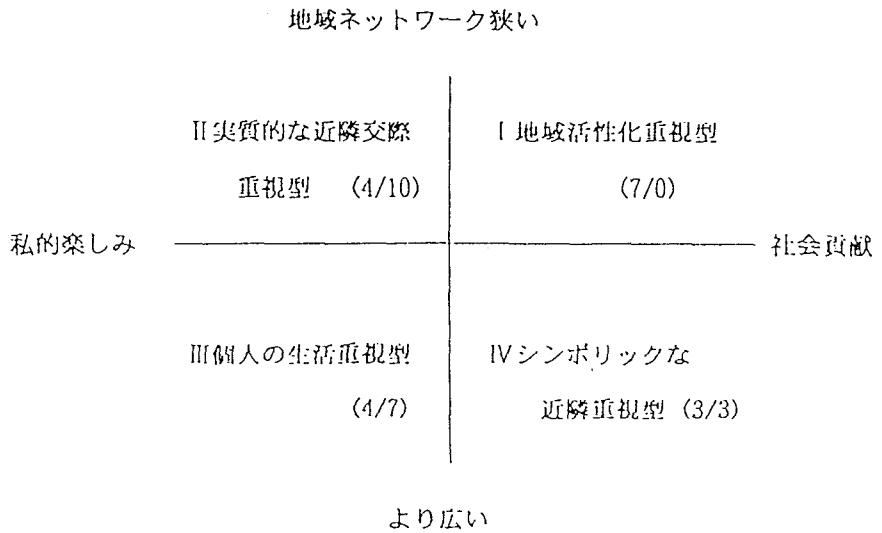
この人たちは、単位クラブの役員（会長、副会長、会計など）であったり、老人会主催の行事に参加している点で、老人会会員の平均像よりも、地域との関わりは高めとなる。

そのためここで描かれるのは、高齢者が地域とどのような関わりがもてるのか、つまり高齢者に共通するポテンシャルを具体化したものといえる。

事例検討の前に、見取り図を提示しておきたい。会員の老人会との関わり方には、地域ネットワークが（小学校区よりも）広いか狭いか、老人会での活動が私的な楽しみと社会貢献のどちらにおかれているかで、四つのヴァリエーションが見いだせる。（下の図を参照）各タイプの括弧内は、それぞれに該当する男性/女性の数である。ⅠとⅡのタイプは、生活圏がおおよそ市内に収まっており、とりわけⅠのタイプは老人会でなにか活動をしようとして入ってきており、役付きの男性に多く、Ⅱのタイプは女性に多い。ⅢとⅣのタイプは、宗教団体や趣味のサークル、ボランティアグループなどに属している人や、まだ職業を持っている人など、生活の中心がより広い領域にある人である。

この分類は、「結果としてこうなった」というものであり、それ以上の意味はない。しかしⅠとⅡのタイプの高齢男性は、地域でリーダーシップをとって活動しているが、同時に「ボス猿」的な存在、すなわち悪い意味での「長老型」ライフスタイルと受け取られやすい人々である。そこで高齢男性の地域における関わり方とその可能性を考えるというテーマにそって、ⅠとⅡのタイプに属する事例を中心に検討をすすめる。どちらかといえば課題追求型のライフスタイルであるⅢとⅣのタイプと女性は、ⅠとⅡのタイプとの比較として言及するにとどめる。

老人クラブとの関わり方のヴァリエーション



(b)老人会との関わりが深い高齢男性のケース

Ｉのタイプ／　Ｙさん（七二才・元ＪＲ職員）：老人会を起点に地域ネットワークを発展させる。退職後なにかボランティアでもと思ったが、専門技術もないので体を動かすしかないと思っていた。Ｙさんはマンション管理組合の理事をしていたところ、依頼されるままに老人会の役に就く。振り返ってみると、地の人たちの内紛で数年間老人会が消滅していたため入りやすかったようだ。国鉄一家の枠のなかに育ってきて、当時も部分的には地域の人との交わりもあった。しかし国鉄のマイナスにならないようにきつい交渉もやってきたし、今にすると狭い世界にいたと思う。

会長として心を砕くのは、突出した人をなだめること、そして高齢者が出歩く先を増やせて、だれでも楽しめる活動を取り入れることである。そこでまず子供会がやめてしまった再生資源回収を引き継ぎ、老人会の活動として回収を毎月する。またその収益で、グランドゴルフの用具を買い、公園で練習している。仲間の一人は、練習を見にきた人に老人会への入会を勧めている。この他にも、資格なしで高齢者が何を出来るだろうと考えている。今はマンション周囲の草刈りや、障害児の車椅子を坂道を押してバス停まで送迎するのを、会員と朝と夕方にローテーションで担う。

Ｙさんは老人会の内部にとどまらず、再生資源の回収や障害児の送迎など、近隣の住民のニーズに応じて活動を展開し、結びつきをつくりだしている。そしてバス旅行の弁当配りなど皆さんのお世話をするのが楽しいが、妻は雑用を嫌がって老人会関連の行事には参加しない。そうした妻に対しては諦めの気持ちが強いが、残念である。

Ｍさん（七三才・元公務員）：定年後、一、二年は遊んでいたが、退屈にも限度があると思っていた矢先、老人会が市と協同でひらく高齢者向け生きがい教室の雑用（各教室のリーダ決めや講師の接待など）を依頼された。元の職場である市役所の内情に通じているため、自称便利屋として、既に十二年携わっている。そして老人会と市役所の、仲介をしている。

受講者の希望に行政が対応できておらず、とりわけ一年間のコース終了後に希望の高いＯＢ会作りに、市はノータッチである。そのため公共施設での会場の取り方や講師の斡旋など、ＯＢ会立ち上げに必要な相談にのっている。また教室が会費制であることと、お稽古の成果を発表する場がないことは、受講者の間で不評だった。そこで老人会の役員とともに市と交渉し、教室を無料（実費）にし、また年に一度の作品展開催を実現した。作品展に関しては、行政にあまり迷惑もかけれないし、組織を一番知っている自分が動かないとと思い、二月には会場作りや記念品の準備に奔走する。自分が行政の方に踏み込みすぎてもいけないし、老人会と行政との間でバランスのとり方は難しく、あとで反省することも多い。

・Ⅱのタイプ

Ｎさん（七一才・元青果市場）：木造の府営住宅に三十年来すみ、長いこと町会に関わっている。老人会には、グランドゴルフがやりたくて入った。府営住宅新築に伴いここ三年は、入居対策委員をしていた。改築後に各棟の一階が高齢者専用住宅になったため、町会の班割りをそれまでの横割りから縦割りにしたり、老人会勧誘のビラを配布したりと、高齢者も含め外からの人との融和をめざした活動をする。

この他にも、Ｎさんの活動は結果として、町会がフォローできずにいると老人会や高齢者の意向を汲み取る、すなわち町会と老人会の仲介をする類の活動になっている。一例として、子供会主催の餅つき大会では、火の起し方や薪のくべ方を若いお母さん方に教えるなど、近所の仲間と助っ人をして関わっていた。すると関心を示し、寄ってくる高齢者が多かったため、翌年から餅つき大会は子供会と老人会の定例活動になる。高齢者にとっては自分の経験が役立つのは嬉しく、前日のテント張りから大騒ぎであるし、子供会にも好評のようである。また町会が財政難になったおり、老人会への補助金も減ってしまった。その時は、元の勤め先からバナナを安く仕入れ、地区の文化祭で売ることで、穴埋めをした。

・まとめ

ⅠⅡのタイプは長老型といわれ、序列志向の人間関係を持つと考えられる。しかしここでの検討から明らかなように、彼らは、老人会の活動内容を作り出すこと（課題探し）からスタートしている。そして高齢男性の捜し出す活動内容は、行政や町会という組織と地域住民のギャップに応じてつくられる。つまり彼らは、行政や町会といった組織と地域住民、高齢者の隙間を埋めるために、いわば社会のニーズにあわせて非営利活動を展開しているのである。そして彼らは老人会で、例えば市役所との付き合い方など、タテ社会で培われた経験（タテ社会型の人間関係ではない）を活用している。

(c)老人会と関わりが薄い高齢男性のケース

理念的には、ⅢⅣのタイプに、例えば会社のＯＢとして相談役になるなど、老人会よりも広い社会で長老型の活動をして人間関係を作る人はいる。しかし今回の事例では、このタイプに分類された人はみな、どちらかといえば課題追求型のライフスタイルである。彼らの人間関係は、様々な活動に関わることで広がっており、活動内容は人それぞれである。カメラ教室や公開講座などに参加する人もいれば、妻のすすめで一緒にホームヘルパーの講習会へ参加する人もいる。彼らに共通するのが、（次の女性のケースと比べると顕著だが）人間関係を広げることや広がった人間関係そのものよりも、その活動に参加することに意義を見いだしていること、そして現在打ち込んでいる活動を、退職前の仕事との関連で特徴づけていることである。そうした男性の典型として、Ｆさんの事例を紹介する。

Ｆさん（七四才、元経営コンサルタント）：仕事は出来たら一生やりたいけれど、勉強を続けないと出来ない。囲碁や水彩画は元来自分にとっては苦手な「右脳的な部分」であるが、気に入っているのは、極めていけば限りが無いこと、そしてこれまでとは違う世界が開けておもしろい。それまでの仕事の勉強を、趣味での目標に振り返ただけである。もともとは年寄りの集まりは好きではないが、興味あることをはじめるきっかけ作りをしてくれるのは有り難いと思う。

Ⅲのタイプは、広げたネットワークの一部として、興味のある活動を老人会がやっていると利用する人々である。Ｆさんのように役員になることや地域での関わりを避ける人もいるし、目に見えない圧迫感を感じて老人会に馴染めない人もいる。またⅣのタイプは、老人会を通して地域での活動（パトロールや公園掃除）に参加しているが、深く老人会と関わらない人々である。老人会に深入りしない理由に度々あげられるのが、妻のネットワークである。その一例として、Ｋさんを紹介する。

Ｋさん（六六才、元工場の事務職）：退職後に町会の役員が回ってきて、その時に老人会にも入った。地域の活動をする人と知合い、結構楽しんでいたが、これ以上地域に関わると妻にも仕事が回ってきてしまうので、彼らとの付き合いは控えている。なぜなら妻に対して、自分の親を最高な死に方をさせてくれたという負い目があるため、極力自由に外にでてほしいと思っている。そこで彼は二年前には自然大学に入り、今では自然観察アドバイザーとして近所の公園で活動をしている。退職時は時間をもてあまさないか不安だったが、「生活のリズム」があればやっていけることに気付いた。

(d)参考／　女性の老人会体験と地域ネットワーク

・協助システムとしての老人会

老年期に女性は、主婦役割を担うことで養った、生活に密着した人間関係をつくりだす能力を持つ。事例は、最も対照的なライフスタイルを持つⅡとⅣである。そうであっても老人会での結びつきは、情緒的、物理的に日常生活における相互扶助を通して、親密さを確認するものである。高齢女性にとって、中年期からの女縁は明確な目的をもった脱日常の結びつき[上野,1988:158-60]であるのに対して、老人会からは、自分の日常生活へ還元される利点を引き出している。老人会との関わり方は、自助、公助に対する、協助システムの増強というニュアンスがある。

・Ⅱのタイプ　（地元密着型の地域ネットワークの事例）

Ｔさん（七八歳）：五十代で大阪に戻ってから友人を求めて、歴史講座など様々な会に参加し、老人会もその一つとして六五才になるとすぐに加入した。足が悪くなってからはバレーボールはやめ、その他の遠出もあまりしなくなった。そして今は、おつきあいとして占める割合が大きいのは、女学校の頃のお友達、子供を含めた親戚つきあい、そして老人会の仲間である。老人会の友人とは日常的な付き合いが最も多く、彼女たちは麻雀仲間でもあり、「おすそわけ」仲間でもある。同居家族とは食事も別なので、近所の独居高齢女性や以前からの知り合いと、沢山もらっても食べきれないものを分け合う。このように日常生活のニーズにあわせて老人会の関係を厚みあるものにする。彼女たちとは毎日一時間程度、「元気ね」と確認をかねて会い、おしゃべりをする。

老人会会長としては、二ヵ月に一度、寝たきり会員への友愛訪問が義務である。だが自分が会長になってから、今ではあるお婆さんの家に、週に二回買物の前に立ち寄る。御用聞きをすることも、生活の一部になっている。

・Ⅳのタイプ（より広い領域での地域ネットワークの事例）

Ｅさん（七二歳）：定年退職まで夫とともに小学校の用務員を勤めた。退職後、宗教団体の集会を中心に、お花の教室、元の勤務先の退職した先生方とのお食事会など、誘われるとなるべく顔を出すようにしている。ちょうど「これまで近所のことを何もやってないなあ」と思っていた折りに、近所の人に老人会の班長を依頼され、夫婦で老人会に入会した。班長の仕事は十五軒分の配りものを各家に届けるだけの簡単な事だが、おかげでご近所に顔見知りがふえ、これならばもっと早く入れば良かったと思う。とりわけ犬の散歩仲間とは、彼女も老人会の会員だったことをきっかけに、以前よりも打ち解けて話をするようになった。年令は自分よりも上だが若々しい彼女の行動には学ぶことが多い。娘に甘えすぎては駄目だとか、良い補聴器についての情報を教えてもらう。もともと大勢の人とお話をすると気が紛れるものだが、彼女とその友達たちは、「先を行く人」として心強い存在である。

(4)考察　課題達成志向の人間関係

高齢男性と地域の関わりというと、これまでどちらかといえばタテ社会の人間関係を引きずっていることの弊害に議論が集中し、長老型のライフスタイルは問題ある存在とされてきた。それに対してここでは、高齢男性が打ち込める何か（課題）を求めていることを確認した上で、地域で積極的に活動する人の事例を中心に検討した。

まず高齢男性の傾向として、大半の人（事例では中年期から町会に関わっていたNさん以外）は、「今の生活」をかつての仕事との関連で位置付けている。とりわけ元経営コンサルタントのFさんに顕著だが、最初のIさんやMさんも老人会の活動は「第二の仕事」というニュアンスが強い。そのため高齢男性の地域でのネットワークは、仕事に替わる何らかの活動を探そうという意向から展開している、といえる。

男性が老人会に組織や住民との接点をもつきっかけ、すなわち「活動」を求めるのは、女性の老人会会員と比べた一つの特徴である。なぜなら女性の場合、明確な目的があれば女縁を活用するため、老人会から何か新しい活動を発進しようとするモチベーションは低いからだ。（女性が老人会に求めるのは、「日常生活に密着した仲間」のようである。）そして高齢男性は活動内容を捜し出し、具体的な活動を媒介につながっている。だれでも参加できる活動による結びつきである点で、女性のつくる結びつきと比べ、開放性が高くなる。

さて、地域で積極的に活動する人たちは、老人会の活動内容を作りだすことからスタートしていることが明らかになった。その活動内容は、例えば、障害児を迎えにくる作業所のバスと、子供の車椅子を一人では運べない母親の中間を取り結び、老人会のメンバーでバス停までの送迎を担当する等である。すなわち行政や町会といった公的組織がカバーしきれない、高齢者や地域住民のニーズに応じて、それを補う類の活動である。行政や町会など、公的組織の機能を補完する活動であるといえる。そして結果的に、彼らの活動を通してつくられる地域の人間関係は、公的組織の中間領域に位置している。老人会から地域のネットワークは生成し、地域ないしより広い社会へ還元される非営利活動が展開されて

いるのである。

さて、長老型とみなされる彼らであるが、自らの設定した、地域での課題に取り組んでいる点で、課題追求型ライフスタイルの一種と把握できる。高齢男性の活動は社会の要請に敏感にならざる負えないため、老人会ひいては地域社会の内実を変化させるポテンシャルを含んでいる、とも考えられる。これまで地域でのヨコ社会づくりには女性の方が長けていると繰り返し報告されてきたし、実際高齢女性はネットワークをつくり、地域で活動をしている。しかし男性が「タテ社会」に馴染んできたことは、老人会との関わりでみると、必ずしも悪影響ばかりとはいえない。男性には男性の利点を生かした、特徴のある地域社会との関わり方、地域への貢献の在り方があるのである。

注

（1）日本での老年期家族研究は、親子関係に比重がおかれており、夫婦関係への関心はどちらかといえば低調という印象をうける。樽川（1984）や高橋（1980）がある程度である。

（2）近代化にともなう老いのイメージの変容について、詳細は水嶋［1996］を参照。

（3）似た状況は近代西欧でもおこっており、ドンズロはそれを、家庭での活動と社会での仕事の間に「連続性」ができたと表現している。『家族に介入する社会』（一九九一年新曜社）を参照。

（4）理由はわからないものの、なぜ啓蒙書の描く老人に男性のイメージが強いのは興味深い ことである。とりわけ高齢女性の方が高齢男性よりも主婦が実権を握る家庭に収まりが悪かったためかもしれない。

（5）生命再生産労働の定義は、「あらゆる世代の人間が日常生活のなかで喪失した生命エネルギーを補填し生命を活性化および持続させることを目的にした労働、および人類の永続のために新しい生命を誕生させ、養育することを目的にした活動」とする。後藤澄子「生命再生産労働と女性」『名古屋社会学論集』十一号（一九九十年）、二二八～九頁。

（6）家事に従事する女性に特徴的な、人間関係形成能力を指摘した研究として、ハーゲスタット、一九八七年「家族―親族のつなぎ役としての女性と高齢者」パイファー、ブロンティ編（黒田俊夫監訳）『高齢化社会　選択と挑戦』文真堂、一三〇～四八頁。

（7）都市社会学の研究する地域集団は圧倒的に町内会であり、「町内会をのぞいて日本の都市社会学が扱ってきた集団はない」（鈴木広）とまでいわれている。

（8）事前にかならず尋ねる項目は用意していたため、半構造化された調査である。

（9）旧市街地でも会長はいわゆる「地の人」でないことも多く、またより協力的だったのは新参の人々であったため、特筆すべき地域特性は析出できなかった。このことは、地域と高齢者という問題を考える場合、稿を改めて検討すべき重要な問題であろう。

四章　外部ネットワークと親子関係

一節　子供との関係を選択する高齢者

今日、老年期の親子関係の一局面として、子供からの全面的援助を必要としない親と子供という組合せが出現している。衰弱した親と子供という組合せのような、必然性の高い援助による結びつきではなく、それは親と子双方の関係の在り方により変化するものである。この局面にアプローチする時、導きになるのがムトランとライツェスの研究である。[Mutran&Reitzes, 1984:127] 彼らは早くから、高齢者にとって子供との関係は、個人の生活ニーズの充足を図るために選択する、いわば関係的性質をもつことを指摘していた。老年期の親と子には双方に制度的に規定された役割が少ないため、その関係は相互作用の過程で変容するものとみなせる。そして高齢者は子供など他者とどのような関係を望むかにより、自分の望む対応を相手から引き出すべく、自己呈示を積極的に行なうのである。この他にも現段階では散発的だが、老年期の親子関係には、高齢者サイドの選択がはたらく事を伺わせる研究がある。

援助と高齢者の幸福感に関する研究は、生活が満たされるためには子供が提供する援助は重要だが、それは高齢者世代に心理的な負担を与えると警告する。[Stoller,1985] [Lee et al.,1995:831-32]なぜなら高齢者がその援助を受けることで、子どもに管理されているとか馬鹿にされたなど、結果的に不快感をおぼえる援助が存在するのである。日本でもそうした援助の存在は指摘されており [野口,1991b:37-48] 、とくに自立を尊ぶアメリカ文化においては大問題だ。そのため援助を含めて子供との関係をできるかぎり避け、友人や兄弟姉妹とのネットワークを充実させる高齢者もいる。[O'Bryant,1988:182] [Gallagher,1994]

また寡婦研究によると、高齢女性が好んで結びつきを深めるのは、手段的な援助を提供する子供ではない。むしろ自尊心を維持できるなど情緒的な満足を得られる子供（娘）である。そして娘への思いも一方向ではない。専業主婦だった女性が親しくするのは、現在主婦業に力を入れており、ライフコース上の共有体験を分かち合える娘だという。[Lopata,1996:137、144] （しかし生涯にわたって職業を持った女性が、自分と同じように職業

を持つ娘と親密な関係を築いているかどうかは研究されておらず、共有体験による結びつきという議論が妥当な範囲は定かではない。）また他方には、娘や女孫に自分が断念した夢を託し、若い世代の未来に自分を投影する女性もいるようだ。［Woodward,1995:90-2］『ジョイ・ラック・クラブ』［Tan,1989=1992］が描く、中国系アメリカ人一世の母親がよい例だ。彼女は自分とは違う人生を歩む、アメリカナイズした二世の娘を理解し受け入れることで、親であることを確認している。どちらのタイプであれ、高齢女性は自分の好む方向へと、子供との関係を発展させているようだ。

もっとも、人間関係を選択する高齢者像は、日本でも目新しいものではない。すでにネットワーク研究の分野では、援助資源や交際相手として、子供や親戚、友人などを高齢者がいかに選択しているか、が盛んに研究されている。［藤崎,1984］［玉野ほか,1989］だが標準的な研究では、親子は結合原理が帰属的であるとして、結合原理が選択的である他の人間関係とは区別されている。［前田,1988:61-3］親子関係は他の人間関係に対する独立変数として扱われやすいのである。そのため親子関係が流動的な時代背景にもかかわらず、一部の別居子研究をのぞくと、親子関係に対しては、選択という視点からのアプローチは少数派である。

そこで本章では高齢者を、個人の意向を反映した親子の結びつきをつくる存在と捉え、親子関係はネットワークの在り方とどのように関連しているのかを問題にする。親子関係とネットワークの相互関連を探るために、当然ながら親子関係を、高齢女性のつくるネットワークにおける一つのオプションとして位置付ける。まず次節では、多様なネットワークの中で、高齢者がいかなる目的にそって子供との関係を選択しているのか、その選択基準は何なのかを明らかにしたい。つづく三節では、高齢者にとり最も関わりが深いとされる、娘との関係に焦点をあてる。

二節　高齢女性のネットワークと子供に対する選択基準

(1)調査概要

ここで用いるデータは、一九九七年八月に私が収拾したライフストーリーである。調査対象者は、東京都の住宅政策で建設された、M市にある高齢者集合住宅(1)に住む女性十八人である。

対象者に死別シングルの独居者を選んだ理由は、彼女たちを、日本の高齢者が共通に抱える特徴を集約的に体現する存在、いわゆる典型例と考えたためだ。独居という点で、彼女たちは子供との生活共有度の低下傾向を顕在化させている。そして繰り返しになるが、親子関係においてイニシアティブをとるのは女性である。故に家族の網目から抜け落ちやすい局面にいる高齢者が、どのように子供と結びついているのかを検討するには、彼女たちはふさわしいデータであると思う。また対象者は、高齢者住宅の住人として一定の属性をもつ。高齢者世帯の持ち家率は八割を超すのに、彼女らは市の福祉課を通して住宅斡旋を受けており、いわゆる社会的弱者であること。そして夫の死後に高齢者住宅へ入居をしており、老後を子供と同居せずに過ごすという意図が明確なこと、である。

そうしたデータを用いて、まず高齢女性がつくるネットワークにおける子供の位置を例示する。次に独居理由から、ネットワークと関連づけて、高齢女性の子供への選好を検討する。その上で、高齢女性の子供に対する選択基準を明らかにしたい。

(2)ネットワークにおける子供の位置

(a)Mさん（七三才）の場合

Mさんは、中年期から子供関係の活動を皮切りに、様々な集まりに関わってきた。病気を機に老人ホームでの会計の手伝いをやめたが、今もそのホームで人手が必要になると、友人を紹介している。いわばボランティアの斡旋である。その他、近所の人とペットボトルのリサイクル運動にも参加しているが、Mさんが力を入れているのは、難民救済のための活動である。資金づくりのためにバザーやチャリティコンサートを開いており、かつて

はリーダーも努めたが、今は品物を買ったりチケットを売るなど体力的に無理のない形で関わっている。なによりも仲間が体をいたわってくれて居心地がよいので、いろいろな集まりに顔をだしている。

こうした様々な結びつきの中にある彼女の生活は、行政や息子の協力によって成り立っている。夫の死後、現在は自分も目や腰が痛み、病院通いが必要である。診察日が平日であるため病院へはタクシーを利用するが、買物は週末に一度、近くに住む次男に頼んでいる。また掃除は、市のヘルパーさんにきてもらっている。

(b)Kさん（七七才）の場合

Kさんは新しく入った団地で、花づくりを通して人間関係を充実させている。入居後に花ずきの住民とともに空き地を開墾し、花壇をつくった。今は皆が花や野菜を思い思いに植えており、Kさんも一日に何度か花壇に足をはこぶ。バラの世話をするだけではなく、園芸仲間や近所の人たちに会いたいからだ。そしてまた、団地全体でする草取りや落葉はきは、季節の楽しみである。

そしてこの人たちには、日常生活で助けられている。足の筋を痛めたとき、車をだして病院通いにつきそったのは、同じ階に住む中年の女性である。彼女にはゴミすてもお願いした。また以前からの友人も、食事など何くれとなく助けてくれた。しかしKさんも時に人の家の留守番をしたり、猫や亀を二、三日預かることもある。そのため「人の世話をしてやってるのは私だ」と思っている。

だが息子たちは「世話になった人にあげろ」といって、醤油や昆布、お酒などを大量に送ってくる。歩いて五分の長男家族のところには、友人とのトラブルがあると気晴らしに遊びにいく。子供からの品々や避難所としての長男宅は、Kさんにとって、団地内での相互依存関係を円滑にすすめる一助になっているようだ。

(c)まとめ

ここにあげた二人に代表されるように、高齢女性は子どもに限らず近隣や兄弟姉妹、友人、行政など多方面に、自分の好みに応じてネットワークを広げている。ネットワークの広がる範囲に個人差はあるが、その内部では援助を受けることも提供することもある。そのため高齢女性の日常生活は、子供と無関係ではないが、子供とは別の領域で営まれている。そして子供は、高齢女性がつくる相互依存の関係を維持するための基盤づくりに、貢献している。

(3)子供への選好とネットワークの関連

(a)独居をする理由

彼女たちが現在住む高齢者住宅は、たいていの場合、それまで住んでいた地区、もしくはもっとも交流の多い子供の家の付近に建っている。入居前に、彼女たちは子供からの同居の誘いを断ったり、同居を打ち切った経験があるため、子供達との現在の結びつきは、いくつかある選択肢の中から、自分自身で選んだものだと思っている。そのため独居理由を検討すると、高齢女性の子供への選好 (2) と先に見た相互依存のネットワークの関連がみえてくる。

高齢女性にとっては、ケアラーとしての能力を展開し、相互依存の人間関係を築くことができる状況は大切である。Rさん（七七才）Nさん（七七才）は中年期までの経緯もあり、同居家族内では自分を援助を受ける劣者としか位置付けられなかった。ふたりとも独居の利点として、ひとづきあいが自由になったことをあげている。

Rさんは七十才の時に長男家族と同居したが、二年前から、独身の三男がいる都営の別棟に住む。今は三男のために、食事づくりから掃除、洗濯と家事全般をしている。同居時と比較して現在の心境をこう語る。

「（当時はダウン症の孫の世話しかすることがなく）いくら世話になっていても、自己卑下しすぎちゃって、小さくなっていたのよ。･･･(ひとづきあい、家事など)

自分の思うようにできる、この自由はお金にかえられないわ。本当にね今は気がねなく暮らせてすっきりとした気持ちなの」

Nさんは、同居をやめた理由をこう語る。

「じっとしているのが苦痛でね。（孫が育ってしまうと）何かしたいのに家にいたらやることがないんですよ。･･･(母が)上げ膳下げ膳のご隠居さまでボケたのをみているでしょ。･･･私は自分の（身のまわりの）ことは自分でやりたいんです。」

この二人に限らず、高齢女性がケアラーとしての能力を展開したいと願うとき、扶養能力のある子供は必ずしも都合の良い相手ではない。むしろ自分に援助提供者となる機会を与える子供との結びつきを、高齢女性は積極的に維持している。Ｆさん（七一才）、Ｏさん（六八才）は、近くにいる娘家族と親しくする今の生活を続けたいため、長男との同居を先送りにしている。

「Ｔ子たち（娘と娘の子供）や姉さんが気兼ねなく遊びにこれる場所を残しておきたくてね。ここなら近いけれど、あっち（長男宅）は行くにも大変よ、遠くて。･･･貰い物なんかもね、あの子（暮らし向きの悪い娘）にあげたいの。」

「一人でいるのは、次男や娘の帰ってこれる場所でありたいからだと思うわ。（似た境遇の）お友達もみんなね、子供のために頑張って元気でいましょう、が合い言葉なの。」

さらにＳさん（六七才）Ｋさん（七七才）の独居理由からは、ネットワークを支援するないし妨げないように、子供との結びつきを調整している様子が伺える。

Ｓさんは孫を週に二回お稽古ごとにつれていくなど、近所に住む子供家族には協力的だが、息子からの同居の申し入れを三年前に断った経緯をこう語る。

「（夫を亡くした悲しみがふっきれて）月曜日は点字の教室、火曜は水泳、水曜は病院ボランティアって、一度外にでだしたら毎日が楽しくなって･･･（ここを離れて）そんな見知らぬ土地で孫の世話をするだけの生活は気が進まなかったのよ。」

そしてＫさんは、彼女の人間関係に理解を示す息子たちとの関係を維持したいと願って

いる。そのため子供と同居せず、生活保護をうけて一人暮らしを続けている。(3)

「（子供から）お金を一円でも借りたら対等にものが言えないじゃん。そんなの嫌だよ。どの子も　私の言うことときくのにさ。･･･この前もね、（病院に付き添ってくれた）Hさんにあげるから上等なウイスキーちょうだいっていったら、二人（長男と次男）ともすぐにもってきたよ。･･･（田舎と違って）ここでは生活保護を受けていても誰も悪く言わないし、すごく幸せ。私は私のペースでやっているから、･･･」

すなわち彼女たちは、相互依存のネットワークと競合せずに成立する子供に対して、選好を示すのである。

(b)ケースの考察　子供との関係の選択基準

高齢女性は、家族よりも広い範囲で相互依存的なネットワークを形成している。そのため独居理由が示すように、彼女たちは子供との結びつきを、既存のネットワークと両立可能なように調整する。つまり既にある相互依存のネットワークの一部に組み込める子供に対して、選好を示している。そして子供と結びつくことは、ケアラーとしての能力を展開し、人間関係を自由に広げる基盤となる。故に高齢女性の子供に対する選択基準は、高齢女性それぞれの望む生き方を認め、その生き方を保障する類の援助を与えるかどうか、におかれている。

かつて老親の幸福感は、老親を支える立場にある子供の感情に左右されがち［川崎,1987:239］といわれてきた。だが今日、子供は保護者ではない。むしろ高齢女性が望んだ生活を形成するための、協力者という立場にいる。子供との結びつきは、高齢女性の生き方にあわせて選択され、多様な生き方を保障する結びつきとなっている。こうした状況は、柔軟性のある親子関係が生まれている、としか表現できないだろう。

(4)柔軟性のある親子関係の生成

今日、高齢者は家族の網目から抜け落ちやすくなっている。ここではそうした時代における、高齢女性の親子関係をテーマにしている。先行研究の検討からは、子供との結びつきを選択する高齢者という視点が浮上する。その視点を、高齢女性がもつネットワークづくりの能力という、前章で指摘した議論のなかに、導入したわけである。そしてネットワークの多様性と、子供に対する選好の在り方を、検討した。そこから見えてきたのは、それぞれの望む方向に広げたネットワークを維持したいが故に、子供との関係を選択する高齢女性である。

かつて小平は『老人福祉とライフヒストリー』［1981］で、規格化されたケアよりも、ひとそれぞれの生活の多様さを認める援助の必要性を指摘した。高齢者が自分のライフスタイルにあった援助を求めているのは、現在もかわりない。だが本稿が示すのは、今日の高齢女性は、オーダーメイドの援助を「座して待つ」のではない事だ。それらを獲得するために、自分から子供との結びつきを選択しているのである。

とりわけ本稿の議論は、社会的弱者とみなされる人の事例をもとに、多様な生き方を保障する親子関係を扱っている。死別シングルの独居女性は老いの新局面を集約しているわけだが、重要なのは、そうした時期に社会的弱者であっても、自分の望む老いの生き方をもち、その目的にそって子供との関係を選択していることだ。もちろんそこには 、「やせ我慢」も含まれているだろう。だが結構したたかで弱者の範疇に収まりきらない側面がある。彼女たちは経済面、日常生活面で多少の代償を払ってでも、プライドを守ろうとしているように感じられる。そうした高齢女性像を見ると、我々はこれまで高齢者を弱者とみなすが故に、かれらがもつ意志や能力をうまく展開させるための支援の重要性を、見落としてきたのではないかと思うのである。

そこで次に、高齢女性が最も好んで結びつきを深める存在である、娘との関係を対象にする。そして高齢女性は娘からどのような援助をひきだしているのか、母娘関係の生成プロセスを追うことで考えてみたい。

三節　母と娘を結ぶもの

(1)母娘関係論のなかの母親

近年母娘関係をめぐる議論が盛んである。チョドローの議論をひくまでもなく、娘にとって母親は最強の役割モデルであり、そのことの弊害が関心の焦点になっている。拒食症（成熟拒否）など若い女性の病理を引き起こすのは、娘に過度の期待をしたり、または自立を妨げたりと、子供が個人として成長することを阻害する母親である。[高石,1997]臨床の場面では、こうした問題含みの母親に対して、娘に「母殺し」をして母親の期待から自由になることを重視している。

老年期の親子研究が描く母親としての高齢女性も、自分との類似性の強い子供との結びつきを強めるものと、イメージされている。例えばある教科書的な本は、以下のように述べている。高齢者は子供に自分との連続性を求めており、人生で築いた最良のものを子供に伝えられたらどうかを、子供の行動を通して判断する。そのため（高齢女性にとって）子供の離婚、とりわけ娘の自立志向(bit for independence)は脅威の的になりやすい。[Jerrom,1993;89]老年期に限定した議論ではないが、日本においても母と娘が親密さを高めるのは、子育てなどライフコース上の体験を共有することだと実証した研究もある。[春日井,1997]

しかしながら、母と娘をいわば「似たもの同士」だという一般的な理解は、どれほど確かなものだろうか。例えば、精神分析の知見を加味し、エディプスモデルとは異なる、女性の親子関係の特徴（肯定的側面）を指摘した研究がある。彼女の議論は個別の母娘よりも、母娘に代表される異世代同性の関係性を扱うものである。女性のジェンダー・アイデンティティは、父息子関係のような対立図式ではないという。そして現段階ではやや抽象的だが、異世代同性との間では、類似性にもとづく違いを含み、差異を排除しない結びつきを構築できるという。[Woodward,1996:81-88] たしかにそのような目線で見渡せば、日本においても有吉佐和子の『紀ノ川』や『香華』など、育った環境や性格の違う母と娘とが、葛藤を経ても距離感を縮められないままに、親子の絆を維持していく物語はある。

そうした流れをくみ、高齢女性と彼女たちの娘、それぞれの生き方をめぐる「くいちがい」に着目する。そして高齢女性は生き方にギャップのある娘と、どのようにして親密な関係を築くのか、調査事例から検討する。その後に、高齢女性は若い世代の女性との関係に、何を求めているのかを、考えてみたい。

(2)調査概要

用いるデータは、T女子大学同窓会の京都、大阪、神戸と横浜の各支部に属する戦前の卒業生、二六名から収拾したライフストーリーである。調査期間は一九九八年三月から八月で、該当者に対して、郵送法によるスクリーン調査と、個別面接法によるライフヒストリー調査の二段階で行なった。

スクリーン調査の段階で、調査対象者は、娘がいるグループと娘がいないグループに分けている。娘がいるグループの高齢女性と娘の組合せは、中年期に職業をもっていたか主婦であったかを目安に、母娘のライフコースが同一かどうかで分類した。その上で、スクリーン調査時にインタビューへの協力を申し出てくれた人のうちから、各グループとも高齢女性の中年期のライフコースがなるべく均等になるように注意して、最終的な調査対象者を絞った。彼女たちそれぞれに、娘など若い世代の女性との関わりを中心に、現在の生活全般について語ってもらった。

検討のための見取り図を示すと、調査対象者が挙げた親しくしている人物のカテゴリーは、以下のようになった。ここでは、娘がいて娘と親しい人と、（娘の有無に関わらず）娘以外の若い世代の女性と親しくしている人とを、議論の対象にする。

	親しい異世代同性がいる					いない	合計
	娘	嫁	姪	妹	その他		
娘がいる人	14	1	0	1	0	1	17
娘がいない人		2	2	1	2	3	9

彼女たちは、専門学校卒業者が人口の一%という時代に高等教育を受けており、高齢女性全体のなかでは恵まれた家庭に生まれた人たちであり、現在も社会階層として高めの人が多い。扶養の観点からは、子供との関係を維持する必然性は低い。そのような高齢女性は、やや特殊だという考え方もあるだろう。しかし老人クラブや高齢者住宅居住者と同じく、（愛着の度合いは別であるが）日常生活で最も接触が多い子供はたいがい娘である。その娘は、口喧しいけれども遠慮なく頼みやすい、良い相談相手だというのが共通している。そして他の高齢女性と比べると彼女たちは、娘との関係や自分の生き方などを客観的に捉えて言葉で表現する、その能力が際立っていたため、データとして採用した。

(3)異質性を含んだ母娘関係の形成プロセス

(a)老いの生き方をめぐる、娘への自己主張

ここで着目する異質性は、高齢女性の生き方と、娘が理想とする老人の生き方の間にある「くいちがい」である。娘のアドバイスと援助を、高齢女性は老いの生き方の中でどのようにうけとり対応しているかを検討すると、母と娘の相互作用には、三つの局面が浮かんできた。

・第一段階　娘のアドバイスへの反発

近年、高齢者の生き方は多様化している。しばしば「残り時間が少ないのだから自由にさせて」との願望をもつ。例えば行政が高齢者の社会参加のためにすすめるシルバーボランティアは、高齢者のニーズをつかみきれていない。ある女性は、「夫と夫の両親、自分の両親と、介護はもう沢山。申し訳ないけれど、施設や病院ボランティアはいやなの。・・・今の楽しみは編み物なの」という。高齢者サイドの個別性が高まっているため、彼女たちの生活を方向付けようとする娘のアドバイスも、反発を招く要素となりやすい。そうした娘のアドバイスの典型的な受けとめられ方の事例をあげよう。

「娘(民生委員)は世の中にはもっと恵まれない人もいるのよ、目を外にむけなさいって言うの。・・・こうしなさいって、言うのも言われるのも、私は嫌い。」

（Mさん八十五才）

「私にもっとアクティブになってほしくて、こんな本（『いきいきライフ』）をもってくるのよ。ボランティアブームなんかにのって、骨折したらどうするの。歳とっているのだから、好きな人と好きな事をやるわがままくらい許してよ。」

（Hさん八十才）

・第二段階　開き直り

娘の忠告を彼女たちは聞き流し、従わないことも多く、時にはむしろ開き直る。事例にあげた女性たちのように、アドバイスを機に、俳句やお見舞いの重要性が浮かび上がってくる。そして「自分にとって大切なこと」を確認するのである。

「娘は家にいるのが好きだから、私にもチョロチョロ出歩くなといいます。年寄りでないとつくれない俳句をつくりたくて、出歩くのはそのためなの。・・・ 私はもともと我が強いから、娘は諦めているのではないかしら。」（Fさん八十才）

「無理してまで人のお見舞いなんて行くのやめなさいって口喧しいの。理由って言われると困るけれど、Kさんを放っておけないから。いつも人に流されてきたから、頑固だって言われるとかえって嬉しくって。」（Tさん七六才）

・第三段階　娘からの援助

娘のアドバイスへのそうした対応のうえに、援助はなされている。サポートの内容は、重い買物など日常的援助の他に、自分の熱心にやっている活動と関連する事柄で助けられていると認識している。

「私が（市民運動の）署名を集めていると、職場に署名用紙をもっていってくれます。娘は活動に参加していませんが、話は通じますし、急ぎのFax.をだしてもらったり、利用してます。」（Mさん、八五才）

「今楽しみにしているのは洋裁です。私が着るものなど限りがありますから、頼

まれるとありがたいのよ。喜んでくれて、こちらも励みになりますから。」

（Ｓさん、八三才）

こうした娘のサポートは、アドバイスへの開直りと並行して進む。そのため援助の提供は高齢女性にとり、開き直りの態度の受け入れを含め、娘との間に自分の生き方を認める関係が成立したというニュアンスがある。高齢女性は大切にすることを理解する関係が娘との間でつくられているかは重要である。そのため娘からの是認をえられない女性は、時に意固地になり、援助も拒否する。

「あの子は自分のことだけが大事なの。不機嫌な顔で夫の介護に来るのをみて、痛感しました。･･･ 女子大のことも、今はもっとレベルの高い学校が沢山あるのだし、あそこには先が無いというの。自分のことが大切なら、他人のことも大切にしないとおかしいでしょ。おかげで私は一人で生きる気構えを与えられたわ。

（Ｉさん、八十才）

・援助の機能

高齢女性の望む生き方と、娘が高齢女性に望む生き方は、もともと必ずしも一致していない。娘は高齢女性がアドバイスへの反発、開直りをする事を是認し、協力をしている。そのような娘との関係のうえに、高齢女性は自分が望む老いの生き方を展開する。そして注目したいのは、以下の二つの事例のように、娘との関係を土台に、高齢女性は様々な活動に顔をだしていることだ。子供との良好な関係は、高齢女性を外部ネットワークへと押し出すといわないまでも、彼女たちの人間関係を家族内部へと収束させていない。

「子供というのは、同年令では広がらない、世の中の動きや生活そのものを科学する視点とか、情報がありますね。Ａ社の調味料を全部捨てましたのも、娘（公害問題に関わる）に教えられてから。娘達についていくために、色々な所へ行っていて話題をつくっています。」（Ｗさん七五才）

「（身に染みた教師臭さが嫌なのだけど）孫や子供と対等に話すためには、同じ

事をやっているわけでなくても、自分のやっていることから考えを示さなきゃ」といって、度々スケッチ旅行に出る。（Aさん七六才）

(b)参考／娘の異質性をとりこむ技法

次に、母親が娘に希望するライフスタイルと実際の娘のライフスタイルのギャップに着目する。すると高齢女性は、娘への期待と現実の娘のライフスタイルの間にあるギャップを小さくするように、娘の生き方を解釈し、娘を理解する母親であろうとする。繰り返しになるが、ここでいうライフスタイルは、女性が中年期に家庭と仕事のどちらに生活の中心をおくのかを指す。ギャップを小さくし、娘のライフスタイルを受け入れる方法には、三つのタイプがあるので、順次説明する。

タイプⅠは、娘の現実の方へと期待するライフスタイルを変化させる方法である。

「生活がかかっていないのに、どうして子供をおいて働くのだろうと思います。孫をみているとやはり親がきちんと家にいたほうが良いとわかりますが･･･教え子の同窓会に呼ばれて二五年ぶりに集まれば、世の中うまくできていて、全然できなかった子もそれなりになっているんですよ。だから(孫達も)二五年たてば大丈夫、心配することはないと気持ちが変わりました。」（Kさん七六才）

「無条件に家族はいいものと思っていましたので、結婚しなかったのはマイナスだと思います。でも娘の生活ぶりを見ていると、長く一人でいる人なりの生活を築いています。（交際の少ない家で育ったけれど）社交的だったみたいで･･･それもいいのかなと思うようになりました。」（Ⅰさん七六才）

タイプⅡは、新しい要素として、現実の娘以上に望ましくない状態を想定し、娘のライフスタイルを「それと比べれば良い」とみなす方法である。

「仕事をすれば責任感で能力ものばさせてもらえるでしょ。能力は私よりあるのに、自分で何かしようという覇気の無い娘です、そこが気に入らないの。でも私が最も理解できないのはパンパン使うために働く最近の女の人ね。･･･あの子はあき

れるぐらい、家族に尽くすことに喜びを見いだしていて、感心するわ。」

（Ｓさん八三才）

この場合は、遊ぶために働くという状況と比べればマシだという納得の仕方である。次の女性は仕事をやめずに三人の子供を育てる娘を、子供を産まないよりは良い、とみなしている。

「 兄弟でお留守番はかわいそうだけど、最近は一人しか子供を生まない風潮もありますよね。家族も大切なんだという気持ちはあの子はもっているし、よく考えてまあまあ子育てをしています。」（Ｗさん七五才）

タイプⅢは、期待するライフスタイルの難点を探し、娘の実際のライフスタイルの魅力を大きく評価する方法である。Ｋさんは、子供が寂しいという不利益を大きな問題とみなし、娘は子供を寂しがらせず、自分自身も張り切っているならば良いではないか、と納得する。

「わたしは夫を亡くして自立するチャンスに恵まれちゃっただけ･･･ 子供たちにも寂しい思いをさせました。娘は自分のいる場所でできることを、前向きにやっています。職業をもたなくても張り切っているのは同じですから良いことです。」

（Ｋさん八五才）

「娘は仕事に研かれていきました。あんなに頼もしくなるとは思いもしませんでした。家庭に入っていたらどうでしょう。（外国の人にくいつくなど）娘のようにはとうていできませんが、はっきり自己主張する人と一緒だと、生活も合理的で楽なことに気付きました。」（Ｔさん七五才）

この三類型の区分は、それぞれの人が三タイプのうちひとつというよりは、いくつかのタイプを多少重なりあってもっているという方が正確だろう。こうした現実との折り合いのプロセスを経て、多少の諦めを胸に、高齢女性は「理解ある母親」の役割を担う。そして娘のライフスタイルにあわせて様々な内容の協力をする。高齢女性のそのような強引な解釈の上に、良好な母娘関係は成り立っているのである。

(4)「娘性」を広げる高齢女性たち（血のつながった娘が不在の場合）

(a)「娘のような」結びつきの具体例

子供が息子のみの人や子供のいない人など、娘がいない人も少なくない。そして先に見たように、常に娘と良好な関係を築けるわけではない。良好な関係にある娘が不在である調査対象者は十三人であるが、その内の四名は若い世代の女性との交わりをほとんど持たない。この四人も女性の老いのタイプとして検討すべき意義はあるだろう。だがここでのテーマと照らして注目したのは、自分が産んだ娘以外の若い世代の女性との間で良好な関係を築く、後の九名である。彼女たちは、事例にあげる二人のように、嫁や姪、歳の離れた妹や養女などと、本人たちが「娘のよう」と形容する親密な関係を作り出している。高齢女性にとってその結びつきには、老いの生き方を承認し、それを支える援助を提供している点で、先にみた母娘の結びつきと共通性が高い。

Ｋさん（八五才）と連れ子の結びつき：Ｋさんは、再婚時に既に高校生だった前妻の子供（娘）とは、長いことさらりとした付き合いだった。しかしその娘が離婚の危機に直面した時、「彼女も私以外に頼る人がいない」と気付いた。その後は互いにあからさまになり、良好な関係を築いている。Ｋさんが何より満足しているのは、Ｋさんの生活の中心が信仰であることを理解してくれていることだ。「夫の葬式をキリスト教のスタイルでやらせてくれました。娘に信仰は伝えられませんでしたが、私たち夫婦が大切にしているものを理解してくれたのは嬉しかったですね。」という。またＫさんは足が悪いため、彼女に車で送ってもらって日曜ごとに教会へ行くことを楽しみにしている。

Ｓさん（八五才）と嫁の結びつき：Ｓさんは息子が三人おり、長男の嫁と仲がよい。長男の嫁に、他の二人の嫁と違うところがあるとすれば、最初の嫁だったため「（男の人ばかりの家に）よく来てくれた」という思いが強かったこと、そして彼女の実母が早くに亡くなっていることかと思う。彼女もこちらに相談にくるし、Ｓさんが離婚を考えたときもよく話を聞いてもらった。彼女に「私はお義母さんの味方ですから」と励まされ、「女同

士の連帯感」を感じている。

最近は手伝ってもらうことが増えたが、出来ることがあればやってあげたいと思っている。そのため趣味の七宝焼も、気楽にあげられるのはうれしい。きっちりとした次男の嫁には「嫌がられないかな」という心配がある。アクセサリーを依頼されると「お婆さんだし、できないわ」といいつつも、実際には辞める気配はない。むしろ人にあげるとなると講習会にも熱心に通うようになり、次のお誕生日、お正月にと目標を決めて作品づくりに精を出している。

(b)高齢女性が求める「娘性」

娘不在の人が、どの嫁、または嫁や姪のうちだれと関わりを深めるかを見ると、その相手は二つに分類できる。（八四頁の家族図を参照）一つは、実母不在（とそのヴァリエーション）型［タイプA］である。例えば先のSさん（A１）のように、三人の嫁のうち唯一実母を亡くした人と親しくしているタイプであり、今回の事例では六人が該当する。もう一つは、老いの生き方の承認型［タイプB］である。例えばMさん（B１）は僧侶の夫と老人ホームを経営し、栄養士として働いた。次男（後継ぎ）の嫁や実家の兄弟姉妹は仏教に対して無理解であり、反りがあわない。そのため長年調理場で共に働いた職員のひとり（独身）と親しくしている。彼女との付き合いを中心に、ホームの元職員との交際が展開されている。この他の二人（B２、B３）は、娘に大切にしていることを否定され、嫁や歳の離れた妹と親しくしているケースである。

高齢女性が親しくする相手は、一定の傾向がある。すなわち①血の繋がりがある人が多く夫方の親族には広がっていないこと、②居住地域の近隣性が高いこと、③家族構成に何かしら欠けたところがあることだ。例えば娘と不仲の女性（B３）は、しっかりした娘ではなく何かにつけて相談にくる妹と親しくしており、またYさん（A４）は実母が健在で遠方に住む二人の嫁ではなく、亡くなった妹の娘二人のうち、育児ノイローゼきみの姪との結びつきが強い。その相手に対して、高齢女性は「足りないところがあれば補ってやり

たい」という気持ちを発揮できる。つまり高齢女性にとってその相手は、「してあげられる」存在である。彼女たちは、自分の身辺で「入り込むスキ」のある人を捜し出しているようだ。

こうしてみると高齢女性は、老いの生き方の承認だけではなく、やってあげられることを受け取る対象を求めている。洋裁を趣味にする女性が、「頼んでくれてありがたい」というように、高齢女性にとって洋裁や七宝焼は老いの生き方として、一種の自己表現である。意地の悪い見方であるが、そのような活動は、高齢女性にできることであるが、特殊技能というほどの能力ではない。他の集団によっても容易に代替できる。七宝焼や洋服がほしければ、買うことも、ほかにも作れる人もいる。そのため高齢女性に作品を依頼してその作品をもらう相手は、高齢女性の自己表現の受手である。高齢女性が広げている娘的存在の方向性を見ていくと、その相手に求める「娘性」は、老いの生き方の承認を含め、広い意味での自己表現の場を保障（または提供）することのようである。

⑷考察　自己表現の受手としての娘性

従来母娘関係は、血縁に基づく類似性による結びつきとして、語られてきた。しかし娘のライフコースへはどうやら納得をしており、異質性を乗り越えることはできる。その上で、老いのライフスタイルへの承認として援助を受けている。さらには狭義の娘に限定せず、血縁に治まりやすいものの、「してあげられる存在」の範囲を、自己表現の場として広げていく。故に彼女たちにとって娘との（良好な）関係は、ライフスタイルを自分なりのものへと洗練させる過程だといえる。

高齢女性にとって娘的存在との結びつきを強めることは、援助を提供する強者に従ったりどちらか片方へと吸収合併されることではない。また二人で類似性（共通性）をもとに小宇宙を作ることではない。このような、他人との同意のなかに自分の個性を確立しようとする間柄は、山崎正和が言うやわらかい個人主義と重なるところが多い。

山崎のやわらかい個人主義とは、他者を自己実現の手段とし、そのために他者と戦う近

代的個人主義ではない。そして他者とのなれあいや、他者をはじめから意識しない集団主義の怠惰さでもない。それは、他者を身近に置きながらそれを畏怖し、あえて他人の評価のなかに自己の実現をめざすものである。[山崎,1990;48]高齢女性が自己表現の受手を求めてつくりだす母娘関係には、やわらかい個人主義の志向が流れている。高齢女性は無理矢理にも娘のライフスタイルへの納得を作り出し、また娘性を広げる熱意を持つ。それらの動きは、高齢女性が人生の物語を完成させるための聞き手（共同製作者）を求めていることを示している。高齢女性にとって娘との結びつきは、通常言われる類似性ゆえの親密さに限定されておらず、異質な二者間の有機的連帯というべき、相補的要素を含んでいると考えられる。

注

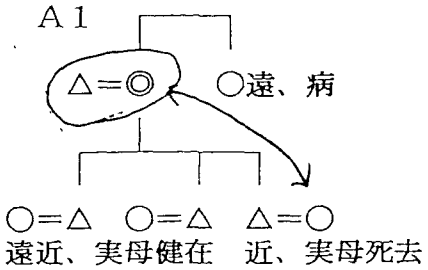
（1）高齢者住宅とは、一般の公団のなかにある数世帯を高齢者向けのバリアフリー設計にした住宅だ各戸は緊急ブザーで一階に住む生活協力員とつながっている。入居資格は、六五才以上で身の回りのことが自分ででき、一定の収入以下で、自分名義の不動産がないことである。

（2）ここでいう選好（preference）とは、考慮範囲に入っているいくつかの選択肢のうち、ある選択肢が他の選択肢よりも「良い」と主観的に判断されるものである。［佐伯、1980:8]

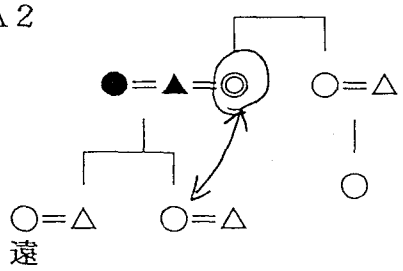
（3）Kさんは若くして夫を亡くし、裕福だった彼女の親がKさん親子の生活を支えた。生活保護を受け始めたのは、親の死後、中高生の息子三人を抱えていたときである。

タイプA　実母不在型とそのヴァリエーション

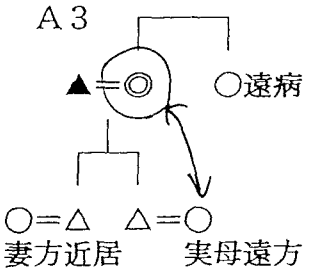
A1



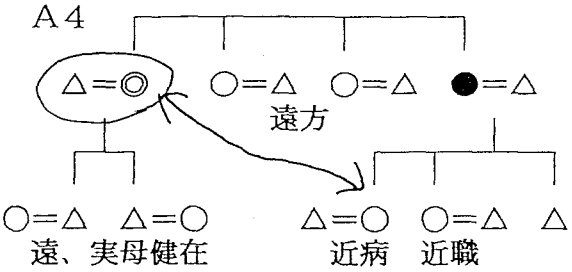
A2



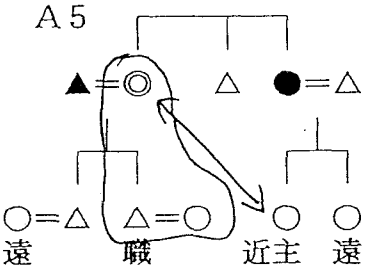
A3



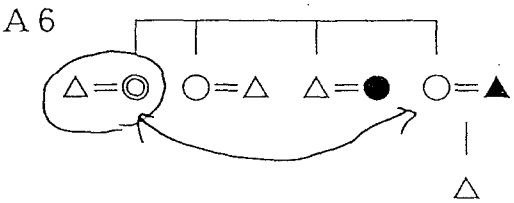
A4



A5

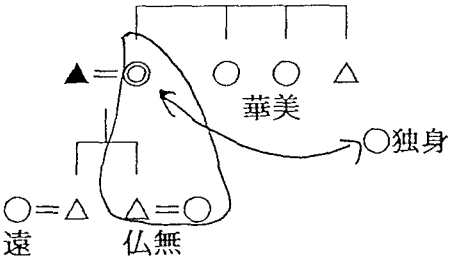


A6

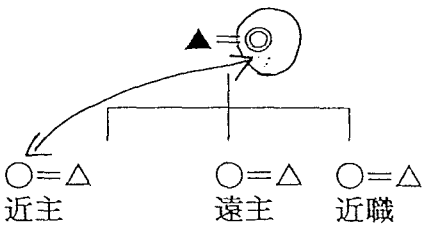


タイプB　老いの生き方承認型

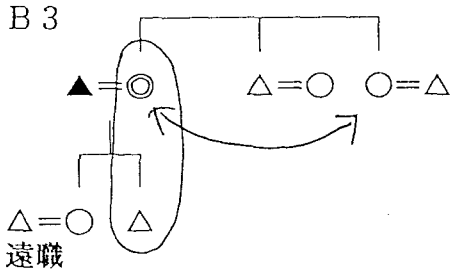
B1



B2



B3



◎　高齢女性本人
△　男性　　○　女性
▲　男性故人　●女性故人
←→　親密な関係
赤ペン　同居者の輪

終章

・今日の親子関係とネットワークづくり

調査結果をふまえて、日本文化論の視点からの、老年期の人間関係に関する指摘を再度見なおしてみよう。これまで日本において老年期のネットワークが未発達なのは、親子関係が良好であるためと繰り返し語られている。そして親子の絆が弱体化した今日、友人ネットワークの重要性が高まるといわれている。いわば高齢者の人間関係は、結合定量の法則が当てはまるものとして扱っているのである。しかし本研究では、親子関係とネットワークは競合する人間関係なのかを、二つの検討課題にそって、調査事例から問い直してみたのである。

なぜなら親子の流動化として老年期家族の危機を語るとき、その論拠となる統計データは、同居率の低下であることがほとんどである。つまり同居率の低下を、親子の絆の弱体化とみなす考え方に依存する主張だ。しかし子供世代の親への扶養意識は変容しつつも、八割の人が扶養義務を感じ、また高齢者の子供に対する扶養期待は温存されている。そしてよくみると、一章の統計調査資料が教えるように、日本では欧米とは違い、生涯を子供と別に過ごすのではなく、八十才以上になると再び同居率は上昇するのである。つまり同居率を低下させているのは、ターミナル同居に入るまでの、元気な間に別居をする傾向である。そのため、老年期の一部に出現している介護不要な時期には、親子が同居をしなくなっても、それが親子の危機であるとか、アメリカ的なネットワークの発展につながるという議論は、安直に思われる。

もう一つ、老年期家族を語るとき忘れてならないのが、しばしば家族は高齢者の受皿として捉えられるが、要介護状態ではない新局面の高齢者にとって、家庭は安住できるところではないことだ。我々が自明にしている近代的な家族の成立を歴史的にふりかえると、高齢者は家庭で要介護者としてしか、居場所を与えられていない。親子関係の良悪に関わらず、要介護状態でない場合、家族内において老年期に積極的な役割は与えられにくいのである。高齢者は元気であると、家族内でもてあまされる、余剰能力なのである。

そこでまず三章では、老年期の人間関係に対して、高齢者のネットワークづくりの能力

という観点にたってみた。そして彼（女）らが、どのようなモチベーションでネットワークをつくっているのかを、検討したのである。

すると日本の平均的高齢男性の心情として、職場で現役であり続けられないけれども働きたいということが、統計調査資料から浮かんでくる。ネットワークをつくることは、女性のように日常生活に密着したものではないが、第二の仕事とでも呼ぶべき、仕事に替わる活動を求めていることが、動機なのである。故に彼らの動機は、子供からの援助が十分提供されれば治まるものではない。また女性の場合、彼女たちに主婦役割を求める家族がいなくなってからは、主婦役割を通じて養った能力を用いて家族の外でネットワークを作っているのである。そして親子関係は、そのネットワークを維持するために、状況にあわせて柔軟に調整される。男性も女性も、いわば家族内での余剰能力を活用して、家族外部でのネットワークづくりをしているのである。そのため親子とネットワークは、彼らにとって、二者択一できるような同質のものではない。

そのため親子が良好であることとネットワークの発達は、同時に起こりうることなのである。ターミナル同居までの女性の場合という括弧つきであるが、むしろ親子関係は高齢者のネットワークづくりを促進する側面がある。こうしてみると、やはり両者が競合するとしてテーマになってきたのは、老年期の人間関係を、援助や援助期待を媒介にした関係だという前提から、捉えてきたためだと思われる。

さて次に四章では、老年期親子の新しい局面である、サポートの必然性が低い高齢者と子供の結びつきを扱っている。この局面におりネットワークを広げる高齢者が、親子関係の在り方をどのように選択するのかを検討したのである。ここで実施した二種の調査からは、高齢女性が老いのライフスタイルを築くために親子関係をうまく利用する姿が浮かんできた。それらをまとめると、今日、血縁に比べて高齢者の作り出す選択縁の方が、老年期の生活についてより多くのことを説明している傾向にあるようだ。しかし以下の調査結果が示すように、それは血縁が、選択縁において重要な役割をはたしていないことではな

い、といえる。

まず福祉住宅(シルバーピア)居住者の場合、家族よりも広い範囲にネットワークを広げており、日常生活は子供とは別の領域で営まれている。そして高齢女性の独居理由から、子供への選択基準を検討した。すると彼女たちそれぞれが望む方向に広げたネットワークと、両立可能な子供に対して、選好を示していることがわかる。つまり親子は、多様な生き方を保障するような結びつきなのである。

さらに次の母娘関係の調査では、高齢女性と娘の、アドバイスと援助をめぐる相互作用を検討した。すると娘との良好な関係は、高齢女性が望む老いの生き方を承認する結びつきであり、機能として高齢女性が家族外部での活動に関わることに弾みをつけるものである。とりわけ注目したいのが、娘が不在の高齢女性の動きである。彼女たちの少なからずは、若い世代の女性との間で、母娘の結びつきに似たものを作り出している。そして娘的存在の広げ方には、一定の傾向がある。例えば複数の嫁のなかでも、実母が亡くなっており「母親がついていない」嫁という具合に、高齢女性が入りこむ余地がある人である。彼女たちにとって娘的存在とは、「してあげること」がある人であるため、自己表現の受け手であるといえる。そのような娘性を、誰に対しても期待できるわけではない。むしろ相手は親族の周辺などに集中しており、多分に制約があるだろう。だが高齢女性はおかれた状況の中で、異世代との良好な関係を求めて、最良の方法を探しているのである。

以上のように子供は、高齢者の生活の多様性を保障する協力者としての役割を、担っている。つまりもっとも固定した関係とイメージされる親子であるが、こうあるべきという決まった役割がある関係ではないのである。そして高齢女性は、子供が担うこうした役割の担い手の範囲を、狭義の血縁より広くに、分散させている。親子関係に対しては、ネットワーク維持や自己表現の受手など、広い意味での「人生の物語」を作るという目的にむけて、合理的選択が働いている。だがそこには、家族的雰囲気によってオブラートがかけられているのである。そのような親子（的）関係によって、老年期のネットワークは下支えされているのである。

・高齢男女とネットワークづくり

さて本研究の第二の目的は、男性の老いと女性の老いを書き分けることである。標準的な日本人のライフコースとして、いわゆる社会的に要請される役割を離れるのには、男女で時間差がある。男性は定年後、徐々に仕事を減らし完全に引退し、その後を妻と共に過ごして人生を終える。女性は出産児数が少なくなったため、子育て終了と夫の定年までの間に、老いの準備をする時期ができる。そしてその後に引退した夫と過ごす時期、さらにその後に寡婦としての時期を過ごす。このように男性にとっては老年期のすべてである期間が、女性にとっては、老年期の一部にすぎない。

よく言われる事だが、男性が退職した時に、すでに妻の眼が外に向いている。その一因は、ライフコースに由来する双方の老年期を意識するタイミングのずれである。三章で見た性別ネットワークの展開は、こうした男女の意識のずれの延長線上に把握できる。高齢男女は、それぞれ中年期までに培った能力を活用して、公私の区分からするとあいまいな中間領域にネットワークをつくっている。しかしそれぞれのつくりだすネットワークは、同質のものではない。

男性の場合、老人会との関わり方を類型別に検討すると、彼らは、課題追求型のライフスタイルであることが明らかになった。地域社会への関わりがもっとも深い人々は、職場というタテ社会で養った経験を生かしながら、地域で取り組む課題を探し、それを老人会の会員と共に実践している。とりわけ公的組織がカバーしきれない地域居住者のニーズに応じて、活動を広げている。その活動を通して、地域における共通の問題解決、老人会の活性化という特定の目標達成に向けた人間関係を作っているのである。そのため彼らはしばしば批判される、序列志向のライフスタイルではない。とりわけ老人会に関わりが深い人に顕著だが、高齢男性は地域居住者と公的組織の隙間をうめる活動を担っており、そのネットワークは公的組織の中間領域に位置付けられる。

女性の場合、社会からの孤立が問題とされる主婦役割を担う経験は、老年期に社会参加の経路となっている。なぜなら主婦が関わる生命再生産労働は、家族外部の諸組織と共同

で行うため、老年期に家族が縮小したのち、家族外部の生命再生産労働を担う諸機関へと自らの能力を広げることもできる。また生活に密着した結びつきであるため、老人会会員のように協助システムとなりやすい。（さらに言えば、夫がいる時期から協助システムを通して子供との関わり方を学ぶなど、いわば彼女たちは寡婦になってからの予期的社会化をしている。）そうしてつくられたネットワークは、家族外部である点で私的領域ではないものの、公的領域において明確な役割を担っていないため、あいまいな中間領域に位置付けられる。

さて、こうした中間領域に、高齢者が閉じこめられているとみなすのか、それとも高齢者が作り出したものと評価するのかは、論が別れるところだろう。一つ明らかなのは、主婦が実権を握る家庭では、高齢者は要介護性により特徴づけられており、男女とも元気であると近代家族内（私的領域）では余剰能力であることだ。とりわけ高齢男性の場合、中年期まで過ごした職場（公的領域）にいられず、家庭においては老後のパートナーとして妻に期待を寄せつつも妻は外を向いている。すると老後に何かしようという意欲を発揮する場所は、地域しか残っていないのである。家族や職場から離れざる負えない状況を改善するかのように、高齢者はネットワークづくりをしている。

さて、老年期に男女とも、余剰能力をネットワークづくりに活用するが、親子関係や夫婦関係が持つ意味は、男女で異なっている。男性は、中年期との継続性を地域でのネットワークから引き出しており、親子関係をライフスタイルにあわせて調整することはない。また先に指摘したように、親しい親族も妻方に比重を置いているのである。これらを本研究の事例と重ねると、高齢男性のネットワークは、高齢女性（妻）が作った親族ネットワークが土台に存在しているといえる。そして夫婦が共通の趣味を持つなど同伴行動が乏しい日本において、現段階で「良好な夫婦関係」は、高齢男性が、妻のネットワークを妨げないように自らのネットワークを作ることで保たれているようだ。

趨勢として性別ネットワークが発展している日本において、老夫婦がネットワークの共同をすすめるのは、子供の有無にともなう老後観によるところが大きいと思われる。「互

いに二人しかいないのだから仲良く」という意見は、圧倒的に、子供の無い夫婦に強い。今回収拾したデータの中で、子供の無い夫婦の事例は極端に少ないので、一般にどうであるかはわからない。しかし例えば、退職した夫が妻の活動に合流したり、妻が近所の友人との「歩こう会」よりも、夫が参加しやすい老人会のハイキングに優先的に参加しているなど、夫と妻が歩み寄りを示す事例も散見する。

子供が不在の夫婦の場合、夫婦の良好な関係の在り方そのものが違ってくるようだが、老年期夫婦については、本研究から結論めいた事を引き出すのは筋違いである。だがここでのテーマとの関連で指摘できるのは、女性の場合、老年期に夫婦関係が占める意義は、男性よりも少ないこと。また男性の場合、夫婦関係は高齢女性にとっての親子関係のように、関係が良好であっても、ネットワークつくりのモチベーションを低下させることはないが、ネットワークの展開において拠点となる、重要な人間関係であることである。

・過渡期としての現代

さて最後に、老年期の人間関係をここまで見たことからまとめ、人間関係の在り方の時代性についてふれておきたい。老年期に男性、女性とでつくりだすネットワークの質は違うが、いずれもネットワークの広げ方は、中年期まで関わった社会構造上の役割によって規定されている。そうした条件があるものの、社会との繋がりを持ち続けるのは、一種のしぶとさである。高齢者は社会構造上の制約から自由ではなく、それはそれとして受け入れざるをおえないが、そうした状況下で、中間領域に活路を見いだしているのである。彼らは弱い立場に置かれているが、福祉行政論が描く、助けを必要とする弱者であるだけではない。結局のところ、高齢者のネットワークづくりは、余った時間とエネルギーをどこに向けるかという彼（女）らの、社会から切り離されてもまだ終わらない「人生の物語」の完成に向けての動きとして把握できる。（それはひとりの人間を高齢者として分断する社会への、彼らのささやかな抵抗と受け取れる。）そして親子関係は、ネットワークづくりのために巧みに活用されている。

現在の高齢者の時代的特徴を考えるとき見落とせないのが、一世代前の高齢者までは、子供を戦争や病でなくすことが多かったことだ。とりわけ一世代前の人々は、自分の子供の青年期が戦時中であり、この子供たちとは、森岡清美が「死のコンボイ経験世代」ないし「決死の世代」と名付けた世代である。そのため彼らは、子供や孫を死なす、看取りの経験を持っている。その時代に老年期まで生き残ることは、周囲の人々の死に出会うことだった。故に日本ではつい最近まで、老いの世俗化以前のように、老いをいとおしみ、老年期に生き残りとしての負い目を付着させた文化を共有していた、と考えられる。

それが今日、本研究で見たように高齢者は、自分の老年期に対しては、余剰能力をいかに使うか、つまり老いにいかにして自分なりの意味を与えるか、を問題にしている。「余生」は以前とは比べ様もなく長期化しており、また彼らも元気であるため、この時期を心謹んで過ごすという心境からはかけ離れている。さらに老いの世俗化という観点から補足をすると、誰もが老年期まで生きるようになったため、周囲の人の夭折に遭遇する体験も稀となった。そしてこれから老年期にさしかかる世代では、子供や孫の夭折ではなく、六十代になってから、八十、九十代の親を介護し看取るのである。むしろ重荷である親の老いを目のあたりにするため、老いるまで生きることを希少なものとしてありがたいと受け取る発想は、ますますしにくくなる。その点で日本ではこれから、老いの文化全体の世俗化が急速に進んでいく、といえる。

同時に現在は、親世代と子供世代の人口比が一対二から二対二へと、これからの二五年でますます拮抗する時代への過渡期である。現在までのところ、何となく残る老親扶養意識は、親子関係とネットワークを巧みに使い分ける事を可能にしている。幸い日本では、近代化過程で欧米と同様に、老いが弱いものとして医学的に把握されただけでなく、その弱い老いを家庭内部へと囲い込む、老いの家内性が確立した。そしてその意識は、今日まで多少の変容を伴いつつも途切れていない。すなわち子供世代が高齢者層を充分支える人口規模をもたなくなっても、急速な人口学的変動に、意識変革のスピードは追いついていかない。いわゆる文化遅滞の状態である。高齢者にとって子供は援助源と位置付けられて

おり、子供の側にも親への扶養意識は残っている。

そのためアメリカのように、子供に依存しないことを目標に友人ネットワークを広げるという発想は薄く、老いに対して非防衛的である。こうした高齢者のぬるま湯感覚は、「甘い同居幻想」としてしばしば否定されており、要介護状態にある老年期には、それも正論であろう。しかし、繰り返しになるが、家族はその歴史的成立からみて、元気な高齢者を受け入れるキャパシティはないのである。そして老年期家族の危機という議論は、本研究が一貫して指摘している、事柄を見落としていないだろうか。第一に、老年期には要介護状態ではない一時期が出現していること、第二に、高齢者がよりよいライフスタイルのために、自分のおかれた状況を改善する力を持っていることである。

現在のところ日本の高齢者は、うっすらと残る老親扶養意識のおかげで、親子関係を活用しつつ、ゆたかなネットワークづくりをして、老年期を過ごしている。この現象は、老親扶養意識が残っている状態で、子供が高齢者を抱える人口規模でなくなったという、高速高齢化のメリットである。たしかに今後、親子の人口比からみて、現代のようなネットワークと親子関係の使い分けが可能であり続けるか、それは定かではない。しかし本研究からは、例えば中間領域に活路を見いだしたり、娘的存在を作り出すように、置かれた状況の中で、自分の老年期にライフスタイルにとって最良の方法を探し、人間関係を広げている、高齢者の姿が浮かんでくる。そうした彼（女）等の老獪さをみると、高速高齢化の日本であるからこそ、異世代交流のための知恵の結晶として、親子という結びつきのメタファーは生き残るように思われる。

参考文献一覧

Adams, R.G., and Briezner, R., (eds), 1989, *Older Adult Friendships*, Sage.

安達正嗣、1996年「老年期世帯と家族・親族ネットワーク」『いま家族に何が起こっているのか』ミネルヴァ書房、118-135頁。

赤松正子、1987年「これからの老人クラブ」『老人問題研究』7号、126-30.

Akiyama, H., Antonucci, T.C., Campbell, R., 1997, "Exchange and Reciprocity among Two Generations of Japanese and American Women," in *The Cultural Context of Aging* Bergin and Garvey, pp.163-178.

Allan, G., 1989, *Friendships:Developing a Sociological Perspectives*, Harvester Wheatsheaf.(仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社、1993年。)

天木志保美, 1993年「ケアラーとしての主婦」『家族社会学研究』5号、75-85頁。

天野正子、1972年「「老い」に取り組む女たち」『思想の科学』８月号、81-90頁 。

安藤究、1994年「新しい祖母の誕生？」森岡清志・中村一樹編『変容する高齢者像』日本評論社、79-118頁。

青井和夫編、1988年『高学齢女性のライフコース』勁草書房。

青井和夫、1992年『長寿社会論』流通経済大学出版会。

Arber, S. andGinn, J., 1991, *Gender and Later Life*, Sage.

Arber, S and Ginn, J., 1995, "Choice and Constraint inthe Retirement of Older Married Women" in Arber and Ginn(eds.), *Connecting Gender and Ageing*, Open Univ. Press , pp.68-86.

Askhan, J., 1995, "The Married lives of Older People" in Arber, S and Ginn, J (eds.) *Connecting Gender and Ageing*, Open University Press, pp.87-97.

Atchley, R.C., 1989," A Continuity theory of normal aging", *The Gerontlogist*, 29 pp.183-190.

有吉佐和子、1959年『紀ノ川』中央公論社。

1967年『華岡青洲の妻』新潮社。

1961-2年『香華』婦人公論。

1972年『恍惚の人』新潮社。

Beauvoir, S.de, 1970, *La Vieillesse*, Editions Gallimard.(朝吹三吉訳『老い』人文

書院、1972年。)

Bernard, M., and Meade, K., 1993, "A Third Age Lifestyle for Older Women?", in Bernard, M., and Meade, K., (eds.) *Women Come of Age:Perspectives on the Lives of Older Women*, Edward Arnold, pp. 146-66.

Bernard, M., Itzin, C., Phillipson, C. and Skucha, J., 1995, "Genderd Work, Genderd Retirement" in Arber, S. and Ginn, J. (eds.) *Connecting Gender and Ageing*, Open Univ. Press. pp. 56-68.

Brubaker, T., 1990, "Families in Later Life :A Burgeoning Research Area", *Journal of Marriage and the Family*, 52, pp. 962-3.

『仏教』特集＝老いを生きる, 1992年、法蔵館　№18。

Butler, R. N., 1975, *Why Survive? Being Old in America*, Harper and Row. (内薗耕二監訳『老後はなぜ悲劇なのか』メジカルフレンド社、1992年。)

Clausen, J. A., 1986, *The Life Course*, Prentice-Hall Inc.. (佐藤慶幸、小島茂訳『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部, 1987年)

Cole, T., 1992, *Journey of Life*, Cambridge.

Cornel, L. L., 1983, "retirement inherence, and intergenerational conflict in preindustral Japan," *Journal of Family History*, Spring.

Cornel, L. L., 1991 "Death of Old Women:Forklore and Differential Mortality in Nineteenth-century Japan" in Bernstein, G. L. (ed) *Recreating Japanese Women, 1600-1945*, Univ. of California Press, pp. 71-87

Crohan, S. E., Antonucci, T. C., 1989, "Friends as a Source of Social Support in Old Age," in *Older Adult Friendships*, Sage, pp. 129-146.

Cumming, E. and Henry, W. E., 1961, *Growing Old:The Process of Disengagement*, Basic Books.

土居健郎、1971年『甘えの構造』、弘文社。

エイジング総合研究センター編著、1996年『長寿社会の基礎知識』中央法規出版.

江原由美子、1987年「男性の老い、女性の老い」今村仁司ほか編『老いの様式　その現代的省察』誠信書房、258-281頁。

フォーラム女性の生活と展望編、1994年『図表でみる女の現在』、ミネルヴァ書房.

藤崎宏子、1998年『高齢者・家族・ネットワーク』倍風館。

藤谷綾子、「老人クラブの見直しに関する一考察」58-63ページ。

藤本信子、1981年「祖父母と孫」上子武次、増田光吉編著『日本人の家族関係』有斐閣、167-194頁

Friedan, B., 1993, *THE FOUUTAIN OF AGE.*（山本博子、寺澤恵美子訳『老いの泉』西村書店，1995年。）

深谷昌志、1986年『良妻賢母主義の教育』黎明書房。

Gallagher, S., 1994, *Older People Giving Care*, Auburn House.

Gerstel, N., Gallagher, S., 1993, "Kinkeeping and Distress," *Journal of Marriage and the Family*, 55, pp. 598-608.

後藤澄子、1990年「生命再生産労働と女性」『名古屋社会学論集』11号、227-244頁

後藤澄子、1990年「家事労働理論の統合への一試案」『ソシオロジ』107号。

Gratton, B and Harber, C., 1993, "Rethinking Industrialization: Old Age and the Family Economy," in Cole, T. (eds) *Voices and Visions of Aging* Springer Publishing Company, pp. 134-159

Greenberg, J., &Becker, M., 1988, "Aginf Parents as Family Resources," *The Gerontlogist* 28, 786-791.

Gubrium, J. F., 1975, "Being Single in Old Age", in *International Journal of Aging and Human Development*, Vol. 6(1), pp. 29-41.

Gubrium, J. F., and Sanker, A. (eds.), 1994, *Qualitative Methods in Aging Research*, Sage.

グループなごん、1996年『日本人の老後』晶文社。

浜口晴彦、坂田正顕編著、1992年『世界のエンジング文化』早稲田大学出版部。

原ひろ子、1987年「老人と友人」『老いの発見４　老いを生きる場』岩波書店、64-74頁。

Hareven, T. K. and Uhlenberg, P., 1995, "Transition to widowhood and Family Support System in Twentieth Century, Northeastern United State," in Laslet, P. and Kertzer, D (eds) *Aging in the Past*, Univ. of California Press, pp. 273-302.

ハーゲスタット、1987年「家族―親族のつなぎ役としての女性と高齢者」パイファー、ブロンティ編（黒田俊夫監訳）『高齢化社会　選択と挑戦』文真堂、130-48頁。

Hashimoto, A., 1996, *The Gift of Generations Japanese and American Perspectives on Aging and Social Contract*, Cambridge.

橋本満、1994年『物語としての「家」』行路社。

Havighurst, R. J., Neugarten, B. L., and Tobin, S. S., 1968, "Disengagement and patterns of aging." in B. L. Neugarten (Ed.), *Middle Age and Aging*, Univ. of Chicago

Hatch, L. R. and Thompson, A., 1992, "Family Responsibities and Women's Retirement" in Szinovacz, M. (eds.), *Families and Retirement*, Sage, pp. 99-113.

樋口恵子監修高齢化社会を良くする女性の会編、1991年『女・老いとひらく』ミネルヴァ書房。

樋口恵子編集、1992年『エイジズム　おばあさんの逆襲』学陽書房。

比較家族史学会編、1996年『辞典　家族』弘文堂。

姫岡勤、1986年「近世の親子関係」光吉利幸、松本通晴、正岡寛司編『リーディングス日本の社会学・３伝統家族』東大出版会、117-131頁。

平岡公一、1986年「社会学における老年研究の動向と課題」『社会学評論』37(1)、79-87ページ。

Hirsh,M.,1989,*The Mother/Daughter Plot*,Indiana Univ.Press.（『母と娘の物語』紀国屋書店、1996年）

Hockey,J.and James,A.,1993 *Growing up and Growing Old* ,Sage.

Hogan,D.P. ,Eggbeen,D.J.,1990,"Giving Between Generations in American Family," *Human Nature*,21,pp.1-32.

Hogan,D.P. ,Eggbeen,D.J.,1993,"The Structure of Intergenerational Exchange in American Family",*American Journal of Sociology*,98,pp.1428-58.

Hooyman,N.,Kiyaku,H.A.,(Eds.),1993,*Social Gerontlogy*(third edition),Univ. of Washington.

井上真理子、大村英昭編著、1995年『ファミリズムの再発見』世界思想社。

井上俊、1986年「老いのイメージ」『老いの発見２　老いのパラダイム』岩波書店161-186頁。

1993年「都市　装置とイメージ」大嶺顕編著『地域のロゴス』世界思想社176-183頁。

井上輝子、江原由美子編、1995年『女性のデータブック（第２版）』有斐閣。

井上輝子、上野千鶴子、江原由美子編、1995年『性役割　日本のフェミニズム３』岩波書店。

伊藤公雄、1995年「父親のゆくえ」井上真理子、大村英昭編著『ファミリズムの再発見』世界思想社、171-201頁。

Jerrom,D.,1993,"Intimacy and sexuality amongst older women", in Bernard,M., and Meade,K.,(eds.)*Women Come of Age:Perspectives on the Lives of Older Women*, Edward Arnold,pp.85-105.

ジュリスト増刊総合特集12号、1979年「座談会　日本社会と老人支配」『高齢化社会と老人問題』有斐閣、310-24頁。

金子勇 、1993年『都市高齢社会と地域福祉』ミネルヴァ書房。

1995年『高齢社会・何がどう変わるか』講談社現代新書。

春日井典子、1997年『ライフコースと親子関係』行路社。

Kaufman, S. R. 1986 , *The Ageless Self*, Univ. of Wisconsin System.(厳島幸子訳『エイジレスセルフ』筑摩書房、1989年。)

Kaufman, S. R., 1994, "reflections on 'The Ageless Self'" in Shenk, D. and Achenbaum, W. A. (eds) *Changing Perceptions of Aging and the Aged* , Springer Publishing Company, pp. 11-18

川崎末美、1987年「家族経歴と世代間の情緒関係」森岡清美、青井和夫編『現代日本人のライフコース』日本学術振興会、237-355頁。

河内哲郎、1993年「高年齢者と生きがい」安藤喜久雄編『人生の社会学』学文社、112-23頁。

Keith, P. and Wacker, R., 1996, "Sex roles in the Older Family" in Brubaker (ed.) *Family Relationships in Later Life*, 2nd Edn., Sage.

経済企画庁、1987年『新しい女性の生き方を求めて』。

木本喜美子、1995年『家族・ジェンダー・企業社会』ミネルヴァ書房。

木下滋、土屋栄二、森博美編、1998年『第二版　統計ガイドブック　社会・経済』大月書店。

北渓散士、1908年『女子と衛生』柏原奎文堂。

国際連合統計局原著編集、1993年『国連世界統計年鑑』原書房。

国際連合統計局原著編集、1993年『国連世界人口年鑑』原書房。

高齢社会アンケートを読む会、1995年『老いて都市に暮らす　町田市高齢者の肉声を生かす』亜紀書房。

厚生省、1998年『厚生白書』ぎょうせい。

古谷野亘、1993年「老化の社会学理論」柴田博ほか編『老年学入門』川島書店、41-50頁。

小山静子、1991年『良妻賢母という規範』勁草書房。

倉沢進編, 1993年『大都市高齢者と盛り場』日本評論社。

栗原彬、1997年「離脱の戦略」『岩波講座現代社会学13　成熟と老いの社会学』岩波書店、39-60頁。

Lally, M. E., and Black, M., 1979, "Older Women in Single Room Occupant Hotels", in *The Gerontlogist*, 19, pp. 67-73.

Langness, L. L., Frank, G., 1981, *Lives:an anthoropological approach to biography* Chandler and Sharp Pub., Inc..(米山俊直、小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門』

ミネルヴァ書房、1993年。)

Laslett,P.,1995,"Necessary Knowledge :Age and Aging in the Societies in the Past," in Laslet ,P.and Kertzer,D(eds) *Aging in the Past*,Univ. of California Press,pp.3-77.

Lee,G.R.,Netzer,J.K.,and Coward,R.T.,1995,"Depression Among Older Parents: The Role of Intergenelational Exchange",*Journal of Marriage and the Family* 58, pp.823-833.

Lemon,B.W.,Bengtson,V.L.,Peterson,J.A.,1972,"An exploration of the activity theory of aging",*Journal of gerontlogy*,27,pp.511-23.

Lewis,R.,A.,1990,"The Adult Children and Older Parents",in Brubaker,T.,H., *Family Relationships in Later Life*,Sage,pp.68-85.

Litwak,E.&Szelenyi,I.,1969,"Primary structures and their functions:kin, neighbours and friends," *American Sociological Review*,Vol.34,№4,pp.465-481.

Litwak,E.,1989,"Forms of Friendships Among Older peole in an Industrial Society," in Adams,R.G.,and Briezner,R.,(eds),*Older Adult Friendships*,Sage,pp.65-88.

Lofland,J.,and Lofland L.,1995, *Analyzing Social Setting:A Guid to Qualitative Observation and Analysis*,3rd.edition,Wadsworth Publishing Company.(進藤雄三宝月誠訳、『社会状況の分析』恒星社厚生閣、1997年)

Maddox,G.L.,(eds.),1987,*The ENCYCLOPEDIA of AGING*,Springer Pub.,Com..(エイジング大辞典刊行委員会監訳『エイジング大辞典』早大出版会、1990年。)

前田尚子、1988年「老年期の友人関係」『社会老年学』№28、58-70頁。

松浦勲、1992年「現代の老親と子」庄司洋子ほか編『現代家族のルネサンス』青木書店、194-219頁。

Meade,K.,(eds.)1993,*Women Come of Age:Perspectives on the Lives of Older Women*,Edward Arnold.

前市岡楽正、1993年「高齢者と定年問題」樺山鉱一、上野千鶴子編著『２１世紀の高齢者文化』第一法規、55-74頁。

毎日新聞社編、1987年『「女の気持ち」30年　①嫁姑ー老年』新評論。

正岡寛司、1996年「ライフコース研究の課題」井上俊ほか編『ライフコースの社会学』岩波書店、189-221頁。

松本康編著、1995年『増殖するネットワーク』勁草書房。

McCulloch,B.,J.,1990,"The Relationships of International Reciprocity of Aid

to the Moral of Older Parents," *Journal of Gerontlogy* Social Sciences,46,117-30.

三沢謙一ほか編著、1989年『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房。

三谷鉄夫、1991年「都市における親子の同別居と親族関係の日本的特質」『家族社会学研究』№8、139-149頁。

Mitterauer,M., Sieder,R.,1977,*VOM PATRIACHAT ZUR PARTNERSCHAFT* ,C.H.Beck'schen Verlagsbuchhandlung.（若尾祐司、若尾典子訳『ヨーロッパ家族社会史』名古屋大学出版会、1993年）

三浦文夫編『図説　高齢者白書』（各年発行）全国社会福祉協議会。

宮本益治編著、1993年『高齢化と家族の社会学』文化書房博文社。

宮田登、中村桂子編、1997年『老いと「生い」』藤原書店。

水嶋陽子、1996年「近代家族像のなかの老い」『年報人間科学』17号、237-252頁。

1997年「ゆるやかな転換」『年報人間科学』18号、215-230頁。

1997年「高齢女性分析における主婦役割の視点」『ソシオロジ』42巻2号87-101頁。

1998年「高齢女性と選択的親子関係」『家族社会学研究』10号(2)、83-94頁。

水田宗子他編、1996年『母と娘のフェミニズム』田畑書店。

Moen,P.,Erickson,A.,McClain,D.,1997,"Their Mother's Daughter?The Intergenenational Transmission of Gender Attitudes in a World of changing Roles",*Journal of Mariage and the Family*,59,pp.281-293.

Mogan,D.,H.,Bebbett,J.M.,Markides,1992,"Role Reversals in the Exchange of Social Support,"*Journal of Gerontlogy*,Social Sciences,46,pp.117-130.

森岡清美、1993年『決死の世代と遺書』吉川弘文館。

森岡清美、望月嵩、1997年「老親の扶養」『新しい家族社会学　四訂版』倍風館、136-147頁。

森岡清志、1994年、「定年後のパーソナルネットワーク」森岡清志・中村一樹編『変容する高齢者像』日本評論社、159-185頁。

牟田和恵、1990年、「明治期総合雑誌に見る家族像」『社会学評論』40(1)、12-25頁

1993年、「変貌する家族」石川実、大村英昭、塩原勉編『ターミナル家族』ＮＴＴ出版、2-22頁。

Mutran,E.,Reitzes,D.C.,1984,"Intergenerational Support Activity and well-being among the elderly," *American Sociological Review*,49,pp.117-30.

長津美代子、1997年「高齢者と家族」岡村清子、長谷川倫子編『エイジングの社会

学』、日本評論社、101-122頁。

中野卓、1981年『明治四三年京都－ある商家の若妻の日記』新曜社。

中野卓、小平朱美、1981年『老人福祉とライフヒストリー』未来社。

直井道子、1993年「エイジング　社会的役割の移行」梶田孝道、栗田宣義編『キーワード／社会学』川島書店、35-50頁。

1995年、『高齢者と家族』サイエンス社。

成田龍一、1990年「衛生環境の変化のなかの女性と女性観」『日本女性生活史第四巻近代』東大出版会、87-124頁。

日本マラマッド協会編、1996年『アメリカ短篇小説を読み直す　女性・家族・エスニシティ』北星堂書店。

新村拓、1991年『老いと看取りの社会史』法政大学出版局。

野口祐二、1991年「高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート」『老年社会科学』13、89-105頁。

野々山久也、1999年「家族ライフスタイル論の展開」『甲南大学文学部紀要（社会科学編）』第106号（近刊）。

野沢慎二、1995年「パーソナルネットワークのなかの夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房、175-234頁。

Oakley,A.,1974,*The Sociology of Housework*,Martin Robertson and Company,Ltd.（佐藤和枝・渡辺潤訳『家事の社会学』松籟社、1980年。）

O'Bryant,S.L.,1988,"Sibling Support and Older Widows Well-Being,"*Journal of Marriageand the Family*,50,pp.173-183.

落合恵美子、1993年「家事労働力不足の時代」石川実、大村英昭、塩原勉編『ターミナル家族』ＮＴＴ出版、79-102頁。

1994年『21世紀家族へ』有斐閣。

岡村清子、1992年「高齢期における配偶者との死別」『社会老年学』36号、3-14頁

1997年「職場からの引退と社会参加」岡村清子、長谷川倫子編『エイジングの社会学』日本評論社、45-79頁。

大村英昭、1986年「認知的不協和の理論」作田啓一、井上俊編『命題コレクション社会学』筑摩書房、67-72頁。

1993年「撤退の思想」樺山鉱一、上野千鶴子編著『２１世紀の高齢者文化』第一法規、233-248頁。

太田素子、1992年「老年期の誕生」宮田登、中村桂子編『老いと「生い」』藤原書店、154-200頁。

大谷信介、1993年「日本におけるパーソナルネットワーク研究の系譜と問題点(1)(2)」、『松山大学論集』、5巻3号239-254頁、4号595-616頁。

Plath, D.W., 1980, *LONG ENGAGEMENTS Maturity in Modern Japan*, Stanford Univ. Press.(井上俊・杉野目康子訳『日本人の生き方』岩波書店、1985年。)

Quirouette and Gold, 1992, "Spousal characteristics as predictors of well-being in older couples", *International Journal of Aging and Human Development*, 34, pp. 257-69.

Ropata, H.Z., 1996, *Current Widowhood*, Sage.

Rosow, I., 1974, *Socialization to Old Age*, UCLA.(『高齢者の社会学』早大出版会、1983年)

Rosow, I., 1985, "Status and Role Change Through the Life Cycle," in Binstock, R., H., &Shanas, E., (eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences*(2nd), Van Nostr and Reinhold Company, pp. 62-93.

Rossi, A.J., Rossi, P.H., 1990, *Of Human Bonding*, Aldine de Gruyter.

Rubin, H.J., and Rubin, I., S., 1995, *Qualitative Interviewing The Art of Hearing Data*, Sage.

佐伯胖、1980年『「きめ方」の論理』東京大学出版会。

嵯峨座晴夫、1993年『エイジングの人間科学』学文社。

笹谷春美、1994年「ジェンダーとソーシャルネットワーク」『平成五年度シニアプラン公募研究年報』(財)シニアプラン開発機構、117-138頁。

佐藤健二、「社会分析の方法としての「新しい社会史」」『社会科学紀要』33号、東京大学教養部。

柴田博、芳賀博、長田久雄、古矢野亘編著、1993年『老年学入門』川島書店。

嶋崎尚子、1995年「人生の軌道と移行の社会変動」『放送大学研究年報』第13号, 1-15頁。

シニアプラン開発機構編、1993年『現代サラリーマンの生活と生きがい』ミネルヴァ書房。

袖井孝子、直井道子、1979年『中高年女性学』恒内出版。

副田義也編、1984年『日本文化と老年世代』中央法規出版。

1993年「老年社会学の展望と批判」『岩波講座現代社会学13 成熟と老いの社会学』岩波書店、197-214頁。

Sontag, S., 1979, "The Double Standard of Ageing", Carver, V., Liddiard, P., (eds.) *An Ageing Population*, pp. 72-80.

総務庁長官官房高齢社会対策室、1996年『高齢者の生活と意識　第４回国際比較調査報告書』。

総務庁長官官房老人対策室、1990年『長寿社会と男女の役割・意識』。

Silverstein,M.,Litwak,E.,1995,"A Task-specific Typology of Intergenerational Family Structure in Later Life",*The Gerontlogist*,vol.33,no.2,pp.258-264.

Smithers.J.A.,1985, *Determined Survivors Community Life among the Urban Elderly*,Rutger Univ.Press.(吉井弘訳『都市に生きる高齢者たち』芦書房、1988年。)

Stoller,E.P.,1985,"Exchange Pattern in the informal Support Networks of the Elderly,"*Journal of Marriage and the Family*,47,pp.335-347.

須田木綿子、1986年「大都市における男子一人暮らし老人のSocial Networkに関する研究」『社会老年学』№24、36－51頁。

鈴木由美子・グループわいふ、1989年『三世代同居』有斐閣。

Szinovacz,M.(eds.),1992, *Families and Retirement*,Sage.

『旅人われら』編集チーム、1998年『旅人われら　東京女子大学の卒業生たち』恵雅堂出版。

高橋博子、1990年「これからの老人問題」利谷信義、大藤修、清水浩明編『老いの比較家族史』三省堂。

高橋久美子、1980年「定年退職後の夫婦適応」『社会老年学』13号、21-35頁。

高橋勇悦、高荻盾男編、1996年『高齢化とボランティア社会』弘文堂。

高石浩一、1997年『母を支える娘たち』日本評論社。

高岡優子、1992年「アジアにおけるエイジング」浜口晴彦、坂田正顕編著『 世界のエンジング文化』早稲田大学出版部、3－14頁。

武石恵美子、1994年「ポスト「孝行社会」の親と子」日生総合研究所編『日本の家族はどう変わったか』ＮＨＫ協会、237-285頁。

玉野和志・前田大作・野口祐二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang、1989年「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」『社会老年学』47(3)、350-365頁。

Tan,A.,1989,*The Joy Luck Club*.(小澤瑞穂訳『ジョイラッククラブ』角川文庫、1992年。)

樽川典子、1984年「老年期の家族役割と夫婦関係」副田義也編著『日本文化と老年世代』中央法規出版、149－194頁。

立川昭二、1996年『江戸　老いの文化』筑摩書房。

東京女子大学ＳＳセミナー、1995年『高齢期の展望』非売品。

東京都住宅局、東京都福祉局、町田市、1996年『都営森野五丁目第２地区における

シルバーハウジング・プロジェクト事業計画及び推進計画　報告書』非売品。

鶴見和子、1967年「女の自己改造能力」『思想の科学』七月号、8-19頁。

東京都老人総合研究所、1986年『定年退職に関する長期的研究(2)』。

東京都老人総合研究所、1991年『定年退職に関する長期的研究(3)』。

上野千鶴子、電通ネットワーク研究会、1988年『「女縁」が世の中をかえる』日本経済新聞社。

Uhlenberg,P.,1980,"Death and Family", *Journal of Family History* 5 Fall, pp.313-320.

大和礼子、1996年「中高年男性におけるサポートネットワークと「結びつき志向」役割の関係」『社会学評論』47(3)、350-365頁。

山崎正和、1990年『日本文化と個人主義』中央公論社。

湯沢雍彦編、1980年『世界の老人の生き方』有斐閣新書。

湯沢雍彦、1987年『図説　現代日本の家族問題』ＮＨＫ出版。

Walker,A.J. and Pratt,C.C.,1991,"Daughter's Help to Mothers:IntergenerationalAid versus Caregiving",*Journal of Marriage and the Family* 53,pp.3-12.

Wallman,S.,1984, *Eight London Households*,Tavistock Pub.（『家庭の三つの資源』河出書房新社、1996年。）

Wallace,S.P.,1992,"Community Formation as an Activity of Daily Living:The Case of Nicaraguan Immigrant Elderly",*Journal of Aging Studies*,Vol6(4),pp.365-383.

Wenger,G.C.,1992,"Dependence,Independence and reciprocity after eighty" in *Aging Self and Community*,JAI Press,pp.151-174.

Wilson,G.,1995,"Changes in gender Roles in AdvancedOld Age" in Arber and Ginn(eds.), *Connecting Gender and Ageing*,Open Univ.Press ,pp107-8.

Woodward,K.,1995,"Tribute to older Women:Psychoanalysis,feminism,and ageism"in Featherstone,M.and Wrenick,A.(eds.)*Images of Aging*, Routledge pp.79-96.